昭和60年７月１日号（毎月２回１日、15日発行）第28巻・第13号　通巻634号　昭和54年６月２日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
13
7.1.



ソ日共同取材

ソ連の学校教育――伝統と改革 ⑤

国連婦人の10年とソ連の婦人

1週間続く学生の歌の祭典

第13号　1985年7月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　神戸まつり（5月17—19日）のパレードに参加した姉妹都市リガの代表（カメラ　K・デリバス）

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141　東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101　東京都千代田区神田神保町1—44
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。



量産体制に移った海洋掘削装置〝シェリフ〟

本誌記者 アレクサンドル・トゥルンダエフスキー
カメラ A・ワルフォロメーエフ



完成したリグ

作業を終えてリグ〝シェリフ〟から退去する工員たち

いまソ連は大陸棚油田の探鉱・開発設備を増産している。本誌のアレクサンドル・トゥルンダエフスキー記者とアレクセイ・ワルフォロメーエフ・カメラマンは、北極海向けの海洋掘削装置の量産を昨年から始めたブイボルグ市（レニングラード州）の造船所を取材した。

巨大な鋼鉄製海洋掘削装置（リグ）の全体像を望見するには、よほどリグから離れなければならない。リグの上で働いている人々は、巨人のガリバーを旅立たせるために鎖をはずそうとしている小人たちそっくりだ。アンカーを揚げる準備が進められており、明朝出航の予定だ。

このリグはいわば船と掘削井の合いの子で、すでに同型のリグは2基ソ連の北極海地方の沿岸付近で操業しており、ムルマンスク（ソ連欧州部の北方）の地質技師たちが乗っている。やがてムルマンスクは、ブイボルグ造船所製〝シェリフ（大陸棚）〟型リグの船籍港になるだろう。

さてこのリグを開発するに当たっては、海上を移動するためのすぐれた航行性能と掘削のさいのリグの安定した固定という、二つの相反する要求を満たさねばならなかった。

リグで働くことに慣れるまでのクルーは苦労の連続である。これまで海上を船で自由に動くことに慣れていた船員たちのここでの仕事はただ一つ、潮の流れやどんな波風に対してもリグを掘削地点にしっかり安定させておくことである。一方、掘削関係のクルーはいつもの固い地面が足の下にないために最初はきわめて居心地の悪い思いをした。

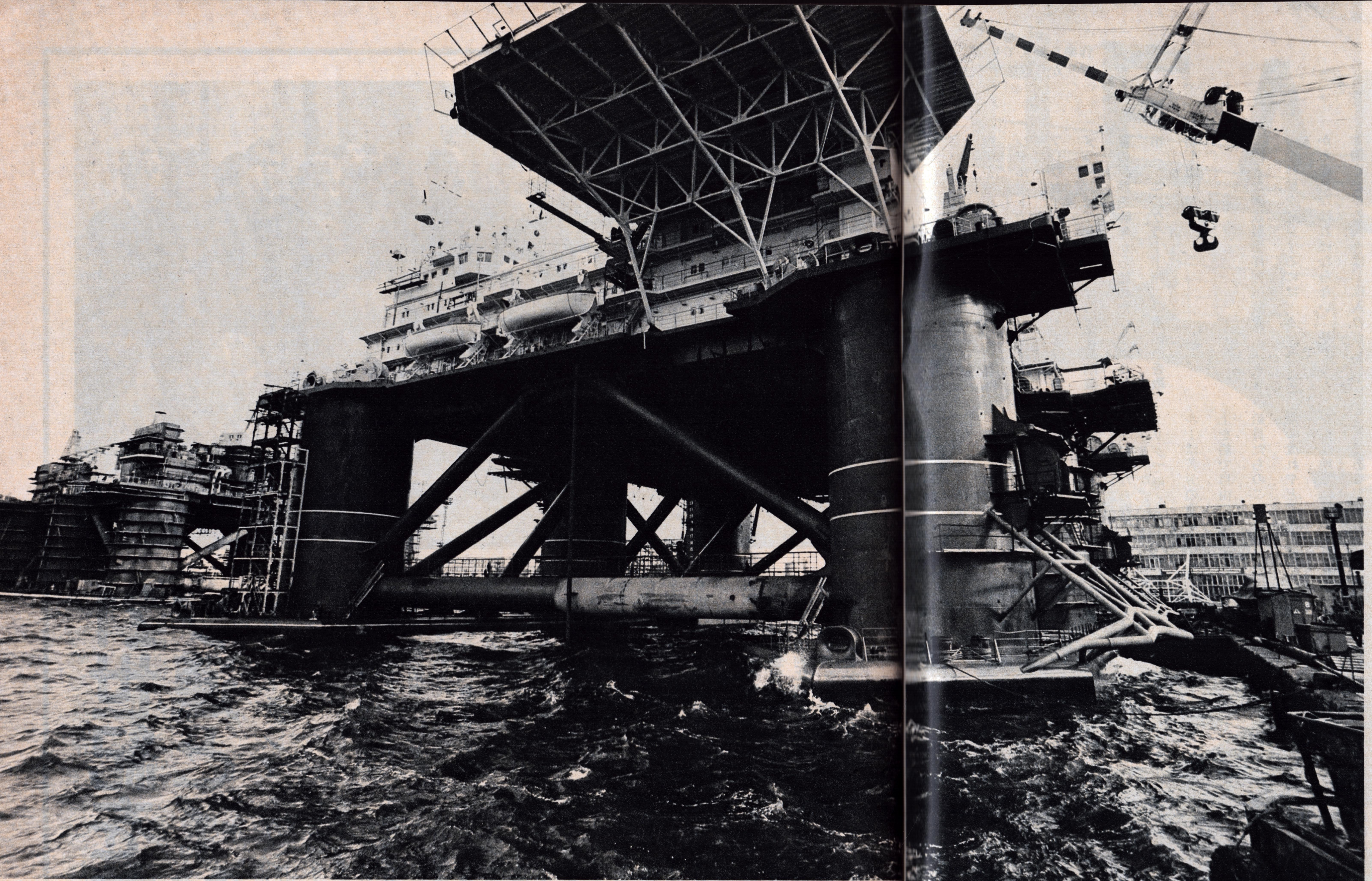
ゲオルギー・ポリャージン造船所長はリグの開発、建造までの苦労をこう話してくれた。

「ブイボルグ造船所の技術陣と労働者のすぐれた技能と優秀な設備のおかげで、新型リグの量産に素早く移ることができた。これまで一万t級以下の船の建造のさいは大型ブロックとセクションの流れ作業方式をとり、これらのブロックとセクションを最終的に船台で組み立ててきた。屋内作業は労働条件を改善し、組立作業を速めるメリットがある。われわれはプラットホーム建造のときも流れ作業方式を大体そのまま守った。しかし生産量は増えたが、この地方では労働力が足りないので、労働者を募集することができなかった。そこで工程を合理化し、コンピューター制御の自動化生産体制に移行することにした。また大型ブロックを組み立てるために起重力一四〇〇t、リフト高一二〇mの浮きクレーンが設計された」

バースに係留されている高さ一〇〇mのプラットホームは、ブイボルグ市の地盤である花こう岩の岩盤のように揺るがない。リグの総重量は六〇〇〇t以上。2基のポンツーン（浮きタンク）が〝基盤〟の役目を果たしている。事実上ポンツーンは二つの船体ともいうべきもので、それぞれ長さは92m、幅15m、高さ6mである。その上に高さ8m、直径約10mの6本の安定脚柱が立っている。プラットホームが掘削地点に着くと、ポンツーンのタンクに水が注入され、デッキは安定柱の半分まで沈む。

プラットホームを坑井の上に安定保持するために、特殊なタグボートが8個のアンカーを方々に配置する。三つの独立したモニタリング系は、リグが坑井の軸心からほんのわずかはずれても、それを記録する。誤差が出たとの信号を受けるとそのつど、リグのコンピューターはアンカー用ウインチを調整する。リグは風力6バールの風でも掘削地点上から少しも動かない。

坑口の上方の設備は深海潜水機器を使って海底で組み立てられる。坑口から海面まで頑丈な鋼管が立っている。鋼管の内部にはビット（刃先）付きのドリリング・シャフトが回転している。坑井には石油とガスの突出を警告する効果的なシステムが備えてある。また泥水の閉鎖循環システムが開発された。循環泥水はビットの潤滑油となり、油

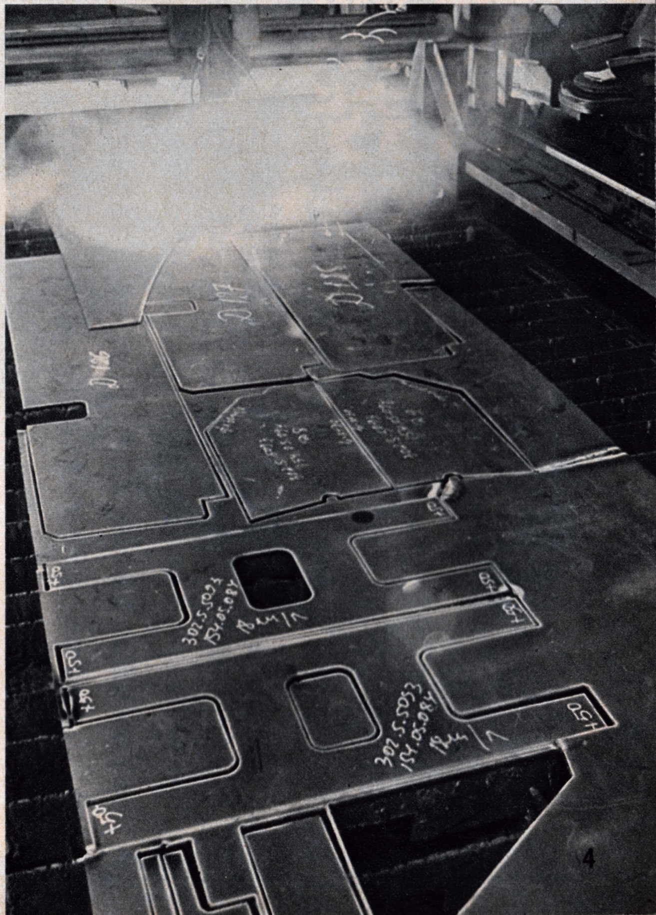


井から掘り屑を運び出す。全体としてこのリグは、海洋の汚染防止に関する国際協定のあらゆる要求にかなっている。

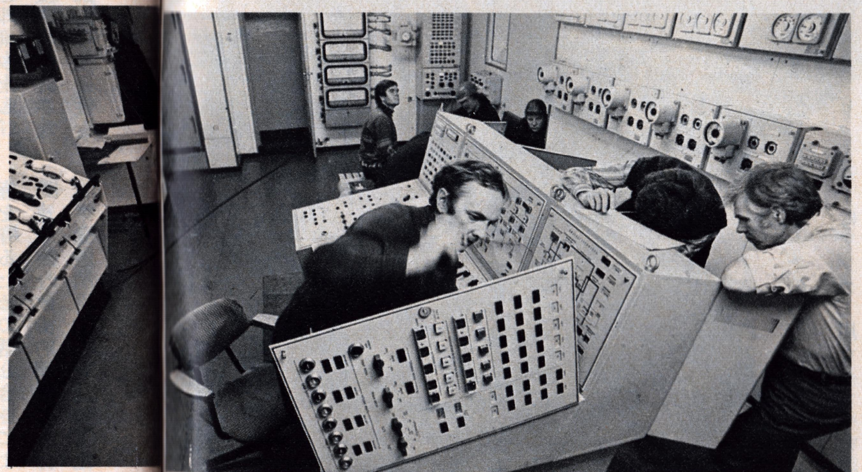
主甲板の建物は制御、技術、居住の三つのブロックから成っている。断熱、暖房が完備していて、どんな寒さでもクルーはシャツ1枚で働くことができる。居住棟には80人収容の2人部屋、食堂、集会室、サウナ、その他の生活サービス室がある。沿岸の当直基地とリグで働く人々との連絡にはヘリコプターや専用の支援船が使われている。

……最後の準備が完了した。貯蔵庫内や貨物甲板には海上の生活や作業に必要なあらゆるものが置いてある。船員たちが係留ロープをゆるめると、4隻のタグボートに引かれた巨大なリグ（排水量一万二〇〇〇t）はブイボルグ湾の狭い水路をバルト海に向かってゆっくりと進んで行く。

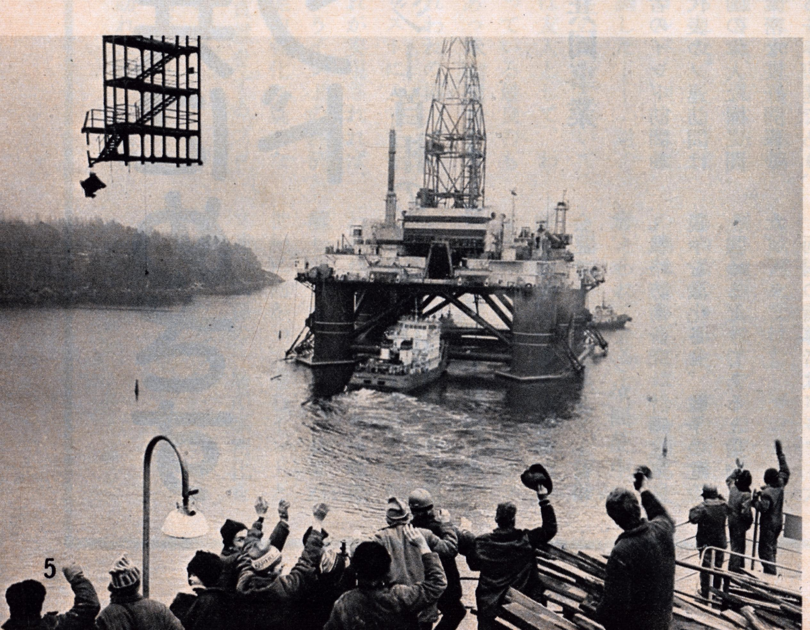
▲造船所の桟橋に係留中のリグ



右端　リグの胴部の被覆金属板の裁断は、コンピューターに入力されたプログラムに従ってプラズマ切断で自動的に行われる。



▶中央制御盤の最後の点検



◀最初の旅路についたリグ

21世紀を共にめざすソ連とインド
――ラジブ・ガンジー首相のソ連訪問

本誌記者 イーゴリ・ダニーリン



▶ 5月21日、モスクワのクレムリンで行われたゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長とラジブ・ガンジー・インド首相の会談の模様。



▼ 5月22日、ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長とガンジー・インド首相はクレムリンで二つの協定に調印して、文書を交換した。

「数十年が過ぎて行き、両国の世代交代も進んでいるが、ソ印友好協力関係は上向線をたどって発展している。これは両国関係が同権と相互の尊敬、現代の根本的問題に関する両国の立場の一致あるいは類似点を基盤にして成り立っているからである」

5月21日、クレムリンで開かれたラジブ・ガンジー・インド首相歓迎夕食会でM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長はこう述べた。

ソ印首脳会談（5月21―26日）の過程で、二〇〇〇年までの経済・貿易・科学技術協力の基本方向に関する協定と両国間の経済・技術協力協定の二つの文書が調印された。

最大の共同事業

「ソ連指導者のインド訪問およびインド代表のソ連訪問はすべて、両国の偉大な国民間に存在する緊密な友好関係の強化における一歩前進であり、平和を促進するものである」

――ラジブ・ガンジー首相はこう声明した。

ソ印会談では、諸国民の運命にとってかつてないほど危険な状態にある現在の国際情勢下の諸国民の平和と安全の諸問題に、大きな関心が払われた。両指導者は、地上における軍拡競争を即刻中止し、宇宙にそれが及ぶのを許さないようにする課題の重要性を強調した。モスクワでの記者会見でラジブ・ガンジー首相は、ワシントンが開発中の〝戦略防衛研究〟計画は軍拡競争を激化させ、戦争の危険を強めるだけであると指摘した。

両国の指導者はアジア・太平洋地域における緊張の高まりに対し憂慮の念を表明した。米国の軍事基地の拡大と軍事的プレゼンス強化の結果、インド洋水域に危険な状況が保たれていることが指摘された。ソ連とインドは、西南アジア諸国の内政に対する外部干渉に反対し、同地域の国家の主権を守るための話し合いによる速やかな政治的調整を支持し、全般的平和と安全の強化を支持している。

ゴルバチョフ書記長の言葉によれば、今日アジアにおける平和と安全の保障問題は、欧州に劣らず先鋭で切実である。これに関連してゴルバチョフ書記長は、アジアの安全の問題に対するアプローチの中でアジア諸国の努力を統一するのに賛成すると述べた。そのためには二国間の交渉や多国間の協議、将来の見通しとしては意見交換と建設的解決の共同探求のための全アジア・フォーラムのようなものの開催にいたるまでのさまざまな方法が役立つだろう。

「われわれの最大の共同事業は平和である」――モスクワの市民代表たちとの会合でラジブ・ガンジー首相はこう述べた。

協力のプロジェクト

30年前、経済、科学技術、文化・教育分野におけるソ印協力の端緒となった協定が調印された。

ラジブ・ガンジー首相はクレムリンでの演説で、「わが国の経済の近代化というこの大事業において、われわれは、ソ連側のこの上なく貴重な相互理解と協力に出会っている。あなた方はわが国の鉱山業、冶金業、機械工業の創設において、われわれにとって特に重要な貢献をした。われわれはこの援助を正当に高く評価している」と語った。

クレムリンでの交渉では、今後15年間の経済、貿易、科学・技術分野におけるソ印協力計画が審議され、具体的な対象が決められた。

M・S・ゴルバチョフは次のように強調した――「対インド協力のどの分野においてもわれわれは友人として、われわれが持っている最良のものを分かちあっている。そして今日、われわれの協力プロジェクトのリストに入っているのは、それが実現されれば、新世紀に向かうインドの経済発展と防衛能力強化に疑いなく価値ある貢献をするプロジェクトである」

インド首相がベロルシアとキルギスを訪れた時、両共和国の指導者は、個々の産業部門・企業のインドとの協力ぶりを話し、協力関係を拡大する準備があると表明した。

幸先のいい前兆

ラジブ・ガンジー首相のモスクワ到着、ミンスクおよびフルンゼ旅行中は雨であった。だが悪天候は妨げにはならなかった。インド首相はいたるところで温かく、心のこもった歓迎を受けた。ガンジー首相に随行したインドの記者たちの話によると、客の到着日の雨はインドではいい前兆と考えられているそうだ。

帰国を前にラジブ・ガンジー首相はソ連記者団に次のように語った――「モスクワではソ連の指導者たち、特にゴルバチョフ書記長との非常に有益な話し合いが行われた。われわれは互いにより一層理解し合えた。これは、共に21世紀に向かって進むインドとソ連の関係の一層の緊密化を促進するだろう」

東アジアと太平洋北西地域の安全保障

――来日したS・L・チフビンスキー教授にインタビュー



科学博を訪れたチフビンスキー教授

有名なソ連の学者S・L・チフビンスキー教授（67歳）が来日し、5月11日から23日まで滞在した。教授はソ連科学アカデミー正会員であるほかに、ソ連外務省付属外交大学院総長、ソ連科学アカデミー歴史学部（東洋学研究所など七つの研究所がある）の書記などの要職についている。教授はシナ学関係などの多くの労作を著しており、ソ連のシナ学の権威の一人である。

チフビンスキー教授は学問上の業績のほかに、経験に富んだ外交官としても有名だ。中国と英国のソ連大使館付き参事官を務め、また6年間パリのユネスコ執行委員会の委員であった。さらにまた教授は戦後始まったばかりのソ日交渉にかかわったことがあり、一九五六年から五七年まで駐日ソ連代表部首席だった。

こんどの訪日は読売新聞主催の5ヵ国〔民間学者〕会議と、恒例の第7回日ソ歴史学者シンポジウムに参加するためであったが、本誌のM・エフィーモフ記者はチフビンスキー教授を訪ねて主としてアジア・太平洋地域の国際情勢について質問した。

――アジア・太平洋地域の国際情勢の現状をどう思うか？

平和と安全にとって現実の脅威となる要因がいくつかあるのが特徴だと思う。最近アジア・太平洋地域も西欧やインド洋沿岸地域と同じように、ソ連などの社会主義諸国に向けられた軍事的前進基地に変わろうとしている。極東と太平洋沿岸地域に駐留する米軍兵力は前例のないほど増強されつつある。この地域には在欧兵力に次ぐ在外兵力をもつ米軍集団がつくられており、その維持費に毎年四〇〇億ドル以上が支出されている。ソ連の極東国境とソ連以外の社会主義諸国の国境近くに米国は何十もの大軍事基地と三〇〇以上の軍事施設を配置している。最近になってこの地域の米軍部隊の兵力は著しく増強され、しかもこれらの部隊の核装備が続けられている。

アジア・太平洋地域は米国の核戦力の主要なセンターの一つに変貌しようとしている。米第7艦隊には核兵器を装備した水上艦艇と潜水艦が編入されている。これらの米艦艇には一九八三年の中頃から巡航ミサイル「トマホーク」の装備が始まった。

米国は太平洋の北西部に北大西洋条約機構（NATO）式の軍事同盟をつくろうと強く望んでいる。ところが、この新しい軍事ブロックがまだ最終的にでき上がらないうちに、米国政府は極東における米国との多国間および二国間の軍事同盟とNATOブロックとの密接なつながりを事ごとに強調している。この計画では日本が特別な関心の対象になっている。

米国はアジアにある米国の同盟諸国の領土を、対ソ核戦争の前進基地にする路線を活発に進めてきた。すでにこれまで南朝鮮と日本に持ちこんである核兵器のほかに、米国政府は極東にあるソ連の工業施設に核攻撃を加えるのに使用する巡航ミサイルと戦闘爆撃機F16Eを両国の領土内に配置することを決定した。その第一陣であるF16E戦爆機48機が三沢を基地として日本領土に配置され始めた。

米国はアジアの同盟諸国の軍事活動を直接ペンタゴンの指導下において調整しようとしている。この数年間アジ

ア・太平洋地域で定期的に実施されている大規模な米軍との合同演習は、こういう背景を頭において見なければならない。

また露骨な挑発的性格をもった米国海軍の大演習がソ連の極東沿岸水域で頻繁に行われるようになった。空母を含む大艦隊が北太平洋の、カムチャツカ近くの水域に2回も姿を現した。また海兵隊をのせた米国の上陸用艦艇が戦後初めてオホーツク海、日本海へ派遣された。

弾道ミサイル搭載の原子力潜水艦を基幹とする米国の海上発射戦略ミサイルが配置されているのもオホーツク海・日本海地域である。この原潜のなかには、トライデントI型ミサイル搭載の新型のオハイオ級ミサイル潜水艦が含まれ、まずこの地域の軍事パトロールを行っている。これらの行動計画の立案者は、模擬核紛争の仮想敵となっているのがソ連であることを隠していない。

この地域で米国がとっている基本路線を簡潔に総括すると、米国はその核戦力を増強し、ソ連を包囲して圧迫を加えるという米国の核戦略にこの地域の国々を取り込むということに尽きる。実際に、アジアにおける米国の同盟諸国は核の人質となり、緊急事態でも自国民の運命を左右する決定を下すことができなくなっている。

――この地域の情勢を安定させるために、ソ連は最近どのような重大な手を打ったとあなたはお考えか？

ソ連としては、太平洋は諸国民を引き離さず近付ける平和と善隣の海となり得るし、そうなるべきだと考えている。ソ連はアジア・太平洋地域の緊張を弱めるために大きな努力を傾けてきたし、これからも傾けるであろう。

一九七〇年代末にソ連は、この地域のすべての国々の共同の努力を基に、平和を守り安全をつくりだそうとするアジア諸国の努力を一本化するという構想を提唱したことがある。そのときの構想の内容を発展させてソ連の指導者たちは次のような原則を建て前にしたアジアの平和綱領をまとめた。その原則とは、国家間の関係に力を行使しないこと、領土の奪取を許さないこと、紛争の平和的解決、主権と国境の不可侵を相互に尊重すること、内政の不干渉、同権と互恵に基づく経済協力などの協力、どの国の国民も自らの運命と天然資源を自由にする権利、社会・経済的変革を行う権利をもつことなどだ。

この平和綱領は欧州の経験とか、ソ連と多くのアジア諸国との関係の経験とか、アジア大陸の平和的発展に関するアジア諸国の願望と創意などを考慮に入れたものであり、アジア諸国の関係の緊張を克服してその緩和を確立するねらいをもったものであった。

一九八一年のソ連共産党第26回大会で提唱された、極東地域における信頼醸成措置を作成して適用する提案も、やはり同じ目的を追求するものであり、その信頼醸成措置についてソ連はすべての関係諸国と具体的交渉に入る用意があるというものであった。この信頼醸成措置はたとえばソ連と中華人民共和国、ソ連と日本、インドシナの社会主義諸国とASEAN（東南アジア諸国連合）諸国のように2国間、もしくは二つの国家連合組織間でまず実現して差し支えないと、当時ソ連は説明した。この場合欧州で実際にやった経験から、軍事面での信頼醸成措置（軍事演習、軍隊の大規模移動に関する通報）、通商経済協力面の信頼醸成措置などというやり方を借用してもよい。その場合極東地域の特殊性を考慮してもかまわないのは、もちろんである。どんな国も意見を出し合ってこのような信頼醸成措置を考え出せばよい。極東および太平洋沿岸地域の情勢が現在のように悪化しつつあるとき、あのときのソ連の提案の緊急性は、そのまま変わらないどころか、かえってその切実度を増している。

ソ連は単独に、あるいは他の社会主義諸国と共同で、海洋での海軍の活動の制限と海洋における軍拡競争の抑制を目的とした幾つかの具体的な平和提案を出した。

一九八二年の第2回国連軍縮特別総会に上程されたソ連のメモランダム「増大する核の脅威を回避し、核軍備競争を抑止しよう」のなかでは、軍事パトロール水域からミサイル搭載潜水艦を引き揚げ、その航行を相互に取り決めた境界内に制限すること、潜水艦搭載新型弾道ミサイル体系の展開を制限すること、長距離海上発射巡航ミサイルの展開を行わないこと、海洋水域、とくに船舶の航行の頻繁なシーレーンが通っている地域への信頼醸成措置の拡大などが特別に提案された。

第38、39回の国連総会でソ連は、大海軍列強に紛争水域もしくは自国の海岸から遠く離れた水域で海軍の活動を拡大しないように呼びかけた決議案や、この問題や、海軍軍備の削減について大海軍列強やその他の関係諸国が話し合いを行うように提案した決議案を支持した。ソ連はこれらの問題を一括解決する用意があるし、また太平洋を含む具体的な海域に適用する用意がある。

――日本の新聞雑誌で、ソ連がこの地域の軍事力を増強しているというような記事をよく読むが、これについてどう考えるか？

核軍拡競争を極東と太平洋に持ち込もうとしている米国政府の路線にソ連は無関心でいられないし、こういう情勢の下では極東の諸地域の防衛を強化しないわけにはいかないのは、しごく当然である。

日本の本州に米国の攻撃兵器を配置しようとする米日両国の計画に関連して、ソ連は一九八三年11月日本政府に向けた声明を出し、そのなかで、米日両国の計画が実現すれば、ソ連としては防衛的性格の対抗措置を追加してとらざるを得なくなるとの態度を明らかにした。

ソ連は自国の安全を確保するために力に訴えることをよしとする国ではない。ソ連は極東と太平洋沿岸地域に存在するもっとも焦眉の、平和の事業にとってもっとも危険な問題を一歩一歩、徐々に解決できるような措置を実現しようと望んでいる。

この地域の安全は、すべての関係国の正当な利害を考慮して保証され維持されなければならない。このことはなによりもまず、この地域と世界全体の平和にとって現実的にも潜在的にも危険な、緊張と不信の火種をなくすことに関係している。

アジアにおける米国の同盟諸国、第

一にはわがソ連の隣国である日本が、米国の核戦略のなかで果たしている役割にソ連は留意しないわけにはいかない。周知のように、自国が米国の軍事・政治戦略に加担していることを正当化するために、一部の者はいわゆる「ソ連の軍事的脅威」という宣伝的な文句を使って、自国の防衛力を強化するためのソ連の行動を歪めている。

「ソ連の軍事的脅威」の例の一つとして、彼らはソ連のアジア部地域にミサイルSS20が展開されたことをさかんに云々している。その場合、ソ連がジュネーブのソ米軍縮交渉で協定を達成するために、先にきわめて重大な譲歩を行い、核兵器の制限について合意ができれば、ソ連は欧州地帯に展開されているミサイルSS20をソ連の東部地域へ移動せずに、現地で解体する用意があると声明したことは、故意に無視されている。それだけではない。ソ連は、ソ連領土の東部へ届くような地域に、米国が新しい中距離核手段を展開しなければ、ウラル以東にミサイルSS20を配置するのをやめる義務を負う用意のあることを表明したのである。

これらの提案は欧州の緊張だけでなく、アジアの緊張をも緩和するための現実の道を開くものであったが、米国側に受諾されなかった。私の見解によれば、善意の持ち主ならばだれでも万策をつくして、現在ジュネーブで行われている交渉の成功を支援し、ここで達せられた合意が極東を含む世界全体の核対立を減らす役に立つようにすることが必要である。ソ連はこの方向に沿ってあらゆることをしている。

そのことを証明しているのが、ソ米双方が交渉期間中宇宙兵器の開発のモラトリアムを行うこと、貯蔵戦略核兵器の凍結を行うことについてのソ連の提案である。ソ連はこの方針を継続して、欧州での中距離ミサイルの展開とその他の対抗手段の増強を一方的に凍結すると宣言した。

この種の措置としてはこれが唯一のものではない。核兵器を最初に使用しないというソ連の一方的義務は一九八二年からいまでも有効である。一九八三年からは、宇宙に衛星攻撃兵器を最初に打ち上げないという一方的モラトリアムが効力をもっている。こういったソ連側からのイニシアチブのどれにも米国政府は善意のこもったジェスチャーを一つも見せず、応じなかった。従って、問題は、米国側が双方に受け入れ可能な協定を結ぶ用意を見せさえすればよいのである。だから、一方的軍縮をソ連に求めるのは正当ではないし、筋が通らない。

軍縮問題全体についての米国の政策とソ連の政策をひっくるめて同列に論じることも、同じくらい不条理である。一方では軍拡競争の制限と軍縮をめざすソ連の諸提案、他方では軍事予算の法外な膨張と宇宙への軍拡競争の拡大（いわゆるスターウォーズ計画）を伴う米国の軍事準備は、全世界に知れ渡っている。

――ソ中関係の現状と今後の見通しをどう考えるか？

現在のように国際情勢が緊迫している状況では、ソ連と中華人民共和国という二つの社会主義国家の関係が正常化することは特別の意義をもつ。ソビエト側は一貫して、善隣と平和共存の原則に基づくソ中関係の樹立に努めるとともに、相互尊重、互恵、そして、いうまでもなく、第三国の利益を傷つけないことを建て前にして、ソ中関係を正常化する構想を提唱し、またその考えを指針としている。

こういう方向に沿ってある一定のよい変化が認められている。ソ中両国政府の特別代表の政治協議が定期的に行われている。これまでにこうした政治的協議がすでに6ラウンドも行われ、現在は国際関係の緊急問題についても協議が行われている。ここ数年間にソ中貿易額は目立って増加し（一九八四年度は一〇億ルーブル、八五年度は一七億ルーブルまで増える見込み）、通商以外の、文化、学術、スポーツ、観光の分野の交流がスムーズに運んでいる。一九八四年12月I・V・アルヒポフ第一副首相が中国を訪問した成果はきわめて重要な意義があった。このときの訪問中に、経済・技術協力、科学・技術協力、さらに経済・技術協力、通商協力、科学技術協力に関するソ中委員会の設置などについてのソ中政府間の協定（複数）が調印された。これらの協定が実施されたら、ソ中両国間の相互理解と信頼は深まるに違いない。ことしの夏には中国の姚依林副首相がモスクワを答礼訪問する予定である。この3月にはソ連最高会議が中国の全国人民代表大会（議会）の代表団を迎えた。

ソ連共産党中央委員会の（一九八五年）3月総会では、ソ連が中華人民共和国との関係を真剣に改善したいと望んでいること、相互主義さえあればそれは完全に可能だと考えていることが強調された。

第2次世界大戦終結40周年を記念して

5月29日、東京のソ連大使館広報部で「第2次世界大戦終結40周年と現代・未来」をテーマにしたブリーフィングが開かれ、ソ連大使館のA・パノフ参事官、Y・ダニロフ陸空軍武官、N・ウーソフ海軍武官らが第2次世界大戦の意義や、第2次世界大戦の真実が西側で歪められて伝えられていることについて語り、出席した日本のジャーナリストたちの質問に答えた。（写真はその会場の模様）



ソ連の視点

ジュネーブ交渉第2ラウンドに臨むソ連の立場

ノーボスチ通信政治評論員　S・ベグロフ

ソ米核・宇宙軍備交渉の第2ラウンドが5月30日からジュネーブで始まった。

第1ラウンド終了後、米国の公式筋は、〝第1ラウンドでソ連は真剣な交渉を行う意思を示さなかった〟という主張を繰り返した。実際には、どうだったか？

第1ラウンドでソ連代表団は広範で具体的な提案を行った。

宇宙軍備については、攻撃用宇宙手段の開発（科学研究活動を含む）、実験、展開を禁止、ソ米両国が保持する対衛星手段（ASAT）を廃棄することを提案した。

戦略攻撃軍備については、それを抜本的に削減し、同時に新型長距離巡航ミサイル、SLBMを含む新型ICBM、新型重爆の開発と展開を拒否することを提案した。

中距離核軍備については、その配備をただちに停止し、続いて合意したレベルにまで削減することを提案した。米国のパーシングと巡航ミサイルが現在の配備地から完全に撤去された場合には、ソ連は自国のミサイルに英仏を上回る核弾頭を装着しないようにする用意がある。

ソ連側の立場に対する米国側の不満の原因を説明することは、むずかしいことではない。第1ラウンドの結果がかんばしくなかったのは、〝スターウォーズ〟計画をかかげることによって宇宙軍拡競争問題の検討と解決を米国側がサボタージュしたからだ。

しかし、宇宙での軍拡競争の防止と地上でのその停止を相互の関連において検討、解決するというグロムイコ・シュルツ合意（1月）は、ジュネーブ交渉の土台である。

米国側は、宇宙配備兵器開発が〝無害〟で〝是認のできる〟ものであることを立証するため、軍拡競争の新しい段階の〝ルール〟についてのみ対話を行う用意があることをほのめかした。しかし、軍拡競争の新たな展開のいかなる〝容認性〟も全く問題になりえないことは、〝スターウォーズ〟計画に対する全世界での抗議の高まりによっても裏付けられている。

ソ連は、それを未然に防ぐことを強調している。いかなる〝研究活動〟も世界を新しい兵器の出現という事実に直面させる以外の使命をもっていない。

このことを裏付けているのは、新しい兵器体系に関連したさまざまな装置のモデル約10種類がすでに開発され、宇宙への配備が予定されているレーザー兵器開発のための核実験が米国ですでに実施されていることだ。

米国は攻撃用宇宙兵器の開発を進めているが、その出現はソ米間の戦略バランスをくずし、戦略攻撃兵器の間断ない制限・削減プロセスの継続を促進する使命をもった一九七二年のABM制限条約をぶちこわすものだ。

ワシントンは、なにがなんでも先制確証破壊攻撃力を手に入れ、報復攻撃からのがれる可能性を確保しようとしている。こうした脅威に直面してソ連は、もし米国が地球の周辺軌道に戦争の新しい手段を展開することによって相手側を無力にすることに期待をかけつづけるならば、核報復攻撃手段のいかなる削減にも応じないと言明している。

SDI（戦略防衛構想）が〝人類を核兵器から救う〟とやらの米大統領の主張については、各国の軍事専門家や科学者が否定的な見解を述べている。地球全体が攻撃兵器の照準下に置かれかねない。そして、これは米国の核戦力の増大に決してブレーキをかけず、逆にそのテンポを速めるだけである。ペンタゴンの〝10年計画〟によれば、戦略核弾頭だけでも一万個から二万個に増やされるのだ。

もし米国政権が核兵器を無力にすることを本当に望んでいるのであれば、ソ連が提案しているようにいますぐに核兵器庫の削減に着手し、〝スターウォーズ〟への無駄な、無益な出費をやめることを、なぜやらないのか？

これをいますぐに始めるには、政治的意志が必要だ。ソ連は、宇宙空間に対衛星兵器を最初に配備しないと一方的に宣言することによってこのような政治的意志を発揮した。米国は、〝ソ連も宇宙兵器を開発している〟と主張しているが、ソ連は一九七二年の条約の範囲から逸脱するいかなる研究活動も行っておらず、攻撃用宇宙兵器も開発していない。

ソ連はジュネーブ交渉の成功を心から望んでおり、米国が理性の声に耳を傾け、その立場を改め、合意の達成へ政治的善意を発揮することを望んでいる。



友好的会談

ソ連共産党中央委員会とソ連最高会議幹部会の招きで訪ソしたホーネッカー・ドイツ社会主義統一党書記長・ドイツ民主共和国国家評議会議長は、5月5日ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長と会談し、現在の国際情勢のさし迫った問題について意見を交換し、地上における軍拡の停止と宇宙の軍事化防止が最優先の課題であることを確認した。

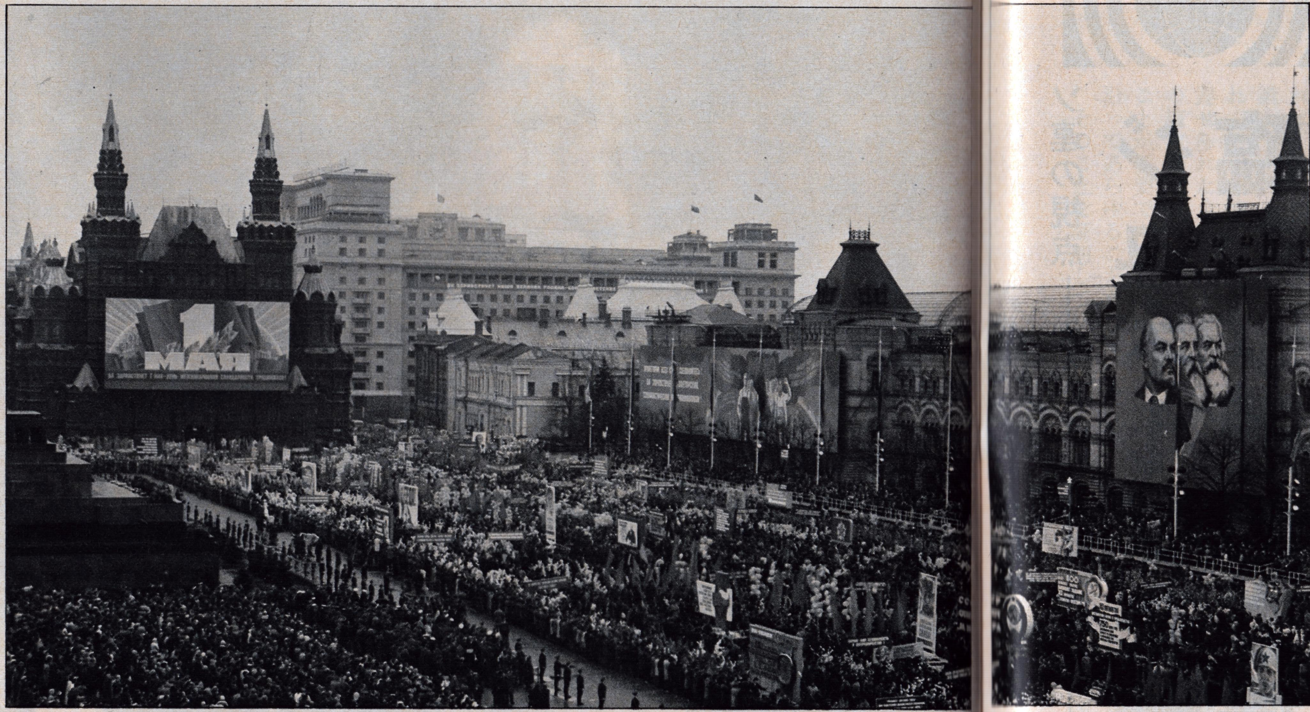
さらに軍国主義的、報復主義的政策をやめ、大戦および戦後の発展の結果である政治的、領土的現実を完全に承認することが、欧州の安全につながることが強調された。（写真はその会談の模様）



ニカラグア代表団との会談

4月29日ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は、ニカラグア代表団（団長はD・オルテガ大統領）と会談。双方とも両国の強まる協力に満足を表明した。書記長は米帝国主義の侵略的策動とたたかうニカラグアと連帯し、今後ともニカラグアの経済発展を援助し、政治的、外交的支援を惜しまないと強調した。

（写真はゴルバチョフ書記長とオルテガ大統領）



メーデーの祭典

5月1日のメーデーには、モスクワをはじめソ連各地で勤労者のデモ行進が行われた。モスクワのデモ隊の列は華やかに飾りつけられた赤の広場を行進し、党と政府の指導者たちにあいさつを送った。また世界一〇〇カ国余りから労組、労働運動代表団がこの祭典に参加した。



北海道の友好会館との協力



昨年9月に設立された北海道日ソ友好会館連絡協議会の代表団が、さる4月末初訪ソし、ソ連の国政担当者や社会活動家と会見、会談した。ソ連対外友好・文化交流団体連合会（対文連）と協議会との間の協定によると、双方は展覧会や芸能アンサンブルの公演などを通じて相互の協力を拡大する。

協議会代表団のメンバーは柴野安三郎（北海道日ソ友好文化会館）、瀬戸常蔵（稚内日ソ友好会館）、武藤正春（釧路日ソ友好貿易会館）、笠井勝雄（猿払日ソ友好記念館）、安部兵吾（羅臼町日ソ資料センター）らの各氏（写真上はクルグロワ対文連議長との記念撮影、右はグジェンコ・ソ日協会理事長との会談）

〝コンクールより、演奏会が好き〟

――カザフのバイオリニスト、アイマン・ムサホッジャエワ

本誌記者　マリナ・ルイクリナ　カメラ　Y・クイジン





カザフ共和国の首都アルマアタに住む農業技師ムサホッジャエフの4人の娘が一度に父の家へ集まると、ほとんどプロの弦楽四重奏団が出来上がる。第1、第2バイオリンは長女のライハンと三女のアイマンが、チェロは末娘のバヒトジャンが担当することになろう。ただ、ビオラの代わりに次女のラウシャンがカザフの民族弦楽器コブイズを弾くだろう（コブイズは胴はラクダの皮製で、馬の尻尾の毛を撚った二本の弦を弓で弾く）。

もう一つ確実なことがある。それは、長女のライハンが相当の音楽家で、自分をはじめ、ほかの妹たちがかつて卒業した11年制音楽学校の校長をしているとはいっても、第1バイオリンのパートは文句なく三女のアイマンに譲るだろうということだ。27歳のアイマンは、カザフ国立フィルハーモニーのソリストで、全ソ・コンクールや国際コンクールの入賞者であり、アルマアタのカザフ音楽院の教員をしている。

右　「コンサートで演奏するのは大好き！」というアイマン・ムサホッジャエワ

上　カザフ音楽院ホールのコンサートで演奏中のアイマン

下右　友だちと山に遊ぶ

下左　アイマンは自分の母校の特別音楽学校をよく訪れて、生徒たちの演奏を聴く。

ソビエト政権が樹立されるまでカザフスタンではクラシック音楽は全く知られていなかった。カザフ人たちは民族楽器で奏でられる自分たちの民族音楽だけを理解し、愛していた。一九二〇年代の中頃からはカザフスタンでも、伝統的な民族音楽の発展に力が入れられる一方で、巡業に来たロシアの一流音楽家たちの手でクラシック音楽が演奏されるようになった。カザフスタンの各都市に国立の音楽







学校や音楽専門学校が開設され、生徒たちは民族楽器の演奏だけでなく、バイオリン、チェロ、ピアノなどの演奏も学ぶようになった（現在、音楽学校は一〇〇以上、音楽専門学校が11ある）。一九四四年には共和国の首都アルマアタに国立音楽院が開校した。今ここには約一〇〇〇人の学生が学んでいる。三女のアイマンを除いて、ムサホッジャエフの三姉妹もこの音楽院を卒業した。

アイマンは別の道を進むことになった。特別音楽学校でバイオリンを学びながら中等教育を修了したあと、4人の姉妹の中では文句なく最も才能に恵まれていたアイマンは、特別音楽学校からモスクワ音楽院への推薦状をもらった。モスクワ音楽院の入学試験に首尾よく合格したあと、アイマンはソ連の有名なバイオリニスト、ワレリー・クリモフのクラスに入り、5年間ずっとその教えを受けた。今も同音楽院の大学院でそのクリモフの指導を受けている。

大学院に入ったあと、アイマンはアルマアタとモスクワの両方で生活している。モスクワへは年に3―4回、2―3週間ずつ出かけてくる。もちろん、その主な目的はクリモフの指導を受けるためで、アルマアタでの精進の成果を見てもらわねばならない。アイマンのモスクワ訪問はコンクールやフェスティバルへの出場準備と結びついていることが多い。

アイマンはモスクワでの夜はすべてコンサートや観劇で過ごすことにしている。アルマアタへも巡業に来るアーチストは多いが、コンサートのバラエティーという点ではやはりモスクワにかなわない。とくに外国の音楽家の公演についてはそうだ。

「すばらしい演奏会はどれも私にとっては音楽のレッスンですし、すばらしい演奏家はみな私にとっては先生です」と、アイマンは言う。「音楽家の生活というのは、絶えまないリハーサル、巡業と演奏会への準備です。バイオリンの練習に一日6―8時間とられます。やむを得ない急な用事が出来た時でも最低3時間の練習が必要です。ですから、夫のアスカルと休暇を取ってキルギスのイシククリ湖へ出かける夏を一年じゅう待ちこがれています。イシククリ湖ほど美しい所はソ連にも外国にも少ないですわ。

夫はアルマアタ大学の物理・数学部を卒業して大学院に在学中です。近いうちに博士候補論文の審査を受ける予定です。そろそろ子供をつくることを考える時かもしれません。でも、やっぱりコンクールが終わるまでは……

アルマアタ音楽院の学生たちの指導は本当に楽しく、やりがいのある仕事です。自分の仕事の成果がはっきりと現れます。それに、学生の指導は自分の技量を磨くことでもあるのです」

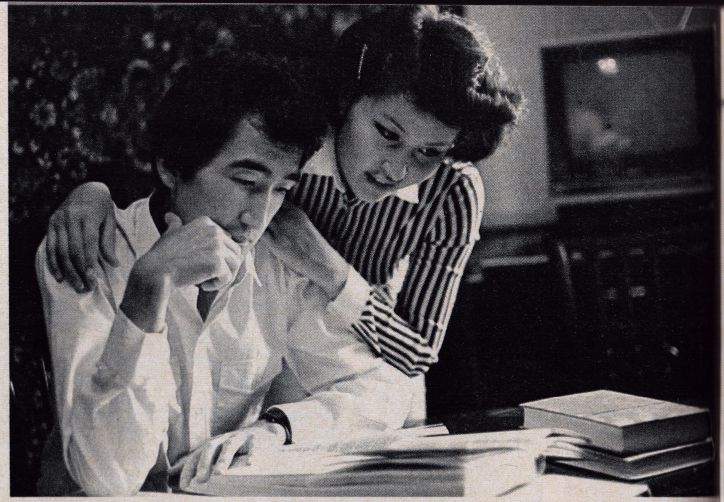
アイマンのレパートリーには古典や現代のバイオリン曲、それにカザフの作曲家の作品が入っている。アイマンはすでに何回も外国公演に出かけ、国内の一流ホールで演奏した。

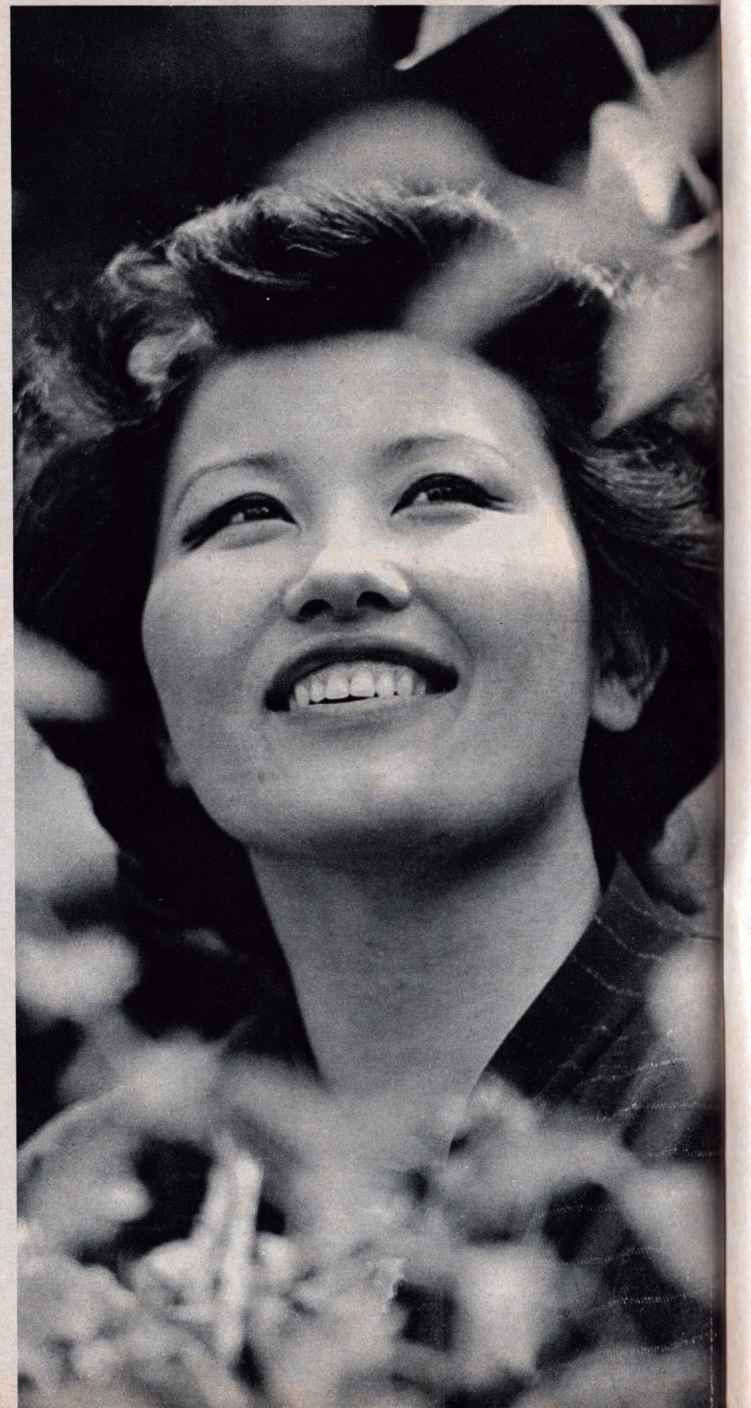
上　バイオリンの練習に1日6―8時間はとられる。

左上　夜、夫のアスカルと。

左下　故郷の自然がやはり最大のインスピレーションを与えてくれる。

左端　民芸作家の作品を売る店へ夫と一緒に。







一九八三年には東京で行われた第2回国際バイオリン・コンクールで5位になった。目下、ことしの11月にヘルシンキで開催される国際バイオリン・コンクールに出場する準備をしている。アイマンは語る。

「本当を言うと、コンクールはあまり好きではないのです。いつも物すごく上がってしまって、そのために実力よりもずっと下の演奏になってしまうのです。コンサートで演奏するのは非常に好きです。コンサートは練習の本当の総決算です。聴衆に満足感を与える——結局のところ、そのために私は生きているのです」



噴水のそばで



両親を訪れたアイマン



夫のアスカルとアルマアタのホテル"カザフスタン"の前で

エストニアの知識人の母校


タルトゥ国立大学の校舎


授業のあとの学生たち



エストニア共和国（バルト海沿岸）で高等教育を受けた者の三人にひとりは、この共和国唯一の総合大学——国立タルトゥ大学（タルトゥ市）の卒業生だ。欧州でも最大の学術センターのひとつであるこの大学は、三五〇年以上に及ぶ歴史をもっている。エストニアにソビエト政権ができてからタルトゥ大学の卒業生は延べ約二万五〇〇〇人に達したが、この数はその前の一〇〇年間の卒業生の総数を上回る。

学長のアルノルド・コープ教授にインタビューして、この大学のことをいろいろ聞いた（聞き手　レオ・ワイノ本誌記者）。

——いまタルトゥ大学のことをエストニアの知識人の母校と言っているが、そう言われるようになったのはいつ頃からか？

本校の建学は一六三二年のことで、当時タルトゥ市はスウェーデン領だった。教授も学生もだいたいスウェーデン人であり、第1次世界大戦の直前にはドイツ人だった。この大学を独自の民族教育の中心にしようとする動きは早くも19世紀の頃からあったが、実際にエストニア人の大学としての地位を得たのは、エストニアにソビエト政権ができた一九一八年だ。エストランド労働コミューンが成立して最初に出した政令のひとつでそうなったのだが、このソビエト権力はわずか半年存続したのち、民族主義的反革命勢力と外国の干渉軍の攻勢で倒れた。

——エストニアがソ連邦に加盟したのは一九四〇年だが、それ以前のブルジョア共和国だったあいだタルトゥ大学はどんな変遷をたどったのか？

本校がエストニア人の大学であるという点に変わりはなかった。生まれて間もないソビエト・ロシア政府の指導者だったV・I・レーニンは第1次世界大戦中ロシア中央部の諸都市へ運び出した図書などの貴重な学術財産をタルトゥへ返還せよという指令を出して大学を助けたが、それまであったロシアの学界とのつながりは中断されてしまった。

その頃授業は徐々にエストニア語に切り換えられ、エストニア語による学術用語がつくられて行った。エストニア語、エストニアの民俗学と民族学が発達した。タルトゥ大学はなるほどエストニア人のための大学とはなったが、当時はまだ国民全体の大学とはならなかった。学生のうち労働者・農民の子弟はそのわずか1%にすぎなかった。

また、これまでの伝統的な学問的交流を失ったために、タルトゥ大学の学問は視野が狭く、内容の貧弱なものとなった。なんと言ってもボトルネックは、ブルジョア政府からもらう予算が足りず、人員が不足していたことであった。ほんの一例をあげると、一九三〇年代にタルトゥ大学でエストニア語とエストニア文学を教えていたのはたった4人だった。現在この2学部の教員は38人、このうち10人が教授、13人が助教授だ。また現在では、エストニア科学アカデミーのエストニア語・エストニア文学研究所と本校は密接な協力関係にある。

——タルトゥ大学では講義はロシア語でやっているのか？

学生の18%はロシア語で講義を聴いている。エストニアには民族が26もいて、ロシア語以外に共通の言語を見つけにくいからだ。だが、残り82%はエストニア人で、もちろんどこの学部でもエストニア語で授業を受けている。エストニア人でない学生でもエストニア語での講義を受けられるくらいエストニア語のできる者が多い。教員の90%はエストニア人だから、これは都合がよい。

——エストニア共和国の人口の70%がエストニア人なのに、タルトゥ大学の学生のなかのエストニア人の比率が70%よりもかなり高いのは、どういうわけか？

わが共和国の中等学校を卒業した者は皆、ソ連全国のどの大学の入試でも受ける権利がある。この大学進学の権利を一番行使しているのはエストニアに居住している非エストニア民族の青年男女だ。エストニア人はどちらかというと自国内の大学で勉強する道を選ぶ。若干の珍しい専門を別としてどんな専門でもエストニア国内の大学で勉強できるからだ。だから、エストニア人の学生の比率が70%よりはるかに多くなるのは至極自然だ。ついでに言うと、エストニアにおける官公庁、学界、文化界、経済界の中堅の人々の民族的構成も結局これによって決まる。

——タルトゥ大学の卒業生はなにになるのか？

言語学者、文学研究家、経済学者や企業などの経済担当者、医師、法律家、教育家、ジャーナリスト、歴史家などになる。卒業生はエストニア共和国の国民経済のあらゆる分野で働いている。タルトゥ大学の卒業証書は高い権威があり、卒業生はふつうすぐれた専門家になるので、どこでも喜んで使ってくれる。本校はエストニアの学術的、文化的実力の形式にすこぶる大きな影響を及ぼしていると言ってもウソにはならないと思う。

バルト海沿岸3共和国

1週間続く学生の歌の祭典
“ガウデアームス”

カメラ　V・マークス



◀エストニアの民族舞踊



陽気な参加者



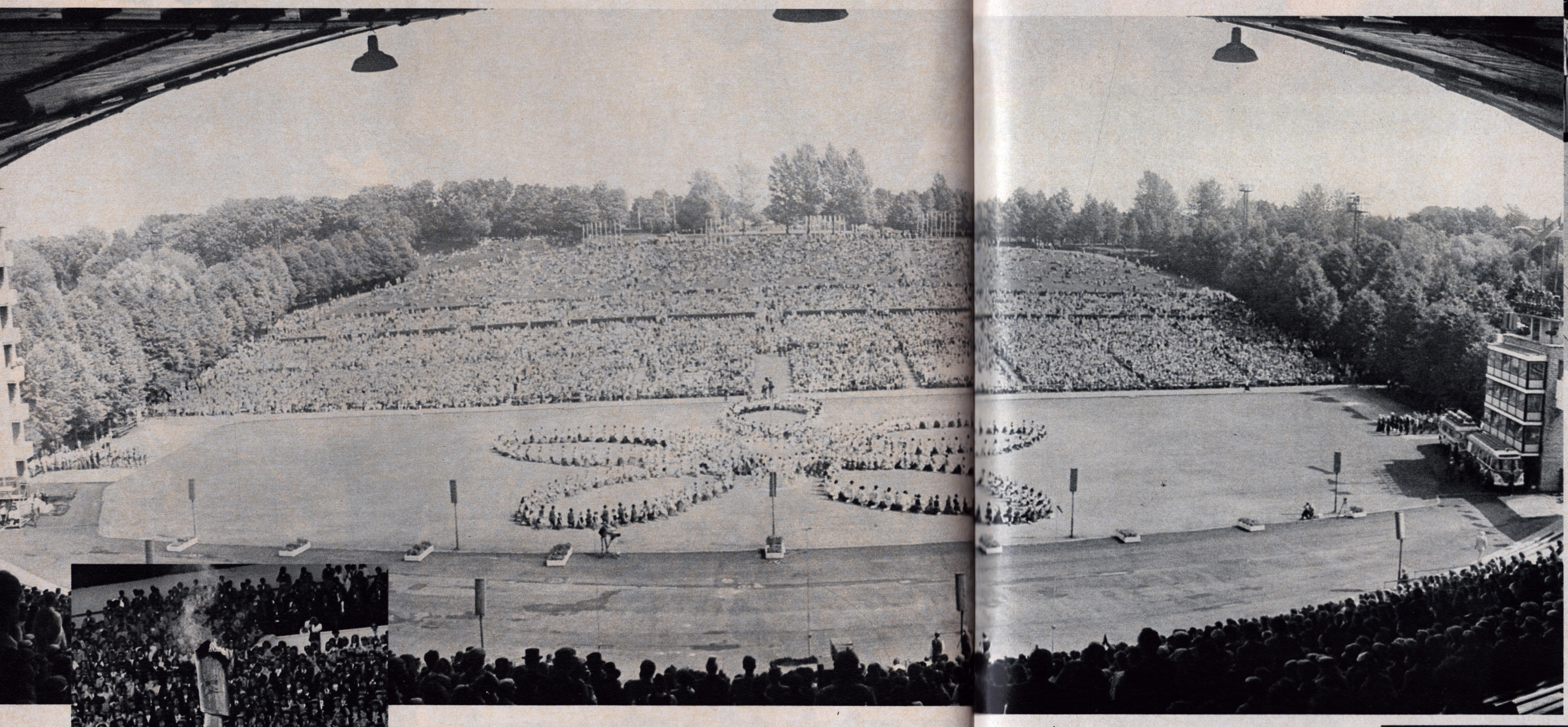
タリンで昨年の夏、行われた第9回
“ガウデアームス”の開会式

歌が好きなのは国民性だ、とエストニア人は主張する。彼らは勤労の次に歌を大事にする。エストニアの歌の祭典の伝統は前世紀にまでさかのぼる。そして今世紀五〇年代の末にタルトゥ大学の合唱愛好家たちが、3年ごとに夏の試験シーズンが終わったあと、バルト海沿岸の3共和国――エストニア、ラトビア、リトワの学生の歌と踊りの合同祭典を開くことを提案した。この祭典はラテン語で歌われる伝統的な国際学生賛歌の題にちなんで、"ガウデアームス（喜びなん）"と呼ばれている。









祭典の名誉幹部団に選出された人々（各大学の学長や著名文化人）

右上　参加者は歌って踊るだけではない。一同はヒューマニズムと平和、諸民族の友好を願い、自由のための戦士の記念碑に献花した。

右中　胴上げされる祭典の首席指導者で振り付け師のマイト・アグ

▲3万人の大合唱団を収容できる舞台から見た会場

バルト海沿岸3共和国の学生たちのこの祭典は、いままでも定期的に行われている。会場はそれぞれの共和国の首都――ビリニュス（リトワ）、リガ（ラトビア）、タリン（エストニア）が回り持ちで引き受ける。いちばん最近の通算9回目の"ガウデアームス"は一九八四年の夏タリンで開かれた。参加者全員が共通のレパートリーを覚えられるようにするため、祭典のプログラムは前もって準備された。だから祭典に参加する集団のメンバーは、自分たちの民族の音楽を宣伝するだけでなく、近隣の他の民族の音楽を知ることもできる。

祭典は1週間つづく。祭典の開催に必要な経費は三つの共和国の労働組合、大学管理部、高等・中等専門教育者が負担する。だから学生たちはただ、祭典の雰囲気を盛り上げることにだけ専念すればいいのである。



聖火の点火式。トーチはユーリー・ヌート・エストニア高等・中等専門教育相から学生の代表に手渡された。

祭典の開会に先立って、いつものように参加者たちのあでやかな街頭パレードが行われた。タリンには一〇〇以上の合唱団、オーケストラ、民族歌舞アンサンブルが集まったが、いずれも鮮やかな民族衣装で人目を引く。数万人の観衆が、陽気に歌いながら行進する学生たちを歓迎した。

やがて祭典が始まった。ソ連の作曲家ワノ・ムラデリが作曲した国際学連の歌の大合唱が開会を告げた。もちろん、



『喜びなん』も歌われた。つづいてリトワ、ラトビア、エストニアの音楽が響き渡る。各共和国の代表は、聴衆がそれぞれの共和国の音楽についてできるだけ十分な概念が得られるようにプログラムを作成する。

この祭典によって結ばれた男女も珍しくない。第9回ガウデアームスではエストニア農業大学の合唱団に加わってマルギト・ソーサルも出演したが、彼女の両親もやはりこの大学の合唱団のメンバーとして、第1回ガウデアームスに出演した間柄だった。

この祭典のすばらしさは、参加者が大学を卒業して技師や教師、農業技師や経済専門家になったあとも、民族舞踊や民族音楽にたずさわっている、という点にも見られる。プロの音楽家になる者も少なくない。

ラトビア人のイマンツ・コカルスは第1回祭典に出演した人だが、今回はラトビア統一学生合唱団の指導者としてタリンへやってきた。いまはソ連国家賞受賞者で、ラトビア音楽院教授・院長でもある。イマンツ・コカルスは言う――

「音楽はいまも昔も人々を団結させてきた。将来どんな職業に就くかに関係なく、すべての学生にとって、ガウデアームスに何らかの形で参加することは非常に有益だ」

右上　国際学生賛歌『喜びなん』の大合唱

右下　スタンドで踊るエストニアの学生たち

下　『喜びなん』を演奏するオーケストラ





戦勝40周年とモスクワの劇壇



ことしは多くの劇場が大祖国戦争勝利40周年を記念する新作を上演した。これらの新作は、歴史上特筆すべきこの出来事がひとりひとりの人間の運命にどんな影響を与えたかということがテーマになっている。

モスクワ芸術座はV・コンドラチエフの『局地的意義をもつにすぎない戦闘』（写真上）を上演した。この戯曲は作者がとくに芸術座のために書いたもの。戦局がきびしかった1942年を背景にして、ルジェフ市解放のために戦ったソビエト将兵の献身的な姿が描かれている。

モスクワ・ミニアチュア劇場で上演されたのは有名な詩人ミハイル・スベトロフ（1903～1964）の戯曲『ブランデンブルク門』（写真左上）。内容は出征した旧将兵の回想の形をとっていて、レニングラード戦線でもっとも激しい戦闘が行われた地区を1943年当時と、平和がもどってきたときの二つの時点で描いたものだが、いかにも奇抜な上演形式で大評判になった。芝居は劇場のロビーからはじまる。戦時中の交通整理兵の軍服姿の若い娘たちがロビーの各所に立って赤い手旗を振りながら、入場してきた観客を小ホールへみちびく。小ホールでは前線に着いた兵士の音楽家たちがコンサートを開いて、戦争中はやった歌謡や叙情小曲の演奏や詩の朗読をやっている。観客はコンサートで気分を出してから、大ホールへみちびかれて、いよいよ芝居を鑑賞するという凝ったおぜん立てになっている。

マールイ劇場が上演したのはベロルシアの若い作家A・ドゥダレフの『一兵卒たち』（写真左下）。終戦寸前の戦場が舞台で、勝利直前の戦闘で一群の兵士たちが死んでしまう姿を通して戦争の愚かさ、無意味さを強く訴えている。実際に参戦した経験のある作家たちの戦争文学が飾り気がなく、残酷なまでに写実的なのに比べて、この作品は非常に象徴的、比喩的なのが特徴。





サマルカンドの宝

シルクロードのまちサマルカンドのウズベキスタン文化・芸術史博物館には総計二万一〇〇〇点以上にのぼる古銭、貴金属製品が所蔵されている。そのなかには、美しい5世紀の銀杯（写真下）や、紀元前3世紀頃の古銭（写真右）など価値のある文化財が含まれている。この大半は中央アジアの古都サマルカンド一帯の発掘が行われたときの出土品で、古い歴史をもつこの都市の生活風俗を如実に物語るものばかりである。





文化トピックス

春のフラワー展



エストニア共和国（バルト海沿岸）の首都タリンで恒例の春のフラワー展が開かれた。会場はピリタ花卉ソフホーズの展示ホールで、色とりどりのバラ、カーネーション、スイセン、チューリップなどが同ソフホーズや共和国内の温室栽培農場から出品されて、美を競った。

国連婦人の10年とソ連の婦人

本誌評論員　ゲンリエッタ・レビンスカヤ

一九七五年12月の第30回国連総会で一九七六年から八五年の10年間を「国連婦人の10年」とすることが決定されてから、ことしで10年になる。

一九八〇年の国連婦人の10年の中間年にはコペンハーゲンで世界会議が開かれ、ソ連は他の国々とともにこの会議でいち早く婦人差別撤廃条約（婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約）を批准するとともに、ソ連では条約の全条項がすでに実現ずみか、または実現されつつあるので、新しい法律を作成、採択する必要はないと明言した。

ではソ連ではどういう経過をへてそれらが実現され、また今後どのような傾向をたどるのだろうか？

ソ連は一九一七年の10月社会主義革命直後、性による一切の差別待遇を撤廃し、経済・政治・文化生活のあらゆる分野で男女の平等を保障した結果、婦人の雇用率は世界最高になった。

過去10年間に女子労働者、職員数は五二〇〇万人から五九〇〇万人に増えた。この増加はいわば人口増に伴うものであり、失業がなく、学校を出て新しく社会に出る婦人は、（男と同じく）仕事があるので、女子労働者、職員が増えるのは当然である。

社会調査によると、物質的生産の多くの分野で女子労働者数は減少傾向を示しているが、非生産部門では逆に増え、保健（82％）、教育・文化（73％）、商業・公共給食（83％）では圧倒的に婦人が多い。教育と医療に婦人が多いことは当然マイナス面もある。そこで婦人の進出を抑えないで、同時にこれらの分野に男をどんどん進出させて、才能を発揮させるという難問が、社会の最重要課題になっている。

数字から見て婦人の大多数は、就業者全般の大多数と同じく、物質的生産にたずさわっている。この生産ではすでに産業部門間で労働力資源の再配分が進められており、たとえば泥炭、石炭産業や製材業、セメント工業など婦人労働を利用するさい何かと医学的な制約の多い産業からは、婦人が退去している。

逆に機械工業、化学工業、食品工業、電力産業で働く婦人の数は増えている。たとえば技術進歩の最先端を行く機械工業には、いま就業婦人総数の30％近くが集中している。全体として現段階の特徴は、技能の高い創造的な婦人労働の比重が増大していることである。

ここ20年間に科学部門で働く婦人数は3倍に増え、現在ソ連の科学研究員中の婦人の比率は40％である。婦人は研究のさい非常に高い理論知識が求められる部門――宇宙生物学、数理物理学、遺伝学、無線工学などでも働いている。

10年間に就業婦人数が約13％増えたが、そのうち中等専門教育、大学教育修了者は37％増えた。この数字で見ると、男女はほぼ肩を並べているが、いま大学、中等専門学校の学生の半数以上が婦人だから、ごく近い将来婦人の方が男を抜く可能性が濃い。

経済の発展に伴って、婦人が自分の能力を生かす可能性も増大している。

一九三〇年代には例えば、婦人が働いてもよい工業の職種は三四〇種（女体に悪影響を及ぼす職種への就業は禁止）であったが、いま職業技術学校の女子学生が学んでいる職業、専門は一〇〇〇種近い。しかし以前どおり有害な重労働の職業が禁止されているのはもちろんである。それどころか、新しい数々の職業が就労禁止の職業の仲間入りをしている。科学技術進歩にはプラス面もあれば、マイナス面もあるのだ。一九七八年に婦人労働の使用を禁止する産業、職業、作業の新しいリストが採用され、それに基づいて一九八一年1月1日までに一六万人の婦人が軽作業に配転された（もちろん賃金は削られなかった）。一九八二年には重量物の持ち上げ、移動（これも婦人の就労は制限されていた）のさいの最高許容荷重基準が引き下げられた。

もちろん、こうした基準や規則が導入されると、国民経済は余計な難題を背負うことになる。婦人が例外なくあらゆる部署で働く方が経済的に有利で

あるはずなのに、ひどく人手不足に悩んでいる産業や工場から婦人が出ていくのである。しかし婦人の利益、婦人とその子供たちの健康が無条件に優先しているのだから、狭い経済的利益は二の次で、目をつむらねばならない。

婦人たちはやはり働くことを自分の運命として選んだ。婦人にとって労働とは、社会と家族の中での平等の経済的基盤であるだけでなく、自分たちの誇りや名声であり、自分がちゃんとした人格をもった人間であることを感じ、国のために役立っていることを自覚することである。「自分の賃金分が夫の賃金に加算されれば、仕事をやめるか」という社会調査員の質問に対して、10人のうち7人の婦人が「やめない」と答えている。

さてこの場合の国の課題は、男と並んで働くことを希望する婦人を職場と家庭で保護し、守り、母親、妻、カマドの守り手という自然が婦人に恵与した性質を守ることである。国のこの援助は、維持に大して手間のかからない快適な住宅から発達した生活サービス・システムまで、婦人相談の専門医療機関から婦人労働、母子保護の問題を調査研究する研究所まで、一六〇〇万人以上の児童が通う保育園と幼稚園からペンション、休息の家、サナトリウムまで、幅広く様々である。

次に過去10年間に婦人に与えられた特典のほんの幾つかを挙げておこう。産前産後の一一二日間の有給休暇にプラスして、希望すれば赤ちゃんが1歳になるまで一部有給の休暇がもらえるし、それからさらに半年間の無給の休暇がもらえる。その場合も職場の地位や勤続年数（社会保険手当給付のさいの条件の一つになる）は、そのまま継続する。

妊娠・出産手当は、勤続年数にかかわりなく、賃金の全額に引き上げられた。第一子出産のさい家族には一時手当が支給され、第二子以後の手当額は倍増された。乳幼児をもつ働く婦人の休暇日数および病気の乳児の有給看護日数が増やされた。

専門家はこれらすべての措置の実施に伴って、社会的生産に従事する婦人の数は幾分減るかもしれないと見ている。国はこれによって生じる困難に対応する準備を進めているだけではない。仕事への復帰を希望する婦人たちに、休暇または休職中に生じた損失をその後どのようにして埋め合わせていくかという問題にも直面しているのである。

婦人には就職のさい男と平等の機会、平等の賃金、平等の昇進の機会が保証されているが、出産のため休んで職場に戻ると、男の技能資格の格付けが婦人を追い越している場合が非常に多い。大多数の産業で平均して男の技能の等級が婦人よりも高いのは、こうした事情のためである。それほど直接的ではないにしろ、このような事態の影響はその後も続くのである。

いまソ連全国で閣僚のポストを占めている婦人は27人。工場長、建設場の指導者をしている婦人は五〇万人余りで、二万六〇〇〇人以上がコルホーズの議長とソフホーズの所長をしている。

数字そのものを見れば結構なことだが、ソ連という国の規模から見れば、まだまだ婦人の可能性は小さい。

婦人のために男との機会均等ではなく、特権を設けねばならない分野の一つは、技能の向上や知識の更新であり、この10年間そのための措置がとられてきた。まず数年前から母親である婦人は、希望すれば一日または一週間を“スライド”方式（つまり母親たちに最もつごうのよい出勤ダイヤで）のパートで働くことができるようになった。こういう有利な条件で働いても、勤続年数や年次休暇日数や他の労働の権利は別に何の制限も受けない。一九七九年からは8歳未満の子供を持つ婦人は、仕事のかたわら職業訓練や技能研修を受けることができ、しかもその訓練、研修期間中は平均賃金がもらえることになった。いま職場で直接新しい職業を修得している婦人は年間三〇〇万人以上、また技能資格を向上している婦人は一〇〇〇万人以上にのぼっている。

賃金が上がり、職場での地位が向上しているのは、この分野で行われた仕事の効率の物質的結果であるが、社会調査の結果が示しているところでは、婦人は使命を重視しており、従ってモラル的要素の方を大切にしていることが多い。

婦人はソ連の最高国家権力機関であるソ連最高会議の代議員の$\frac{1}{3}$、地方権力機関の代議員の半数を占めている。このことは婦人の理知、意思、国政を指導する能力が広く社会から認められたことを意味する。ソ連最高の労働功労章である社会主義労働英雄の称号を持つ人の$\frac{1}{4}$、ソ連の勲章受章者の$\frac{1}{3}$は婦人である。この10年間にすぐれた労働業績によりソ連国家賞を受けた人の$\frac{1}{3}$以上は婦人であった。

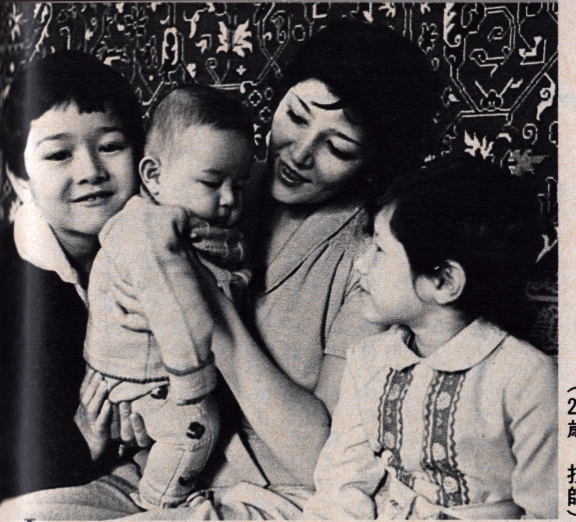
なるほど今のところまだ婦人は半数に達していないが、このことをはっきり認めることによって、われわれは自分たちの未来の課題を定めている。しかもわれわれはこれらの課題を解決するカギ、平等を確保するために婦人に特典を設けるというカギをもっているのである。

国連婦人の10年

わたしのこの10年間の歩み

——7人のソ連女性に聞く

今年は「国連婦人の10年」(1975年の第30回国連総会で決定）の最終年にあたり、7月中旬にはナイロビで「国連婦人の10年最終年会議」(世界婦人会議）が開かれる。それにちなんで編集部ではソ連のさまざまな職業の婦人に会い、この10年間の彼女らの歩みを語ってもらった。



グリチェフラ・シャラスロワ（28歳、技師）

人の年齢が何年生きて来たかではなく、経験した事件によって数えられるとしたら、グリチェフラ・シャラスロワは実際よりずっと年上のはずだ。ソ連中央アジアのウズベク共和国の首都タシケントに住むウズベク人のグリチェフラの身の上には、この10年間、実にいろいろな事が起こった。

その第1は、中等学校の卒業。当時はタシケントのはずれに住んでいて、家のすぐ向こうにはコルホーズ（集団農場）の畑が広がっていた。そんな環境の中でグリチェフラはハウス栽培の野菜や果実の収穫の手伝いをした。あたり一面雪なのに、コルホーズのハウスの中にはレモンやミカン、トマトがいっぱいあった。いつの間にかグリチェフラの心の中には農業技師になる夢がふくらんでいた。だから中等学校を卒業するとタシケント農業大学に進学した。

その第2は結婚。相手は生まれてからずっと顔見知りだったに違いない（9歳年上の）アザドだった。隣の通りに住んでいたアザドは少女のグリチェフラには別に何の関心ももっていなかったが、10年生の彼女を見た時、その存在を意識しはじめた。2年後に彼は結婚を申し込んだ。その時アザドは大学を出て工場の技師の職についていたし、グリチェフラは大学生だった。両親の同意を得てクラスメートの中で最初の花嫁になった。

その第3は出産。グリチェフラは次々に3人の子を出産した。最初のベクゾドを出産したのは大学3年の時。周囲の理解もあり休学せずに勉学と育児を両立させた。第2子のジェダの時も何とか持ちこたえ、国家試験にも合格、無事卒業証書がもらえた。コルホーズで働く夢だけは実らず、家の近くの研究所に入所した。1984年には第3子出産。今度は権利を行使して112日間の完全有給休暇（給料が全額支給される）と生後1年までとれる不完全有給休暇（給料の一部が支給される）をとった。復職するかどうかはまだ決めていない。第3子の出産時に一時金が国から支払われたし、毎月の育児手当もある。

「いろんな事が起こったけど、でもちっともふけてないよ、って夫は言ってくれます。それを信じているのだけれど……」



アレクサンドラ・デミヤネンコ（63歳、ソ連最高裁判事）

ソ連最高裁判所の判事には若い人は選出されない。生活経験とプロとしての経験の豊かさが最高裁判事になるためにはぜひとも必要なのだ。

アレクサンドラ・デミヤネンコはモスクワっ子。ロシア人。50歳の時、最高裁判事に選出された。戦争中は看護婦として働き、戦後モスクワ大学法学部を卒業後およそ25年間、いろいろな審級の裁判所で判事として働いて来た。「私の仕事は大変現実的です。すべてが実践に立脚しているからです。私が裁判官として2人の人民参審員（選出された勤労者代表)と共に最高裁で扱う事件についてももちろんです。

最高裁の機能の一つは、現行法の適用に関し指導的解釈を与えることですが、その基礎になるのもやはり実践です。それはわれわれが調査する裁判資料であり、持ち込まれる提訴であり、共和国への出張、判事たちとの会談、講演、そこで受ける数多くの質問です。

1970年代の終わりには私は住宅基本法の作成委員会で働いていました。草案が発表されると何十万通もの手紙が寄せられました。委員会はその全部を検討し、もっとも至極な意見はすべて考慮するよう努めました」

——迷ったり、確信が持てない時はありますか？

「それはあります。そういう時は判決を延ばします。性急さはわれわれの仕事ではまったく許しがたいことです。判決が延期され、しばらく審理がストップするのも悪くはありません。審理が再開された時、まったく違う角度からすべてが見えて来ることがあるものです」

——職場では判決を下すわけですが、ご家庭でもそうですか？

「とんでもない。娘は結婚して家にはいません。夫は幹部軍人です。望んで出世したのではなく、戦争がそうさせたのです。軍人ですからもちろん、指揮をとることは得意です。でも家ではそんなことはやりませんわ！　冬はスキーに、夏は別荘の野菜畑を掘り返しに、と何となく同意ができているようです」



リュボーフィ・カザルノフスカヤ（29歳、歌手）

生後8カ月で、この小さなモスクワっ子は両親を見つめながら、当時はやった映画の主題歌のメロディーをきちんと真似してみせた。5歳の時、楽譜通りにピアノを弾くのを嫌がって両親を困らせた。どんなメロディーを弾いたっていいじゃないの、という訳だ。ところが成年に達する頃、彼女にとって生きることはつまり歌うこと、と思いこんでいた身内の者にはショッキングなことを言い出した。のどの調子がおかしくなったので歌手にはならない、というのだ。実際、音楽専門学校での舞踊、リズム運動、演技のレッスンはとてもうまくいったが、歌はふるわなかった。

その頃（10年前)、誰かがナジェジダ・マルイシェワという声楽教師のことを彼女に話したのは、本当にラッキーだった。マルイシェワは独自の指導法の研究、長年の経験によって大変な権威を持っていて、ボリショイ劇場の名だたる歌手たちもその指導を受けていた。

カザルノフスカヤの歌を聴いたマルイシェワは、あなたの声を“引っ張り出せるかどうか”やってみましょうと指導を引き受けてくれた。そして、約束どおり、声が出るようにしてくれた。その後カザルノフスカヤは音楽専門学校を立派に卒業し、優秀な成績でモスクワ音楽院の試験に受かった。音楽院での勉強を通じて彼女はますます歌への愛着を自覚し、声楽こそ自分の天職だと確信するようになった。

彼女には成功する上で必要なすべてのものが備わっていた。生まれつき舞台向きの資質、しとやかで、女性的な美しさ、さらに驚くべき音楽的記憶力、すばらしい声の質、まれに見る持久力のある声に恵まれている。

彼女の内外の聴衆の評価も高い。ボリショイ劇場でのリムスキー＝コルサコフの歌劇『キテジ』のフェブロニアの役は、大作曲家チホン・フレンニコフをして“崇高！”と言わせ、“彼女はいまや、わが国最高の歌手の一人”と言わせるまでになったのである。



マリア・グルシャコワ
（45歳、医薬品工場オペレーター）

「10年って、若い時はずい分長いと思ったけど、この齢になると10年なんてすぐたってしまうのよ」——ベロルシア共和国の首都ミンスクの工場で働くベロルシア人のマリアは言う——「でもね、ふり返ってみるとあるのよ、いい思い出がいっぱい。仕事ひとつとってみてもそうよ。8年ほど前だったかしら、どうして違う仕事を選ばなかったか、と娘に聞かれたわ。確かに工場の生産工程にはあれこれ健康によくない作業もあります。でも賃金はいいし、特典もいっぱいあるから……週の労働時間は短いし、休暇は長く、5年も早く年金生活に入れて、年金額も大きいですからね。母は戦争で亡くなり、私は母の味を知らないで育ったし、早く一人前になってお金を稼ぎたかったので、中等学校を出るとすぐこの職を選んだの。でも、1978年には別の職場に配転させられたわ。労働組合の決定によって婦人の就労を禁止した新しい職種のリストが承認され、私が従事していた作業もその中に含まれていたのね。私たちは企業の負担で新しい作業の講習を受け、1カ月後には製造装置の制御盤の前に立ちました。生産工程は密閉された装置の中で行われるので無害だし、生産性も高いのよ。この仕事はより高度の技術を必要とするので賃金は以前の3割ほどアップしたわ。その上特典は、やはり化学工程だからそのまま適用されました。新しい職場の時間割も一交替時は以前より少し長くなったけれど、その代わり3日働くとつづいて2日間休めます。私たち従業員がそう希望し、労働組合の支持を受けてこうなったのよ。

6年前、工場から新しい住宅を受け取りました。加えて母親としての大きな喜びもあったわ。去年娘のジャンナが国民経済大学を卒業し、今エコノミストとして国営航空会社“アエロフロート”で働いているのよ」



イノバト・アフメドワ
（25歳、教員）

タジク人。ソ連中央アジアのタジク共和国の農村部の中等学校でロシア語を教えている。大人からも子どもからも“ムアリマ”（タジク語で“先生”の意）と呼ばれて慕われている。

どこの共和国でもそうだが、民族語で教える学校とロシア語で教える学校があり、子どもたちはそのどちらかに通う。当然のことながら、タジク共和国では人口の59％を占めるタジク人の民族語であるタジク語で教える学校が大部分で、ここでは補足的にロシア語を習う。ロシア語学校ではその共和国の民族語が必修科目になっている。こうしてタジク人もそうでない人（つまり残り41％）も自由につきあえるし、ソ連国内どこにいるどんな民族の人ともロシア語という共通語で話ができる。

どちらの学校に子どもを入れるかは親が自由に決める。イノバトの場合、タジク語はいつもしゃべっているのだからと、ロシア語学校に入学させられた。

10年前の8年生の時、イノバトはロシア語で詩を書いた。「何と思いあがっていたのかしら！」——と今は思う。だがこれがすべての出発点になっている。この時から好きな道への旅立ちがはじまったのだ。はじめはロシア語の詩に引かれ、その後散文に深い感動を覚えた。ロシア語の散文を理解し、その陰影と微妙さをタジク語で他の人に伝えようとするうちに、イノバトは自分の母語を再発見した。教育大学に進学し、ペルシャ・タジク文学の古典に没頭し、行間からにじみ出る美しさにロシアの散文とは異質のものを感じた。

自分から進んで農村の学校の教員になった。「二つの文化の宝庫を開く鍵を子どもたちに贈ってやりたい。だからロシア語を教えたいのです」と、イノバトは言う。



ワンダ・ベルスケネ
（32歳、織物工場長）

「自分の能力を発揮するには、どんなに社会的保証があっても、それだけではまだ不十分なことがあります。その上に運が必要です」——アリトゥス市（バルト海沿岸のリトワ共和国）にある綿織物コンビナートの織物工場長ワンダ・ベルスケネ（リトワ人）はこう断言した。「私に運がなかったら、夫のビタウタスとは出会わなかったでしょうし……」

ワンダは中学校を卒業後、カウナス市（リトワ共和国）の工業大学に入ろうと決めた。家の暮らしはあまり楽ではなかったが（父は盲人雇用企業の仕上げ工、母は病院の雑役婦。妹もいた）、両親は彼女の奨学金に少し上乗せできるからと言って彼女を応援してくれた。

在学中にビタウタスと知り合い、結婚し、娘のワイダが生まれた。そうなると二人の奨学金と両親の援助だけではやっていけず、どちらかが中退しなければならなくなった。夫のビタウタスは、自分が働くと強く主張し、ワンダに学業を続けさせた。1975年、彼女が卒業すると、夫はまたまた重要な提案をした。リトワ共和国最大の綿織物コンビナートから口がかかっていたワンダに、コンビナートのあるアリトゥス市へ引っ越そうと勧めたのだ。その方が彼女の専門家としての成長にもいいし、職業的な昇進にもいいと言うのだった。

夫の目に狂いはなく、2年後にはワンダは400人の従業員が働き、1000台以上の織機がある工場の長に任命された。

家の中が夫ビタウタスの努力で実にきちんとしていて、ワイダとビルダの二人の娘がパパから離れようとしないのを見ると、ビタウタスはまったく家族のためにだけ生きていると思うかもしれないが、そうではない。妻より遅れたものの、彼は大学を卒業し、アリトゥス冷蔵庫工場で設計者として働いており、評判もよい。もっと早いスタートであれば、いまはもっと高い地位にいただろう。しかし彼は言う——「“レディー・ファースト”の原則はすべての場合に守られなければいけないと私は思います」



グリノラ・プラトワ
（49歳、タジク共和国保健相）

「国連婦人の10年」の最終年の今年はタジク人グリノラ・プラトワの人生にとって記念すべき年となろう。まず年の初めにタジク共和国保健相に任命された。これで彼女はタジク共和国3人目の女性大臣となった。

彼女に任されたのは特別に責任の重い仕事だ。それはつまり共和国の住民450万人の健康維持であり、人口の自然増加率ではソ連最高のタジク共和国の医療サービスの充実であり、1万人の医師（半分以上は女性）と800以上の医療施設の指導である。

グリノラ・プラトワはこのポストを男性から引き継いだ。彼女が任命されたのは、その職業的能力と経験による（タジク医科大学、モスクワのソ連医学アカデミー神経外科学研究所付属研究科卒業。タジク共和国最大の病院に勤務。母校の大学で教鞭をとる）。また大学の党委員会の書記を努めたり、地区ソビエトの代議員をするなどして、組織者としての才能を発揮していたことも、この任命に大きく物を言った。プラトワは語る。「家庭の重要な意義の一つは、共同生活と信頼にもとづく相互理解です。これがあれば、あとはなんとでもなります。婦人解放はすばらしいことですが、女性的な気配りまで不要にすることはありません。それがなければ家庭の温かみは生まれないのですから…　いまはとても忙しいので、大学生と中学生の二人の娘の手助けが特に助かります。大学教授で医学博士の夫ももちろん協力してくれます。台所に立つのを恥ずかしいなどと思っていません。

私の人生で幸運だったことですか？

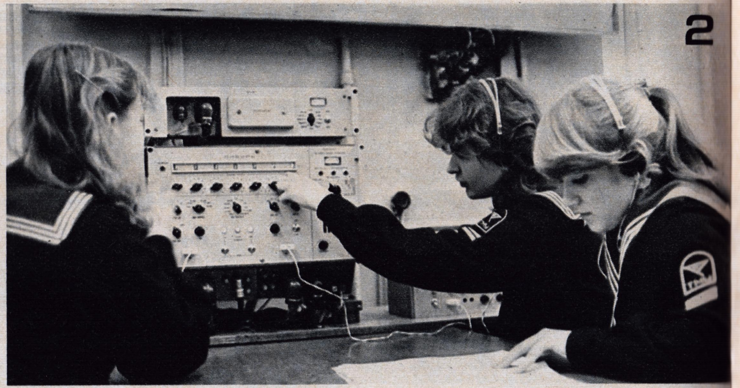
私は芸能一家に育ちました。母ソフィア・ツイバエワはドラマ劇場の俳優、父カミル・ヤルマトフも俳優で映画監督です。両親は音楽院にでも入れようと思っていたようですが、私は医科大学に入りました。自分でこの道を選んだことが、私の人生の最大の幸運でした」

“海の女”をめざす
——漁業航海学校の娘たち

エストニア共和国駐在本誌記者 カルル・ヘレミャエ
カメラ V・マースク

1


4


2


3


エストニア（バルト海沿岸の共和国）の首都タリンにある漁業航海学校に昨年初めて女子学生が出現した。この13人の勇敢な女性たちは入学試験の難関を見事に突破し、セーラー服の制服を着ることになったもの。

13人のうち3人は魚加工の専門家を養成する生産技術科の学生だが、あとの10人はみな無線技術科を選んだ。

漁業航海学校のヤコフ・マルゴリン校長の話だと、女子学生を入学させたこの最初の試みは完全に正しかったことが証明されつつあるという。女子学生たちは男子よりも熱心に学んでいる。

アベ・バクムとアイレ・シインベルトの二人は、昔から航海が盛んなサーレマ島（リガ湾に浮かぶ島）にある町ムスチャラの中等学校を卒業後、漁業航海学校に入った。もっとも、アベ・バクムの両親は娘の進路の希望を知った時、何とか思いとどまらせようとした。しかし、漁業コルホーズで冷凍装置の修理技術者として働く兄が味方してくれた。この漁業コルホーズでは無線技術者が非常に不足していて、このことがアベの進路を決定づけた。

アベはこう語っている。

「航海学校の勉強は気に入っています。学校で学ぶ技術は最新のものですし、先生方は20年以上もここで教えている方ばかりで、自分の専門には隅から隅まで通じておられます。先生方も、男子学生も、私たち女子学生には親切です。家に帰ると、妹たちがこのセーラー服をうらやましがります。両親も私が漁業と関係のある職業を選んだということであきらめてくれました」

アイレ・シインベルトの血縁には漁師も航海士もいないが、彼女の両親は漁業航海学校で技術を身につけたいという娘の決意をすぐに支持してくれたという。

1 微生物学の先生ニーナ・カルリナに指導を受けるスベトラナ・カルツェワとタリラ・オヤ
2 船の無線機の使い方を学ぶアイレ・シインベルトとアベ・バクム
3 女子学生の入学は教師たちにも好意をもって受け入れられた。
4 海を将来の職場に選んだ娘たちの表情は明るい。

アイレ・シインベルトはこんな抱負を語ってくれた。

「私は以前から無線技術の仕事にあこがれていました。故郷のムスチャラでは海に出ない者でも、自分の生活を漁業と切り離して考えることはできません。私たち島の者は頑強で不屈です。ひとたび何かにとりかかれば、決して途中でへこたれません。立派な専門家になって故郷に帰ります——はっきりそう約束できます」

横路北海道知事のソ連訪問

本誌記者 アンドレイ・ジュドロ



横路孝弘・北海道知事はロシア連邦共和国閣僚会議〔政府〕の招きで4月21日から26日まで訪ソし、国際情勢、ソ日関係、北海道とソ連極東との交流の拡大などの諸問題についてソ連側の関係者と意見を交換した。

横路知事はソ連滞在中、ビタリー・ウォロトニコフ・ソ連共産党中央委政治局員・ロシア連邦共和国閣僚会議議長〔首相〕、リジア・ルイコワ同副議長〔副首相〕、ウラジーミル・カメンツェフ・ソ連漁業相、ピョートル・デミチェフ・ソ連文化相と会談、一部の問題については見解の相違があったが、会談はきわめて有益であり、友好的かつ率直な雰囲気での建設的な意見の交換の継続が、友好を深めるのに役立つことを確認した。

会談のさい強調されたとおり、ソ日関係を抜本的に改善するには、両国政府の努力だけでなく、地域レベルや民間人の交流の拡大をめざす強い熱意が必要である。この点で非常に重要なのはソ連極東と北海道の交流の強化であり、6月4日から札幌で開かれる第2回ソ日極東・北海道交流会議は、大きな役割を果たすに違いない。

横路知事は訪ソのさい文化交流を活発にする問題にも強い関心を示した。たとえば7月に札幌でレニングラードのエルミタージュ美術館展を開催（7月13日—8月22日北海道立近代美術館）することが決まった。

知事はモスクワとレニングラードの名所を見物したほか、モスクワ郊外のズビョーズヌイ・ゴロドク(星のまち)の宇宙飛行士訓練センターや農工業企業、コルホーズ市場を視察、ソ連の労働者の家にも招待されてくつろいだ。「おかげでソビエトの人たちの生活が分かり、初訪問したソ連に関する有益な知識を増やすことができた」と知事は語った。

訪ソの成果についての記者会見で横路知事は次のように語った。

「ことしは第2次世界大戦終結40周年に当たるので、レニングラード訪問はとくに貴重で、深い印象を受けた。ピスカリョフ記念墓地は広島、長崎とともに永久に人々に記憶されねばならぬ場所である。あそこを訪れる人は、平和がいかに貴いかを改めて感じる。

モスクワに着いたときはまだ草木の緑が全然なく、水辺には氷が張っていたが、ほんの数日の間に急激に暖かくなって春の訪れが感じられ、芝生や木々が緑の装いを始めた。ソビエトの人と同じく、北海道に住むわれわれも、厳しい冬がどんなものかをよく知っているので、春の訪れはとくにうれしい。ソ日関係もわれわれの共同の努力によって暖かい春が訪れるに違いない……」



戦時中のレニングラード防衛者記念碑に献花する知事夫妻

▶ウォロトニコフ・ロシア連邦共和国首相と会談した横路知事。（写真左からウォロトニコフ首相、知事夫妻、ルイコワ・ロシア連邦共和国副首相、V・ビノグラードフ同共和国外相）



レニングラードの野菜温室経営「レート」でトマトなどを試食する知事一行

「今日のソ連邦」昭和60年7月1日号(第28巻・第13号・通巻634号)付録

☆インドのPTI通信の質問に対するM・S・ゴルバチョフの回答

☆ジュネーブ交渉の第1ラウンドは何を示したか？

――プラウダ紙1985年5月27日号論説

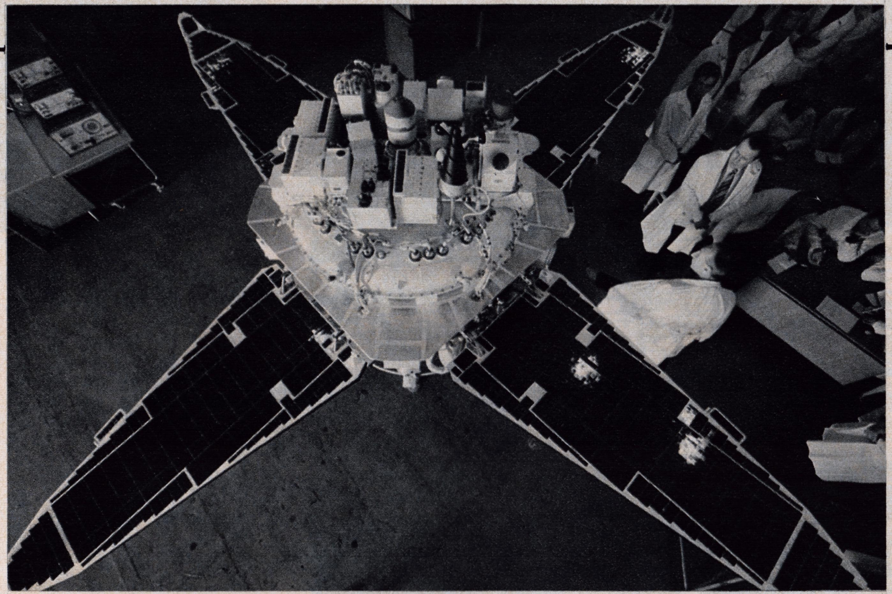
「今日のソ連邦」1985年第13号付録



戦勝40周年記念メダル

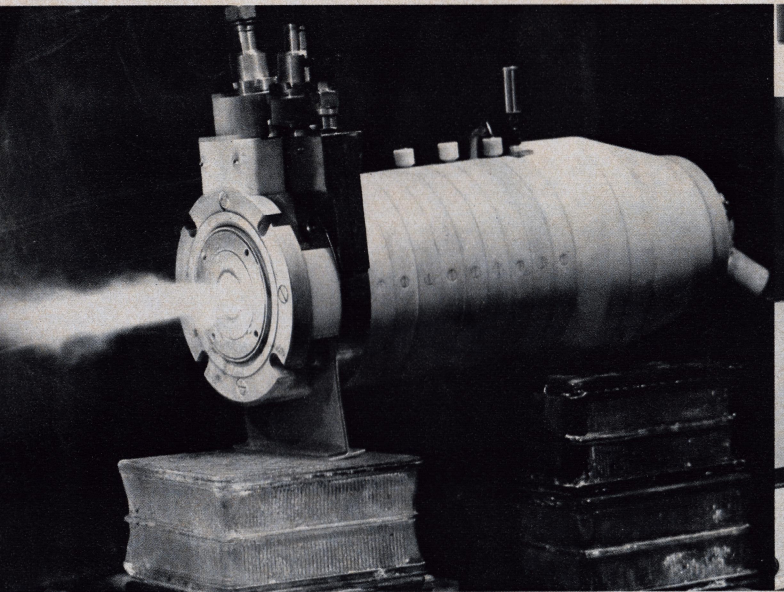
“1941―1945年の大祖国戦争における勝利の40周年”記念メダル（写真）がソ連で制定された。メダルを授与されるのは、戦線での戦闘行動に参加した人々、敵に占領された地域でのパルチザン・地下闘争の参加者、銃後の勤労者たち。

メダルの表面には5芒の星、月桂樹の枝、祝砲の火、モスクワ・クレムリンのスパスカヤ塔を背景に兵士、労働者、コルホーズ員の姿が浮き彫りされている。メダルの裏面は2種類あり、一方には“戦争の参加者へ”という文字が、もう一方には“労働戦線の参加者へ”という文字が刻まれている。



太陽風の秘密の解明へ

4月26日、平和目的の宇宙開発で社会主義諸国が国際協力する“インターコスモス”計画に従って、自動ステーション“プログノズ10号”がソ連で打ち上げられた。ステーションにはソ連、チェコスロバキア両国の学者たちが開発した機器が搭載されている。今回の打ち上げの目的は、いわゆる太陽風――太陽のコロナによって生まれるプラズマ粒子の動きと、太陽風と地球の磁場との関係を調査・研究すること。太陽の活動と地震、オーロラ、天候、さまざまな作物の作柄、心血管系疾患の発病数などとの関連は以前から観察されているが、これら太陽と地球の関係の本質がどういうものなのか、まだ科学的に解明されていない。“プログノズ10号”とこのシリーズのこれまでの九つのステーションで得られた資料は、現存の仮説を科学的に基礎づけるのに役立ち、実用的な意義を持つだろう。（写真は打ち上げ前のプログノズ10号）





プラズマトロンの新“職業”

ノボシビルスク市のソ連科学アカデミー・シベリア部熱物理学研究所の専門家たちは、長時間連続作動を特徴とする各種用途のプラズマトロンを開発した。

機械の部品に粉末の材料で被覆を施すプラズマトロンや、厚さ一五〇㎜以下の銅板、ステンレス鋼板を切断するためのプラズマトロンは50時間以上運転することができる。切断用のプラズマトロンは、大型部品や高硬度の金属製半製品を加工するさいにも利用される。

新しい化学工程用プラズマトロンは二五〇時間以上連続運転できる。プラズマ反応炉の中で酸化した大気中の窒素は硝酸に変わる。この硝酸は窒素肥料または窒素とりん酸の複合肥料用の原料になる。

（写真上右はプラズマトロンの運転制御盤、上左は運転中のプラズマ装置）

風変わりな家



モスクワ近郊のイストラ河畔に10mの尖塔をいただく、古代ロシアの建物に似た“おとぎの家”が立っている。よく晴れた日にはこの家は明るい陽光を浴びて、まるで宝石を散りばめたように光り輝く。この家は、モスクワ市民の元テストパイロット（現在は年金生活を送っている）アレクセイ・ピエツフ（写真左）が自分で空きびんを利用して建てたもの。大勢の協力者がびんを提供した。禁酒主義者のピエツフは酒びんはきっぱりと断り、牛乳びんや清涼飲料水のびんだけを利用した。



このような解決の仕方が現実のものになっていれば、欧州における核対決のレベルはぐっと低まったはずである。軍事的脅威が高まる危険な根源が欧州から取り除かれたはずである。

中距離核兵器運搬航空機問題も、欧州の核軍備問題を解決するという文脈の中で、すなわちソ連とＮＡＴＯにこの種の航空機について双方が同意する水準を決めるということに基づいてその解決を見いだすべきであった。

さらにソ連側はそれよりもはるかに抜本的な形で問題を調整する用意のあること、すなわち中距離核兵器からも戦術核兵器からも欧州を完全に解放する用意のあることを表明したのだった。

ジュネーブ交渉の次のラウンドは5月30日に始まる予定になっている。ワシントンの高官たちの公の発言を聞くと、彼らには米国の態度をよい方へ変えるつもりは全くないということになる。それどころか、攻撃的宇宙手段の開発を促進することについて語っており、戦略攻撃兵器の抜本的削減についてのソ連の提案にはひとことも答えていない。こうした態度は、ワシントンの特定層が交渉の対象と目的についての1月の合意の実現をこの先も回避しようと頑なに志していることを証明している。しかし、宇宙における軍拡競争を未然に防ぎ、地上の軍拡競争を停止するためには、別なこと、すなわち米国の立場に思い切った再検討を加えて、米国が建設的で実務的アプローチをとるようにすることが要求される。

Ｍ・Ｓ・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は次のように強調した――「ジュネーブでの成功のためには、平等と同等安全の原則を厳守しながら合意を達成しようという相互の善良な政治的意志が必要である。世界情勢は複雑で緊張しており、ジュネーブの交渉は難航しているが、われわれは冷静な楽観主義を守っている。

われわれは、平和と軍拡競争停止を望んでいる諸国民の声にわれわれの交渉相手が耳を傾けることを望んでいる。われわれは、常識と政治的現実主義と、平和な未来への責任感が勝利することを望んでいる。われわれは、自己の生存権を守り抜こうとする諸国民の能力を信じている」。

『今日のソ連邦』一九八五年7月1日号付録
発行人　加藤宣幸
編　集　ソ連大使館広報部
（郵便番号141・東京都品川区東五反田3－9－13・電話03－447・3536）
印刷・発行所　（株）新時代社
（郵便番号101・東京都千代田区神田神保町1－44・電話03－293・4881）



〝きょうは小さいのにしておこう……〟（V・ベンデリン撮影）

短信アラカルト

携帯用人工心臓

常時使用するための携帯用人工心臓のサンプル3種類がこのほどモスクワのソ連医学アカデミー移植学・人工臓器研究所で開発された。そのうちの一つ〝ヘルツ2〟では、体に固定される背のうの中に熱機関が入っている。これのエネルギー源は、特別の防護を必要とせず、危険な放射線を出さない浄化されたプルトニウム同位元素である。胸腔内に納められる人工心臓自体は金属でつくられているが、内部はプラスチック張り。

もう一つの人工心臓では体外に残るのは電源の電池だけ。超小型のモーターは血液を汲み上げるための〝ポンプ〟と一緒に胸腔内に納められる。

〝ミクロン〟という名の3番目の人工心臓は全部胸腔内に納められる。このモデルには〝ヘルツ〟と同じプルトニウム同位元素をエネルギー源とするエンジンがある。

作家ショーロホフの郷里に記念博物館

すぐれたソ連の作家でノーベル文学賞を受賞したミハイル・ショーロホフ（一九〇五—八四）の業績を記念する国立風致保存博物館がドン河畔の郷里ビョーシェンスカヤ村（ソ連欧州部の南、ロストフ州）に建設中。ここには作家が約60年間住み、働いた家がある。この家で彼の作品『静かなドン』、『ひらかれた処女地』、『人間の運命』、『彼らは祖国のために戦った』が書かれた。ショーロホフの著書はソ連諸民族の88の民族語と多くの外国語で合計九七〇〇万部発行された。現在この博物館あてに、ショーロホフを知っていた国内各地や外国の人たちから彼のサイン入りの本、さまざまな版の彼の作品が寄せられている。

風致保存博物館の面積は一万ha以上を占める。その第一期工事分は作家の生誕80周年にあたる今年の5月にオープンした。

地下に圧搾空気を貯めて発電

ドンバス（ウクライナ共和国、ドネツ川流域の炭田地方）で出力一〇五万kWの原理上新しい、いわゆる地下圧搾空気貯蔵発電所の建設準備が始まった。ここには膨大な量の岩塩が集中的に埋蔵されている。厚い岩塩層には地下採掘によって巨大な空洞ができる。この空洞に、深夜の余剰電力を使って空気を圧搾して蓄え、朝と夜のピーク時にこれを使ってタービンを回し発電する。

地下四〇〇—五〇〇mの地下空気貯蔵槽の容積は二〇〇万立方mに達する。その中の空気圧は60気圧になる。発電所には出力各三五万kWの発電機3基が据え付けられる。発電所の従業員は一五〇人の予定。

砂の家

砂で建てた家に新しい入居者がもう移転してきた。この住宅は、国土の大部分を地球上で最も広大な砂漠の一つ、カラクム砂漠が占めているトルクメン共和国（中央アジア）に建てられたもの。

トルクメン共和国の専門家たちは、砂を材料にしたいわゆる気泡コンクリートで軽くてコストの安いプレハブ・ユニットを生産する工業技術を開発した。このプレハブ・ユニットで建物が建てられる。

砂はまた建物正面の外装にも利用されている。これはユニークな技術で砂から作られる外装板を張るものだが、この外装板は大理石の板にそっくりだ。

モスクワに住むタコ

モスクワ動物園の生物工学実験室にいるタコ（マチルダという愛称を持つ）は、人工的な環境の中ですでに約1年生きているソ連最初のタコになった。

このタコは日本海のポポフ島付近で生まれた。モスクワ動物園の職員パーベル・ダブイドフに水深40mの海底で捕まった時には、タコは小さく、てのひら位の大きさだった。

タコはまず現地で特別の水槽に入れられた。これはタコが人間に慣れ、どんな動機からでも、あるいは動機なしに、敵だけでなく、自分にも有害なスミを吐かせないようにするためだった。タコがこれに慣れると、水と酸素を詰めた、温度を一定に保つ水槽に入れて、モスクワへ送られた。

現在マチルダは体重が4kg以上あり、腕は長さ約1mにまで伸びた。おかげで学者たちは、海底に降りないでタコの生態を研究できる。

"力と根性が記録をつくる"

――重量挙げの記録メーカー、ワルダニャン選手に聞く

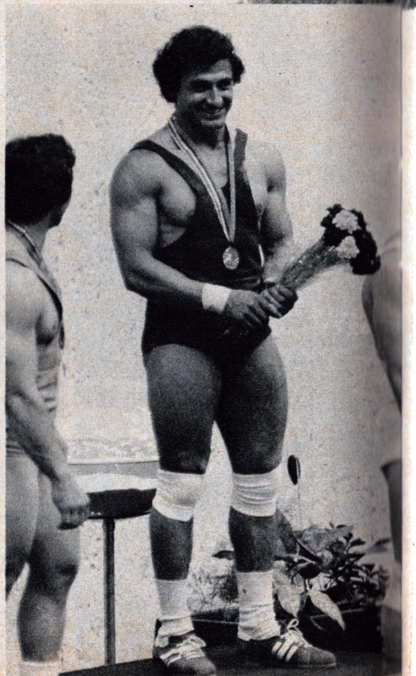
カメラ　Y・ソコロフほか



重量挙げの世界チャンピオン、ユーリー・ワルダニャン。

ある選手の名前がそのスポーツの代名詞になっているような選手がいるものだ。現在の重量挙げにおけるユーリー・ワルダニャンもそのような一人といえよう。ワルダニャンはアルメニア共和国の出身で、29歳。モスクワ・オリンピックの82・5kg級で優勝、世界選手権での優勝6回、世界記録樹立43回の経歴を持つ。国際ウエイトリフティング連盟のゴットフリート・ショードル会長は、「重量挙げ界はこれまでユーリー・ワルダニャンのような選手を知らなかった」と評している。

本誌記者A・チュルキンがユーリー・ワルダニャンにインタビューした。



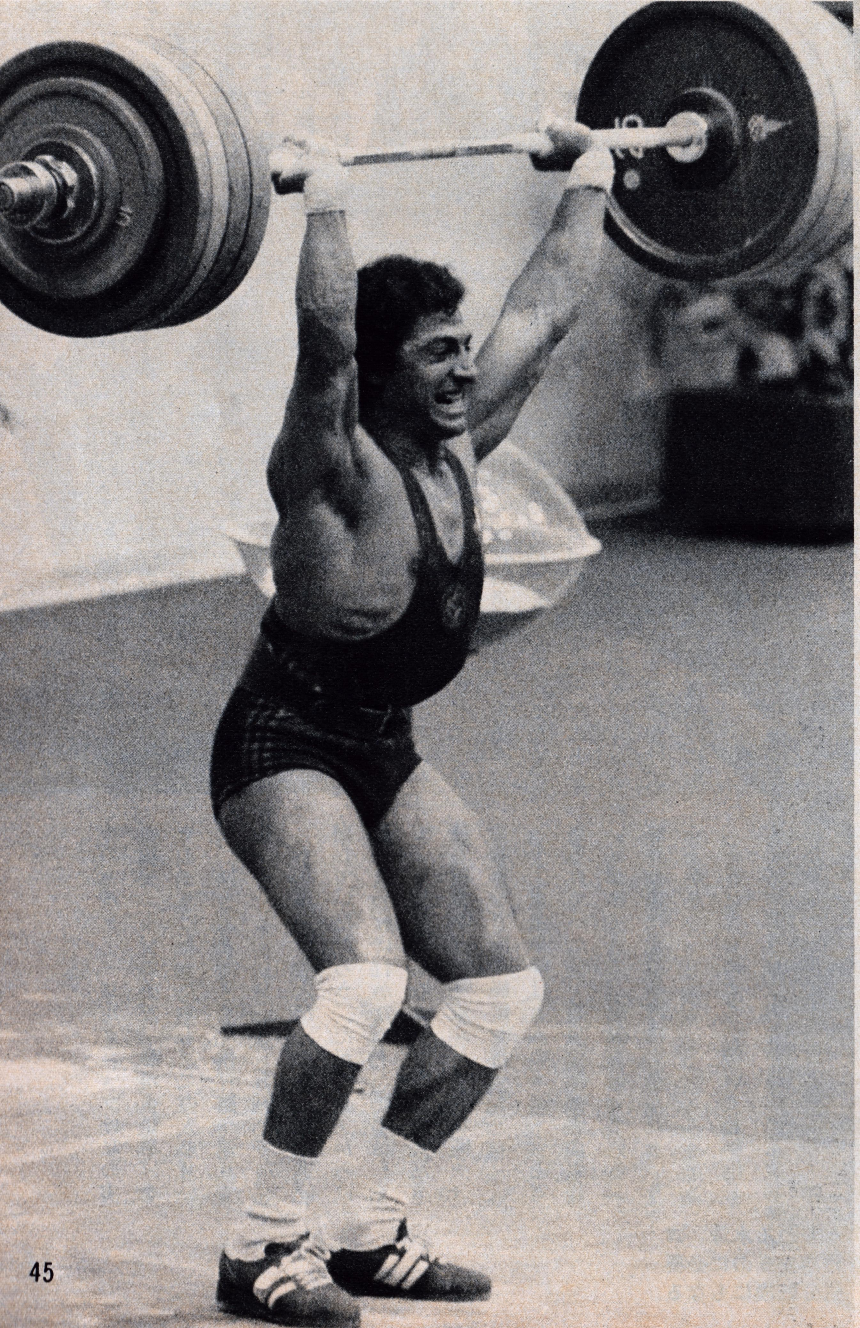
◀モスクワ・オリンピックの表彰台で

ゆっくりした足取り、バーベルが床に投げ出されるうつろな音、汗で濡れた顔、スナッチ、ジャーク、補強運動……これが重量挙げ選手の練習風景である。試技と試技の間の長い時間。選手が再びバーベルをつかむまでに、ときには10分もかかる。

費やされたこの膨大な時間の代わりに得るものは何か？　苦しいトレーニングを積んで、きのうより500g多く持ち上げることができるようになったからといって、何が面白いのか？　こんな質問を私はトレーニングのあとのユーリー・ワルダニャンにぶつけてみた。ワルダニャンは少しムッとしたようだったが、顔には出さなかった。

「トレーニングが楽だったら、それはにせ物だ。非常に苦しいなら、それも正しくない。トレーニングは仕事と同じで、楽とか苦しいの問題ではない。好きとか嫌いの問題でもない。重量挙げは私の趣味なのだ。私はよく知っているが、トレーニングが不十分だと、試合でもいい成績が出ない。

その代わり、試合のときバーベルが



世界記録樹立の瞬間

ワルダニャンはアルメニアのスポーツマンの誇り
（故郷レニナカンでちびっこファンに囲まれて）。



意のままに従ってくれたら、こんな幸せな気分はない。闘志をかき立てるために、バーベルは敵だ、と自分に言い聞かせている選手の気持ちが理解できない。まるでバーベルが人間のように彼らに抵抗するとでも言わんばかりだ。そういう選手にかぎって、失敗をバーベルのせいにするのだ。握りが滑ったとか、バーベルの調子が狂っていたとか。だが、バーベルは生命のない物体だ。勝ちたかったら、たくさんトレーニングするしかない」

――重量挙げ選手のトレーニングについてはいくつもの伝説が流布しているが、あなたが世界記録を樹立したときのことを話してほしい。それはどんな風にして起きたのか？

「私に関するうわさには尾ひれがつきすぎている。ほかの人はどうか知らないが、私はトレーニングで1日に40tほど持ち上げるが、試合で持ち上げたような重さを一度に持ち上げるようなことは決してない。そんなことはできっこないのだ！ 試合だと気分がちがう。試合には観客がいる。試合は戦いだ。気が奮い立つ」

――重量挙げ選手は出場する階級を変えることが珍しくない。あなたも最初はミドル級（75kg以下）だったが、次がライトヘビー級（82・5kg以下）で、さらにミドルヘビー級（90kg以下）に移って、いままたライトヘビー級だ。必要があってそうしているのか？

「問題は体重増加への志向だ。つまり体重が1kg増えると、3kg余計に持ち上げることができるようになる、と考えられているからだ。この気持ちは何となく分かるだろう？ だが、ほかにも理由がある。たとえば一九七八年に私が82・5kg級に移ったのは、それまで私の階級（90kg）に同僚のワルタン・ミリトシャンが出場したからだ。彼は私より5歳年上だったので、優勝を妨げたくなかった」

――大きな試合になると必ずといっていいほど新記録が生まれる。もうそろそろ限界だと思うのだが……

「これからも記録は伸びるだろう！ ただ、これは重量挙げが特殊なスポーツであるからではない。水泳でも同じ現象が見られる。思うに記録というのは、トレーニングの積み重ねの結果だ。体力と根性のたまものだ」

――あなたは一九八二年にひどいケガをして膝の関節を手術した。ふつうなら再起不能だと考えられているが、あなたはカムバックしただけでなく、ケガがハンディにならなかったことを証明した。ほかの選手ならもう十分というほどの賞をあなたはすでに受けているのに、それでも再び重量挙げに取り組んだのはなぜか？

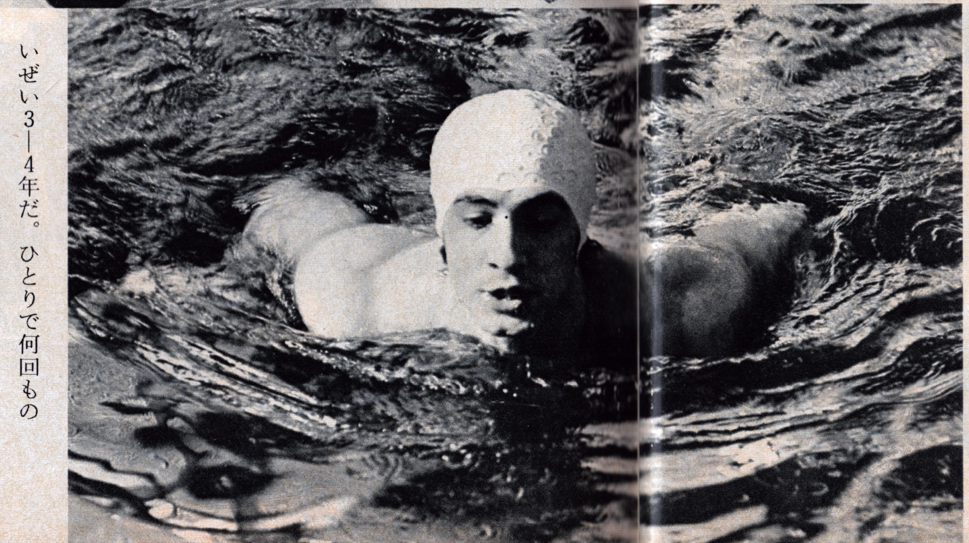
「第一に、一九八二年には私はまだ25歳だった。まだすべてを走り尽くしたとは思っていなかった。第二に、コーチだ。彼は私に同情もしなければ、私のわがままも許さなかっただろう。私のすべての成功は彼のおかげだ。コーチのセルゲイ・ワルダニャンは私の実の叔父――父の弟だ。私が重量挙げをやるようになったのも、この人のせいだ。ほとんど力ずくで体育館へ連れて行って、トレーニングをやらせた。コーチが赤の他人だったら、私は逃げ出していただろう。だが、叔父からは逃げるわけに行かない！ 恥ずかしくて……。叔父は石のような性格の人だ」

――重量挙げは大人のスポーツと考えられていたが、近頃ではますます若い人が出てきて、記録を破っている。成長加速は重量挙げにも及んだということか？

「そうだ。ものすごい勢いで若年化している。これはどのスポーツにも見られる法則的な現象だ。だが、ビッグスポーツに入ってくる選手の年齢が若くなっただけでなく、去って行くのも早くなった。わずかな例外を除けば、スポーツマンが全盛を維持できる期間はせいぜい3〜4年だ。ひとりで何回ものオリンピックで優勝した選手は重量挙げの選手くらいなものだろう。そのような選手はわれわれのあこがれの的だ。なぜか？ そのような選手は時間が求めているものをよくわきまえており、増大するトレーニングの負担に耐える力を自分の中に生み出したからだ」

――重量挙げのチャンピオンになりたいと思っている少年に必要なものは何か？

「肉体的に発達していなければならない。たとえば、私は走り高跳びで2m10、立ち幅跳びで3m60、100m走で11秒0の記録を持っている。みんなは私がバレーボールもうまいと言ってくれる」



〝趣味と実益〟を兼ねる水泳。コンディションを維持するのに必要な筋力を鍛え、気分転換にもなる。



アルメニア共和国最高会議の代議員として選挙区の人たちと会う

——スポーツ選手の一日は、トレーニング、試合、ファンとの交歓など、分刻みだが、その上さらにあなたはアルメニア共和国最高会議の代議員でもある。これらをどうやってこなしているのか？

「スポーツは生活を規則正しくし、時間を大切にさせる。

私の一日は非常に忙しい。レニナカン教育大学体育学部を卒業したあとレフ・トルストイ記念学校で教えているが、博士候補論文も準備中だ。代議員としての仕事にも時間をたくさん取られる。選挙民のすべての問題に精通しようと努力している。いまのところそれがうまく行っているのがうれしい。

私にとって代議員活動で大切なのは体育・スポーツの宣伝だと考えている。アルメニアの多くの都市や地区へ行って、青少年に会い、スポーツの効用を説いている。地域の指導者たちにも、子どもたちにはスタジアムや体育館が必要なことを説いている。うれしいことに、ほとんどいつもそれが成功している。私の故郷のレニナカンでは、ほとんどすべての幼稚園と学校に体育館がある。だが、アルメニアのすべての都市の幼稚園と学校がそうなるためには、まだやるべきことがたくさんある」

——数カ月前、あなたはとつぜん引退を声明したが……

「正直のところ疲れた。私はもう29歳だ。重量挙げが嫌になったのではなく、そのために絶えずあちこち飛びまわらなければならないのが嫌になったのだ。

私は自分がこんなに立派な家庭人だとは思ってもいなかった。私のいちばんの楽しみは、家庭で妻のエレーナ、1歳の息子タビドと一緒に過ごすことだ。

私は重量挙げには少しも疲れていない。まだ決して能力を出し切ったとも思っていない。今年の重要な試合——9月に行われる世界選手権と、多分私の公式の最後の試合になる11月のワールドカップでこのことを証明したい。

これらの試合では世界新記録で優勝したい。どのくらいの記録を立てられるかという目算もある」（ちなみにワルダニャンが持つ現在の82・5kg級の世界記録は、スナッチ182・5kg、ジャーク224kg、トータル405kg）。

——人生の最良の年月を捧げてきた対象と別れるのはつらいことだろう？

「重量挙げをやめるとは言っていない。ただこれからは自分のために、健康のために挙げるだけだ」

※　※

最後につけ加えておくと、先のメーデーの直前、ユーリー・ワルダニャンはスポーツ上の優れた成果に対して、わが国最高の褒賞——レーニン勲章を授与された。



昼下がりの公園で



ワルダニャンはギターもうまい。友人たちと歌うのは最高の気分だ。



代議員としてしばしばレニナカン市の新興住宅地の建設現場を訪れる。



彫刻家のアトリエで

モスクワ近郊都市めぐり

ズベニゴロド

自然と静けさに満ちた町 ズベニゴロド

本誌記者 オリガ・ベドニャコワ　カメラ A・ソロモノワ



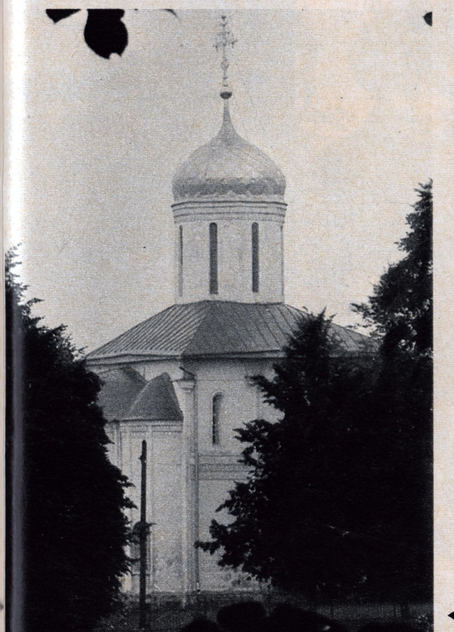
前回（本年1号）のモスクワ近郊都市めぐりではナロフォミンスクを紹介したが、本号ではズベニゴロドへ皆さんをご案内しよう。このまちはモスクワ州72都市中最小の部類に入り、面積8・4平方km、人口はたったの数千人という小都市。産業の発展がめざましいわけでもないし、住宅建設ラッシュがあるわけでもないから〝典型的〟という形容詞は似合わない。だが、首都のけんそうをさけ、平穏と静けさを味わいたくなると、モスクワっ子は〝ズベニゴロドへ行こうよ！〟と声をかけ合う。モスクワの西63kmのところにあり、郊外電車を利用すれば一時間余りで、この独特の美しさと雰囲気を持つ都市につく。



ズベニゴロドの新しい住宅。画一的でないユニークな建築が多い



〝ようこそいらっしゃいました！〟



◀モスクワ近郊最古の石の建物――ウスペンスキー寺院（1399年建立）



市の中心にあるホテル〝ズベニゴロド〟

モスクワ川のほとりの二都物語

前世紀、ズベニゴロドとその近郊は、ヨーロッパの有名な保養地を訪れたことのある人々によって、″モスクワ郊外のスイス″と呼ばれた。アルプスの名所と比較されるのはとても光栄だが、果たして比較する必要があるだろうか？ ズベニゴロドは極めてロシア的な土地だ。ロシアの原風景とも言える広々とした地形ゆえにロシア的なのである。

ズベニゴロドの丘に立つと、果てしないパノラマが広がり、あまりの広々としたさまに周囲三六〇度ではなく、七二〇度の広がりがあるように見える。

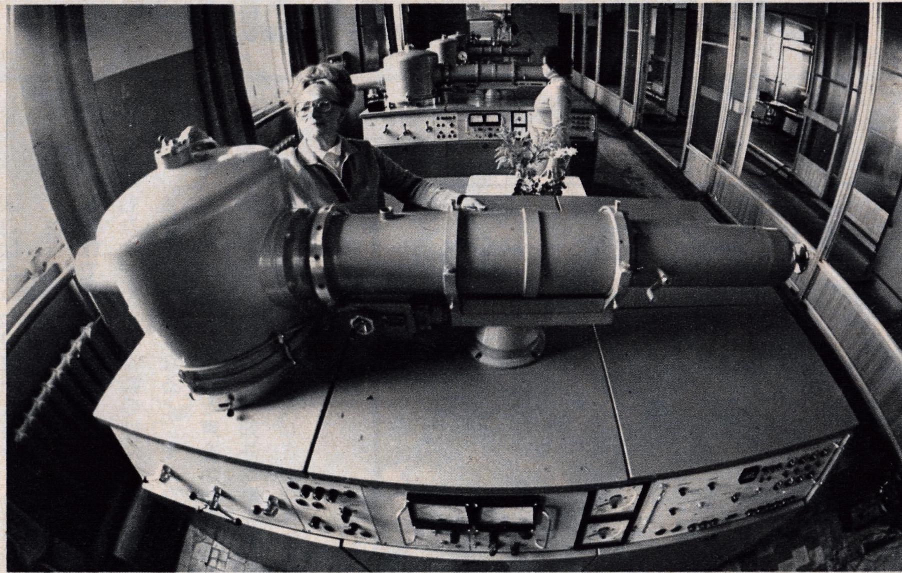
平原と若木の林、そこを這うように流れる川、まるで玩具のように見える村落、地平のかなたの森林の端……パステルカラーの、おだやかなトーンのこの景色は、己の厳かな美しさで人を圧倒することなく、反対に、親しい肉親に会った時のような優しい思いにさせ、きゅっと胸をしめつける。

ところがズベニゴロド市自身のパノラマは見えない。市の大半は丘の上に広がり、森の中にすっぽり収まってしまって姿が見えない。ズベニゴロドが初めての人は、まちに近づくと、ズベニゴロドはどこ？とよく聞く。

モスクワとズベニゴロドを同じ川（モスクワ川）が流れている。両市発祥の頃の歴史も共通点が多い。ズベニゴロドはモスクワ近郊都市の中でも古い歴史を持つ。史料に現れるのは一一三九年以後だが、考古学者や歴史家はズベニゴロドの誕生は11―12世紀と推定している。モスクワとズベニゴロドは同い年で、はじめは兄弟のようによく似ていた。おもしろいことに、この二つの都を領有していたのも兄弟で、モスクワ公の長男がモスクワを、次男がズベニゴロドを支配していた。

ズベニゴロド周辺は丘が多い。ズベニゴロド発祥の地も小高い丘で、白い石造りのウスペンスキー寺院（14世紀末）が今も立っている。モスクワ近郊に現存する最古の建物で、かつてはズベニゴロド城塞とともに土壁で囲まれていた。土壁の名残りは今もなおその姿をとどめている。寺院周辺の土地は、同じモスクワ川沿岸のかつてのボロビツキー丘――モスクワ発祥の地にそっくりだ。現在のモスクワは、いっぱいあった小丘もとっくに掘り崩され、谷間は埋められ、中小の川は地下にもぐり、昔の面影は永久に消えてしまった。ところがここズベニゴロド周辺は、この八〇〇年間ほとんど変わらずに昔のままの姿をとどめている。

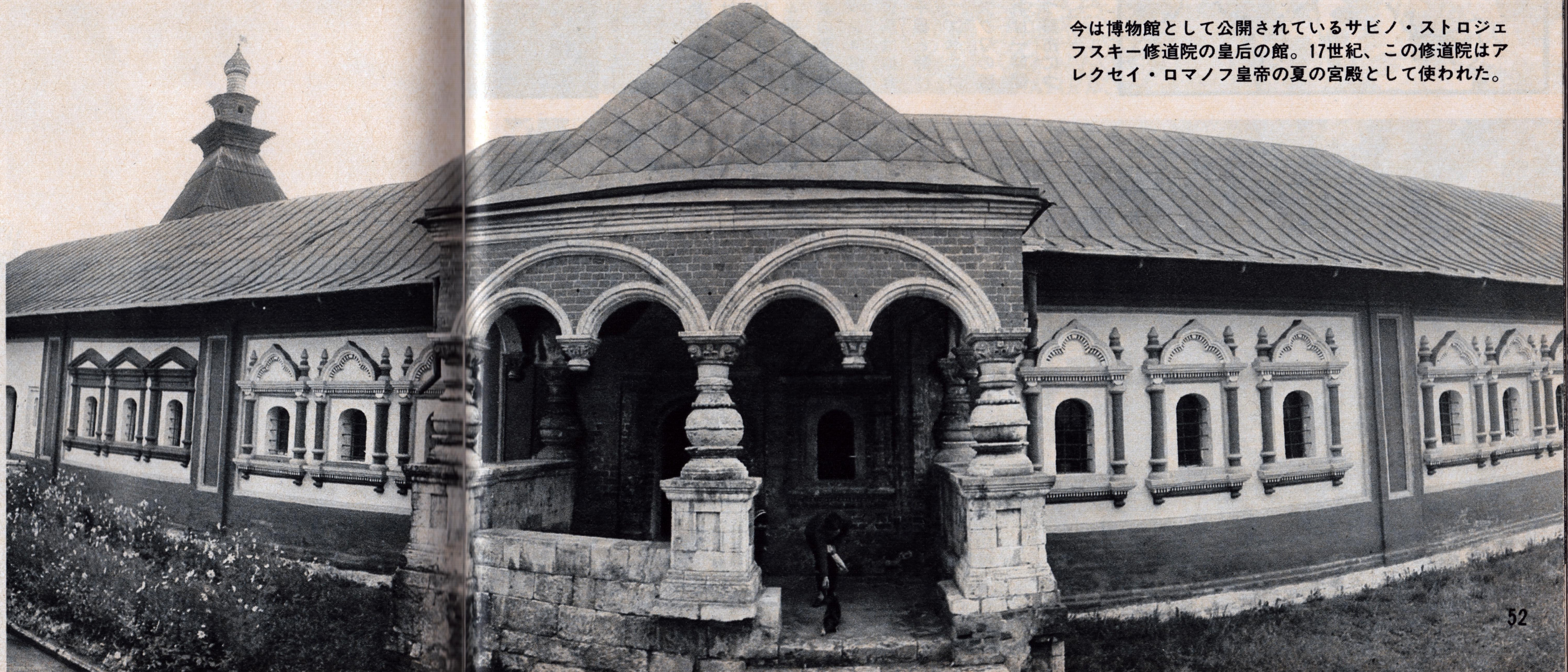
ズベニゴロドという名の由来についてはいろんな説がある。文字どおりに解釈すると、″鳴れ、都よ！″とか″鳴る都″の意味になる。ズベニゴロドはモスクワ公国の西境の見張りの城塞だったので、敵が近づくと鐘が鳴り、その音が鐘楼から鐘楼へとモスクワまで伝わったという、見張りの鐘にまつわる詩的な伝説もある。実際にそうであったかどうかは分からない。だがこの呼び名は現在のズベニゴロ



装身具用の単結晶の栽培装置



▶チェーホフ記念病院の古い建物。記念板には、「偉大なロシアの作家A・チェーホフがここに住み、働いた」と記されている。



今は博物館として公開されているサビノ・ストロジェフスキー修道院の皇后の館。17世紀、この修道院はアレクセイ・ロマノフ皇帝の夏の宮殿として使われた。



ここでは木彫りの装飾のある昔風の家が目につく。

ドにものすごくマッチしている。ここは太古以来の静寂に支配され、それを破るのは鳥（二五〇種以上が生息する）のさえずりと老松の梢の揺れる音だけである。この静けさに耳を澄ますと、確かに、軽やかな、歌うような鐘の音が聞こえて来るようだ。

透明な空気とチェーホフ

「いつもこんな空気を吸っているのか、それとも私が到着したために、今日だけこんなに芳ばしいのか？」――作家アントン・チェーホフはこの地で書き上げた短編にこう書いている。ズベニゴロドはチェーホフとも縁がある。ここは作家の初期の創作活動の場となり、一人前の医者としての活動の舞台ともなった。一八八四年夏、医学部を卒業したチェーホフは一時ズベニゴロド病院で働き、一八八五―一八八六年にはズベニゴロドを数回訪れ、郡医の仕事をした。地方都市の生活は作家に短編の材料をいろいろ与えた。チェーホフはこの土地を非常に愛した。近親者への手紙にはズベニゴロドのことがちょくちょく書かれているが、いずれも作家のあたたかい目が感じられる。

チェーホフの名をいただく病院の敷地には作家が植えたカラマツの並木道がある。木陰の多い小道では、枝を広げたボダイジュの前に思わず立ち止まってしまう。チェーホフは病院からの帰り道、好んでここで一休みしたという。老木の梢の下に座り、過ぎし時や未来について思い、ズベニゴロドの街路の静けさに耳を傾けるのはいいものだ。

ズベニゴロドとその周辺の空気は実際、普通の空気とは違って軽く、透明だ。換気には最適な地形に恵まれ、川と森（七万ha以上が森林）が空気に適度の湿り気を与えている。しかも有害なガスや粉じんを排出する企業もない。空気中のほこりは大都市の$\frac{1}{50}$から$\frac{1}{70}$ほどだ。空気がきれいなので紫外線をよく通し、イオンも多い。

自然の美しさ、健康にいい空気、静寂と平穏――これによってズベニゴロドはモスクワ近郊一の保養地の地位を得た。18―19世紀のズベニゴロド近郊には貴族の屋敷や領地が二〇〇以上もあった。別荘の住民がまちや村で夏を過ごした。有名な画家、作家、作曲家の姿も見られた。

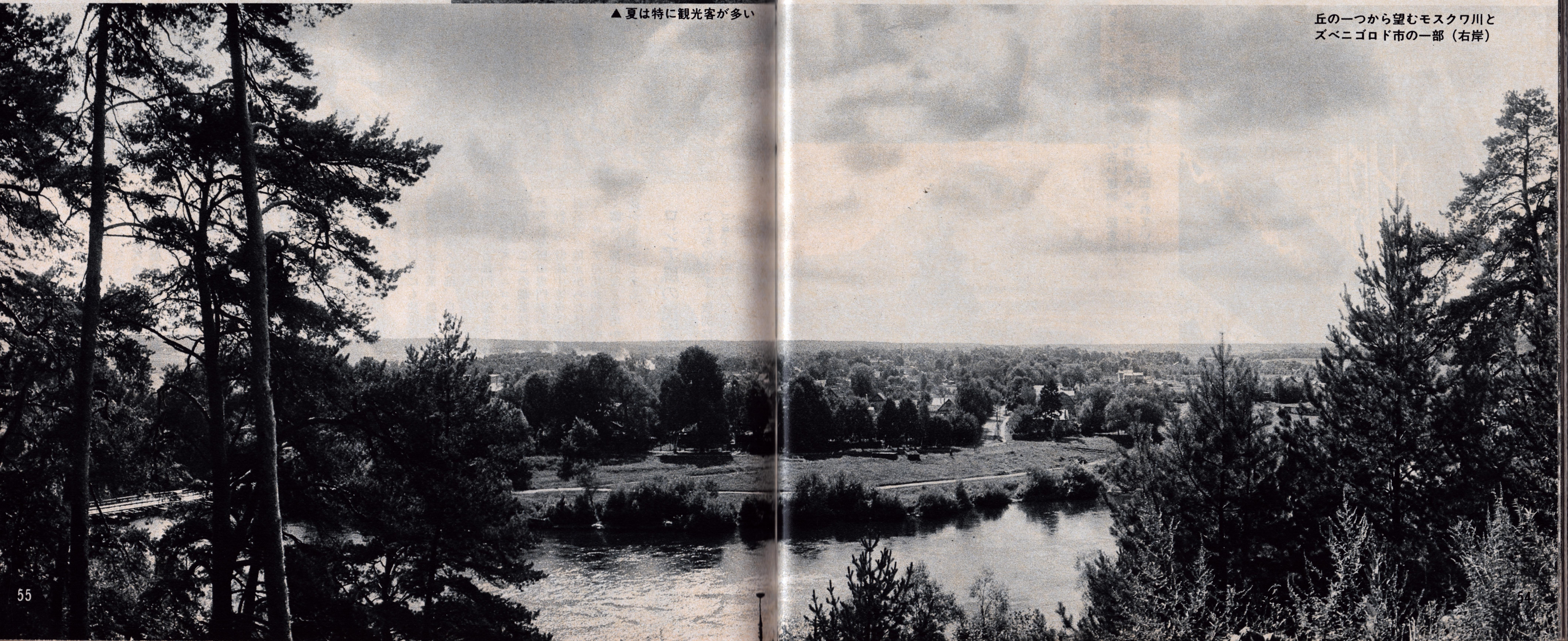
ソビエト政権成立後の二、三十年間にモスクワ近郊の多くの都市は産業の中心地として変ぼうをとげていったが、ズベニゴロドはそのまま残った。首都モスクワへ飲料水を供給するルブリョボ水道の水源保護地帯が設けられ、ズベニゴロド地区もその指定を受けたので、大工場の建設や森林伐採は禁止され、住宅建設さえも制限された。いわばモスクワの成長が間接的にズベニゴロドの運命に影響を及ぼし、ズベニゴロド本来の生き方を見つける助けをしたことになる。ズベニゴロドとその周辺は休養ゾーン、健康ゾーンになった。

地主の屋敷は改造され、その隣には設備の調ったサナトリウムが建てられた。その昔、二〇〇の選ばれた家族が住んだ場所で今は毎年二〇万人以上の勤労者が休養を楽しんでいる。各種の保養・レジャー施設の拡充・発展は現在も続けられており、モスクワ川のほとりや森の中にはモスクワの小中高生が夏休みを過ごすピオネール・キャンプもいっぱいある。

何千人もの観光客が訪れるが、お目当てはサビノ・ストロジェフスキー修道院（15―17世紀建立）。院内の白い石造りのロジェストベンスキー寺院と鐘楼、アレクセイ・ロマノフ皇帝の宮殿が人気を集めている。ついでだが、寺院内部にはアンドレイ・ルブリョフ派に属すフレスコ画の断片が保存されている。修道院内は歴史・建築物保存博物館になっている。



▲夏は特に観光客が多い



丘の一つから望むモスクワ川とズベニゴロド市の一部（右岸）



サビノ・ストロジェフスキー修道院の壁に沿って回廊がある。観光客に人気がある場所の一つだ。

◀ロジェストベンスキー寺院（1407年）の円屋根の土台石を飾る模様

ズベニゴロドの産業

保養地ズベニゴロドを支えるために市の人口の大半が保養・レジャー部門で働いている。だがそれだから職業の選択の幅が狭いとは言えない。大工場こそないが、市内には九つの企業があり、各種製品を生産している。スポーツ衣料縫製工場、靴下工場、ダイニング用家具・レジャー用品メーカー、玩具・児童用楽器メーカー、装身具用人造水晶メーカーなどがあり、その他食肉・食品・乳製品・菓子製造工場がある。

製造業以外にも建設機関、自動車輸送企業、農機具修理工場の地区支部、自動車技術サービス・ステーションなどもある。各部門の働き手は主に地元。ズベニゴロドで養成されている。ここの職業技術学校から各分野の専門家が巣立って行く。財政中等専門学校は有名で、地元からだけではなく、ロシア連邦共和国内の遠く離れた都市など各地から生徒が集まって来る。

ロシア風の民家

これらの企業・機関はズベニゴロドの町並みにすっかりとけ込み、ほとんど気がつかないほどだ。ズベニゴロドの市内を歩いていると、別荘地にいるような気分になる。ここにもモダンな中層住宅が中心部にあり、高台のはずれには新街区もある。だが大部分は木造の平屋で、どれもなかなか味があり、家の壁や垣根は色とりどりで楽しい。昔からロシアでは家の外側の窓を細かい細工を施したかまちで飾る習慣がある。ズベニゴロドの人々はこの伝統ある窓わくの木彫りを大切にし、必要とあらば新たに彫って保存につとめている。今、まちを行くとユニークな家々の木彫りの"展覧会"に目が和む。ズベニゴロドの自然の美は、ここに住む人々の、自然を大切にする心とまちをきれいに飾り、整然とした町並みを保存しようとする意欲によってますます磨きがかけられた。家々の庭がまた手入れの行き届いたセンスのいいたたずまいを見せている。隅々まで無駄なく利用され、ミニ庭園風に見えるのだが必要なものは全部おさまっている。植わっているものは多くはなさそうだが、ライラックかジャスミンの低木、細い道、春から秋まで次々に咲き誇る花壇、長ネギやパセリを求めて店まで走らなくてもいいように、対になった緑野菜の畝まである。夏の日、リンゴの木の下で家族がそろって新鮮な空気の中でお茶を楽しむのもいい。



市の未来像

こう見てくるとズベニゴロドの生活環境はよく、市ソビエトには市の整備と市民の生活条件の改善に結びついた問題は何もないように見える。だがそうとばかりは言えない。例えば住宅問題はそれほど切実ではないが、それでもまだ新しい住まいの提供を受けたいと順番を待っている人もいる。住宅事情をよくするために多くの企業が従業員のために中層住宅を建設しているし、新ミニニュータウンのプロジェクトもある。このミニニュータウンはズベニゴロドの名誉市民ブローニン将軍の名がつく。ブローニン将軍は大祖国戦争中（一九四一—四五）第一四四師団を率いてズベニゴロドへの敵の進軍を阻止した。そのため敵軍は一九四一年の秋にはズベニゴロド近隣の村々、療養所、建築記念物をことごとく破壊しつくしたが、ズベニゴロドの占領はならなかった。

市の中心を流れるモスクワ川の新しい橋の工事がまもなく終わる。今まで古い狭い橋しかなかったので不便をかこっていた右岸の住民にとっては大変便利になる。



ハイキングに出発する前の観光客。ズベニゴロドには美しい場所が多いので、コースはより取り見どり。



モスクワ川右岸から望むサビノ・ストロジェフスキー修道院



サビノ・ストロジェフスキー修道院最古の建物
——ロジェストベンスキー寺院（1407年）

二〇〇〇年まで見込んだズベニゴロド建築マスタープランが承認された。市の独自性とその絵画的景観を保存しつつ、近代的に整備された都市にするために建築家は知恵をしぼった。マスタープランは市の自然の地形を生かしたものになった。市内のモスクワ川沿いの低地には個別のオリジナル設計によるコテージ風住宅が建てられ、中層住宅は高台に建てられる予定だ。中間部の老朽住宅は取り壊され、公園が出来る。一言で言えば、ズベニゴロドは自然の調和を損なわずに、古さと新しさがうまく組み合わされた都市になろう。

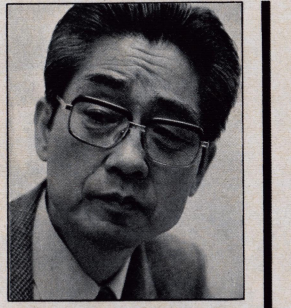
保養・レジャー施設〝ズベニゴロド〟の読書室

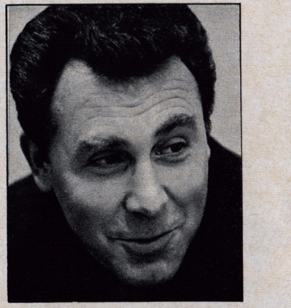


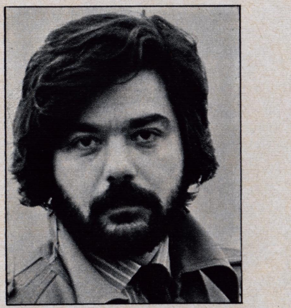


ズベニゴロドとその付近にはソ連科学アカデミーのサナトリウムやペンションが多い。写真はその一つ——サナトリウムのロビー。

ソ連の学校教育——伝統と改革 ⑤


東京大学教授柴田義松氏


本誌記者フェリクス・プラテ


カメラマンのウラジーミル・ビャトキン

（編集部から） 8号、9号、11号、12号に連載されたソ日共同取材「ソ連の学校——伝統と改革」の5回目、いよいよ最終回をお届けします。昨年の秋、編集部の依頼でソビエト教育学の著名な専門家、東京大学教育学部の柴田義松教授が訪ソし、ソ連の多くの専門家と会い、教育と学校改革の問題について話し合いました。柴田教授はモスクワのあと、フェリクス・プラテ本誌記者らと共にアルメニア、エストニア両共和国を訪れ、歴史や民族的伝統の異なる各地の教育事情を視察しました。今回は最終目的地のエストニアからのレポートです。編集部ではこのシリーズについての皆さんのご感想、ご意見をお待ちしています。また、ソ日共同取材シリーズは今後も続ける予定ですので、ご希望のテーマ、問題などについての提案も歓迎します。

バルト海沿岸へ飛ぶ

本誌記者 フェリクス・プラテ

ソ連の連邦構成共和国の首都はすべて、航空路によって互いに結ばれている。客もてなしのいいアルメニア共和国に別れを告げて、われわれ——東京大学の柴田義松教授、本誌記者フェリクス・プラテ、カメラマンのウラジーミル・ビャトキンは早朝、バルト海沿岸の三つの連邦構成共和国の一つ、エストニア共和国の首都タリンに向けて飛び立った。

エレバンからタリンまでは北西へ約三〇〇〇km。ソ連欧州部をほとんど端から端まで横切る。行程は約4時間。

夏か冬ならば、アルメニアとエストニアの間の気候のちがいはたちまち分かる。エレバンでは夏は暑く（35度Cに達する）、蒸す。冬は乾燥して、かなり寒い（マイナス20度Cに達する）。つまり大陸性気候のすべての特徴が現れる。バルト海の沿岸にあるタリンは夏でもあまり暑くなく（平均20—25度C）、雨が多く、呼吸が楽である。冬は温暖で、湿った雪が降り、風が吹く。だが、秋には大きなちがいは感じられない。というのも、エレバンは意外に涼しく、われわれが着いた日には雪さえ降ったからだ。もっとも、すぐに解けてしまったが。

一方、タリンでは、秋晴れで太陽が輝いていたが、コートを着ていても決して暑くはなかった。すでに〝黄金の秋〟（日本で言えば〝紅葉〟）の時季は過ぎていたが、木の葉はまだ落ちていなかった。

われわれの親切な〝世話役〟——ノーボスチ通信エストニア支局の同僚たちは、われわれをタリン市内と郊外に案内し、日本のプロフェッサーにエストニアの歴史とその特徴を紹介してくれた。

エストニアとエストニア人

エストニア共和国はバルト海沿岸の三つの共和国（あとの二つはリトワ共和国とラトビア共和国）のうちで最も北に位置し、人口（一五一万九〇〇〇人）ではソ連の15の共和国のうちで最も少ない。面積（四万五一〇〇平方km）ではバルト海沿岸の3共和国の中で最小だが、15共和国の中ではアルメニア、モルダビアより大きい。

エストニアでは人口の70％が都市に住んでおり、しかもその約$\frac{1}{3}$（四五万八〇〇〇人）が首都であり、海港都市であるタリンに住んでいる。全人口の64・7％にあたる九四万八〇〇〇人がエストニア人である。エストニア語はウラル・アルタイ語族のうちのフィン・ウゴル語族に属す。非常に音調が快く、歌うようで、長い母音が多い。ソ連諸民族の言葉の中で、非常にむずかしい言葉の一つと見なされている（もっとむずかしい言葉もあるが）。文字はローマ字のアルファベットに依拠しており、アルメニア語のように特別な文字ではない。エストニアに住んでいるロシア人は別として、アルメニア語と同様、ロシア人には通じない。だからエストニア人同士が話しているときは、私もビャトキンも柴田教授も、まったく〝対等〟にチンプンカンプンだった。

写真からも分かるように、エストニア人の圧倒的多数は髪が亜麻色で、色白である。先に訪れたアルメニアの浅黒くて髪の色の黒い人々とは対照的だった。

エストニアの人口の中でエストニア人の次に多いのがロシア人で、四〇万九〇〇〇人（27・9％）。そのほかウクライナ人（2・5％）、フィン人、ベロルシア人、ユダヤ人なども住んでいる。特に都市は多民族的である。ロシア人はすでに16世紀に現在のエストニア共和国領にあたる地域の東部——チュード湖沿岸とナルワ川流域に住みつき始めた。第2次世界大戦後ロシア人、ウクライナ人、ベロルシア人の人口が増えたのは、工業が急速に発達して、技能資格を持つ専門家や労働者が必要になったからである。

エストニアの産業

エストニア共和国は経済の面ではソ連の連邦構成共和国の中でもかなりの独自性を持っている。ソ連全体と比べると、エストニアの国民経済の構成における工業の比重はいくぶん小さく（64・4％）、農業の比重が大きい（15・6％）。1人あたりの社会的総生産と国民所得ではソ連でも上位に入る。

自然条件と地理的条件によって、船舶修理、遠洋漁業、沖合い漁業、魚加工業、観光が盛んだが、特筆しなければならないのはこの国の地下資源である。エストニアのコフトラヤルベ地区はオイルシェール（油母頁岩）が豊富で、これによってソ連北西部全域の電力を賄っている。住民1人あたりの発電量ではエストニアはソ連第1位、世界でも第3位である。燐灰土も全ソ的な意義を持っており、エストニアの可採埋蔵量はソ連最大級である。

従ってエストニア共和国の主要な産業部門はオイルシェールの採鉱と乾留、化学工業、機械工業、建設資材工業、パルプ・製紙工業、木材工業で、沿バルト発電所とエストニア発電所はオイルシェールで稼働しているソ連でただ二つの火力発電所である。食品工業の中では魚加工（タリン、ピャルヌ）、食肉、バター、乳製品の部門が全ソ的な意義を持っている。

そのほか、エストニアは人気の高い観光・保養地でもある。ここには有名な気候・泥浴療養地（ピャルヌ）、泥浴療養地（ハープサル）、気候療養地（ナルワ・イウイエスー）があるし、共和国の南部には無数の湖が点在する。夏になると釣りの愛好家、静かに森の中で休息したいと思っている人、豊富なキノコや草の実に魅せられた人たちがやってくる。

エストニアの教育

エストニアの教育はかなり古い歴史を持っている。最初の学校はラテン語学校で、支配階級の子弟のためのものだった。一六三二年にはタルトゥ市にいわゆるグスビアン・アカデミーが設置された。これは一時中断したが、一七一〇年までつづいた。この大学が現在のタルトゥ大学の前身である（タルトゥ大学については本号20ページで紹介）。

17世紀末、タルトゥの近くに師範学校があり、ここで一六〇人のエストニア人が教育を受けた。エストニアの国民学校の基礎が置かれたのは17世紀の後半だったが、農民学校（3年制の郡学校と2年制の教区学校）網が普及したのはようやく19世紀の後半である。19世紀末には、エストニア人の読み書きのできる人の割合はかなり高かった。たとえば一八九七年の国勢調査によれば、エストニアでは読み書きのできる人は人口の77・7％。読むことだけできる人は91・2％だった。

くり返しになるが、現代の教育原理と教育システムはソ連全国一律である。一九七九年の国勢調査によれば、エストニア国民経済の就業人口一〇〇〇人あたり七八六人が高等教育および中等教育終了者である。近年この数字は言うまでもなく増えている。

エストニア共和国には大学が6、中等専門学校が約40あり、そこで二万五〇〇〇人以上の学生、やはり同じ位の数の生徒が学んでいる。

エストニアの学校では、そのすべての段階において、エストニア語で授業が行われているが、ロシア語で授業が行われている学校もあるし、大学ではロシア語で授業が行われている学部や学科もある。

〝ラフワ・ボイト〟コルホーズで

〝ラフワ・ボイト〟とはエストニア語





上　エストニアで訪れた″ラフワ・ボイト″コルホーズの中学校のマチ・クーレ校長（中央）はもう20年ここで教えている。校長としての仕事のほか、生徒たちにロシア語と文学を教えている。

上左　4年生の体育の時間の準備体操（″ラフワ・ボイト″コルホーズの中学校で）



″ラフワ・ボイト″コルホーズの幼稚園のお昼寝の時間

で″人民の勝利″を意味する。読者の皆さんは恐らくもう、ソ連ではさまざまな企業に地名とは関係のない名前がつけられていることを、それほど不思議には思わないだろう。このコルホーズは戦後に組織されたので、こういう名前になった。

バルト海沿岸で昔から多く見られる居住形態は″フートル″と呼ばれる独立農家か、ロシアによくある帯状に延びた″縦列状″の村ではなく、″団塊状″の村である。団塊状の村の特徴は屋敷が無秩序に並んでいることで、しかも互いにかなり離れている。コルホーズはまさにこのようないくつかの村から成り立っていた。もっとも、村の当初の姿はいまではわずかしか残っていないが。

ここでは穀物とジャガイモを栽培し、純血種の牛とブタを飼育し、牛乳と肉を生産し、トマト、キュウリ、ムラサキキャベツ、花――カーネーション、ストック、チューリップ、シクラメン、キク、バラを栽培している。

最初″ラフワ・ボイト″は純粋な農業企業だった。だが、エストニアでは冬がかなり長いので、住民の通年就業



この幼稚園のお昼寝の時間は午後1時から3時まで。ベッドは収納式なので便利だし、場所をとらない。



″ラフワ・ボイト″コルホーズの8年制中学校の校舎

を保障するために、副業として一連の工業製品を生産するようになった。コルホーズの製品はすべて首都タリンへ出荷される。

われわれの主要な目的はコルホーズの8年制の学校を視察することだったので、これらすべての活動を詳細に見ることはできなかった。だが、その規模を示す次のような数字は挙げておこう。

コルホーズの土地の総面積——八四九三ha。

耕地面積——三一一二ha。

コルホーズ員数——六二八人。

生産物の売り上げによる年間の現金収入——六〇〇万ルーブル以上。

年間の純益——二三〇万ルーブル。

牛の飼育頭数——三三四二頭。

ブタの飼育頭数——三二五六頭。

穀物の年収穫量——四〇二六t。

二つの方向の努力

コルホーズはエンゲリ・アダミ党書記が、学校はマチ・クーレ校長がわれわれを案内してくれた。クーレ校長はロシア語と文学の教師でもあり、ロシア語がとてもうまい。ほとんどアクセントにくせがなく、これほど上手に話せるエストニア人は珍しい。

コルホーズの8年制の中学校とはどんなものか、学校改革との関係で教師集団とコルホーズ指導部が当面している課題は何か、それがここではどのように解決されているか、については本号で柴田教授が詳しく書いている。私はただ次のことだけつけ加えておこう。

学校改革の目的の一つは、生徒の進路指導を強化し、卒業時にはすべての生徒が将来何になりたいか、あるいは何になることができるかをはっきりさせ、あれこれの専門職種に必要な訓練または一定程度の技能を身につけておくようにさせることである。〝ラフワ・ボイト〟コルホーズではいま、この問題はすでにかなり解決されている。

ここでは学校改革が採択されるよりずっと前にすでにこの問題の解決に着手した。それは、実生活がコルホーズの指導者にこの問題を提起したからである。解決はいわば一つの目標をめざして二つの方向で始められた。それは極めて正しいやり方だった。

その一つは、子どもたちに農業に対する愛情を植えつけ、農業の必要性と社会的意義、威信、物質的に有利なことを教える必要があった。一方、コルホーズでは、農村での生活が都市での生活よりも優れていて豊かであるような生活条件、労働条件、物質的条件をコルホーズ員のために作り出す努力が行われた。そのために畜産場、養鶏場、牛乳工場、修理・建築工房、ガレージに最新の科学の成果を取り入れ、コルホーズ員の労働を軽減する措置を講じ、付属地と都市並みの設備をそなえた一戸建て住宅や集合住宅（好みによって選択できる）を建設し、青少年の余暇を組織し、アマチュア・アンサンブルやサークル、劇団、アマチュア・オーケストラ、その他多くのものを作った。子どもたちはコルホーズで生活し、働くことがすばらしいことであり、コルホーズの仕事が多くの利点を持っていることを知ると、次第に都市にあこがれないようになり、コルホーズに必要な専門職を身につけたいと思うようになった。専門家や、1—2年で専門職を身につけることができる学校の科学技術サークルや科学技術学級が生徒たちを援助した。

もちろん、これらの職種はすべて村での仕事に必要なものである。だがコルホーズではだれひとり、コルホーズ員の子弟はすべて農村の働き手とならなければいけない、などとは考えていない。子どもたちのだれかに特別の才能があったり、コルホーズには必要ない職業に就きたいという者がいたら、指導者たちは反対しないだけでなく、一時金を支給して、その子が都市で勉学をつづけるのを援助さえしている。

マチ・クーレ校長は言う——「いまは〝農村の〟職業ではなくても、高度の技術を持つプログラマーやコントラバスの教師、バレリーナが、将来は非常に役立つかもしれません。コルホーズの子どもたちのために〝ラフワ・ボイト〟の働き手がさらに何を作り出そうと考えつくか、だれにも分かりませんからね……」

結びに代えて

学校改革はこれからの世代と社会そのものの進歩についての社会の配慮が動機だった。われわれは本誌で5回にわたって、われわれ——日本の教授、ソ連のジャーナリスト、カメラマンがモスクワと二つの共和国——アルメニアとエストニアのさまざまな学校や研究機関を訪れて見聞したことを読者の皆さんにお話しした。

もちろん、お話ししたことだけでこのテーマがすべて語り尽くされたわけではなく、テーマの輪郭が指摘されたにすぎない。われわれはそれぞれちがった目で見たが、興味や関心は一致していた。われわれはさまざまな結論を出したが、毎晩ホテルで印象や意見を交換し合ったさい、すべての問題を分解して、それを通分した。われわれは日本の教授から、専門分野である教授法、心理学、教育原理を教わった。と同時にわれわれは、教授がソ連の現実のあれこれの面を理解するのを手伝った。

われわれはお互いにいたわり合い、助け合った。なぜなら、この共同取材が日本の読者の皆さんにとって興味深い、有益なものになってほしいと願ったからである。われわれはソ連の教育システムのすべての環に対する日本人の大きな関心（本誌編集部への手紙でもソ連の教育についての質問がいちばん多い）に応えようと心から努力した。

われわれの仕事は終わった。こんどはあなた方、読者の皆さんが発言する番である。ソ日共同取材「ソ連の学校教育——伝統と改革」に対する皆さんのご批評を首を長くして待ちながら、本誌の誌面を借りて、前もってお礼を申し上げておく次第である。

〝教育の旅〟を振り返って

東京大学教授　柴田義松

モスクワ——エレバン——タリンとつづいた私たちの教育探訪もいよいよ終着点に近づいた。アルメニアの首都エレバンから、バルト海沿岸の北国エストニアに向けて飛び立ったのである。ソ連邦を構成する十五共和国のなかでアルメニアは面積が最小の共和国、エストニアは人口が最小の共和国である。エストニアの人口は一五〇万人ほどしかない。

それにしても、ソ連がいかに広大な土地をかかえ、多様な諸地域から構成されているかを、私はこんどの旅であらためて思い知らされた。エレバンは、緯度の上ではわが国の青森、タリンは樺太のはるか北、カムチャツカ半島の北端に近い。アルメニア語もエストニア語も、ロシア語とはまったく言語系統がちがうが、国民性のうえでもそれぞれかなりのちがいがありそうだ。三カ国をめぐった旅のなかの思い出をここですこし話そう。

ぶどう畑がつらなり、果樹園にかこまれたエレバン近郊の十年制学校を訪れたのは、土曜日だったが、二つの楽しい思い出がある。

この学校には、モスクワのような大都市の学校ではめったに見られない広々とした運動場があり、陸上競技のトラック、バレー・コート、サッカー場などがつくられていた。しかし、土曜日でも、そこで運動しているのは、サッカーのまねごとをして遊ぶ数人の小学生しかいない。ボールをいくら大きく蹴ったところで人にあたる心配はない。楽しげに遊ぶ子どもたちの仲間に私もしばらく入れてもらった。しりもちもついたが、何年ぶりかにボールを思いっきり蹴るサッカーの味をあじわったのである。

ついで、子どもたちが学校から帰っていった土曜日の午後、私たちは、学校の先生方十人ほどと会議室でにぎやかな小パーティーを開いた。コニャックの本場アルメニアでは、訪問先のいたるところで果物とコニャックをすすめられたが、この日の御馳走は格別だった。一人の先生がザクロをしぼって作ってくれた生ジュースのおいしい味は忘れられない。年輩の先生たちの顔にうかぶアルメニア人特有のいかつい表情も、コニャックとウォッカによる乾杯がつづくなかで、すっかりくずれ、人の良いおじいさん顔になり、友好的雰囲気はいやがうえにも高まっていった。

十日間という短い旅であったが、私たちが出会い、話しあった人は数知れない。ロシア・ジョークをふんだんにあやつり、話上手のプラテ氏が道連れだから、いつも退屈するひまはなく、インタビューでもたくさんの有益な話を相手から引き出すことができた。エストニア農村の教育探訪に移るまえに、特に印象に残った教育の旅にふさわしい話をここで二、三紹介しておこう。

私たちが各地で訪問したのは、大学、学校、教育者、教育研究所等だったが、方々で話題にのぼったのが、家庭教育の重要性であった。学校よりも家庭ですごす子どもの生活時間の方が長いことを考えれば、家庭教育が大切なことは当然だが、ソ連でも核家族化がすすんだり、国民経済の諸部門で科学技術革命が進行するなかで、子どもをとりまく生活環境、とりわけ家庭での生活がさまざまの深刻な問題を生みだしているようだ。

注目されるのは、こんどの教育改革で新しい教科「家庭生活の倫理と心理」が高学年に導入されることだ。現在、その教科書や教授法参考書の作成作業がすすんでおり、来年度あたりから九学年でそれが教えられることになる。家庭にどんな問題があり、何を改善しようとするのだろう。

ソ連の離婚率が高いことは有名である。アメリカを追いこし世界のトップに立つ勢いである。離婚自体はなはだ不幸なことだが、さらにそれが子どもにおよぼす影響が問題である。欠損家庭の子どもは学業成績が落ち、少年非行に走りやすいという調査結果がソ連でも出ている。ところで、ソ連の若者たちの平均結婚年齢は最近二〇〜二三歳とかなり早婚である。離婚が多いのは、この結婚の低年齢化や性教育の欠如と関係があると見られているようだ。新教科「家庭生活の倫理と心理」で教えられるのは、家族関係とか家庭生活のあり方、育児、子どもの教育の問題とともに性教育に関する問題であり、性教育が正課の教育内容となるのはソ連では画期的なことといえる。

こうしたソ連における家庭教育の問題をいろいろと話しあっているなかで、私が耳をそばだてた話がさらに二つある。

「アメリカの子どもたちの独立独歩の行き方に、私たちはもっと学ぶ必要があります」——このように語ったのは、ソ連邦教育省学校局次長のキーラ・アガノホワさんである。現在、ソ連では核家族化がすすみ、子どもの出生率も低下しているが、そのため両親が子どもに対しとかく過保護になりがちである。「子どもには、〝自分のことは自分でする〟独立心を早くから養うべきです。ソ連の子どもたちは、規則とか外部からの規制を待っている傾向があります」

キーラ・アガノホワさんは、静かにやさしい口調で語る婦人だが、その人からこのような辛辣な批判がとび出たことに、私はいささか驚いた。と同時に、過保護という点では日本の子どもも同じかそれ以上であり、私にとっては耳の痛い話でもあった。

もう一つ、やはりソ連の現代っ子に対する批判だが、「最近の子どもはあまり質問をしなくなった」という、ソ連教育科学アカデミー就学前教育研究所のポディヤコフ所長の話は、とても重要な問題提起だと思い、私の頭にこびりついている。

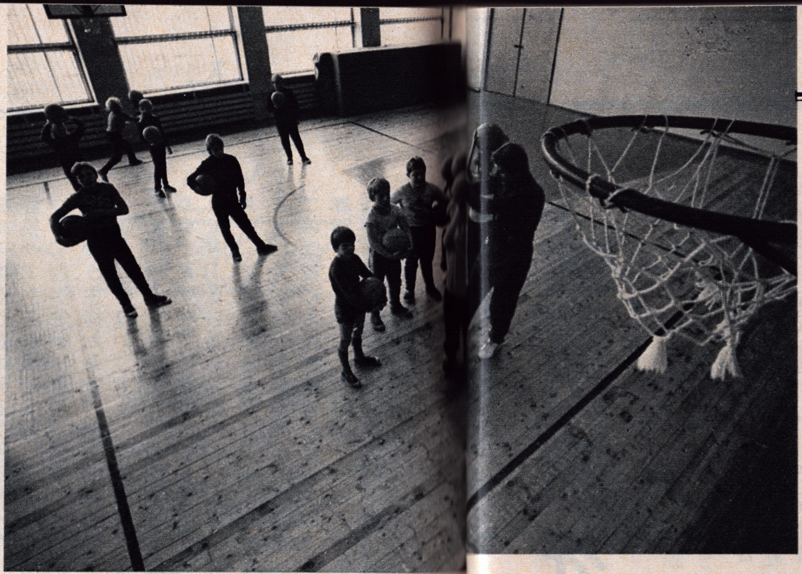
どうして質問がすくなくなったのかという私の問いに、ポディヤコフさんは次のように答えた。

「幼稚園の教師も親も、子どもに教えすぎるのです。子どもに何もかも説明したうえ、"分かりましたか、分かりましたか？" と念をおしています。これでは、疑問をもったり、分からないことがあることが許されなくなってしまうでしょう。

疑問が残らないように説明しつくすのが教師の仕事だという考えはまちがっています。むしろ子どもの質問は、子どもの知的興味や積極性のあらわれとみるべきです。子どもから質問がつぎつぎと出てくるような授業の方が望ましいのです。実際に、すぐれた教師の授業ほど、子どもの質問をたくさん引き出し、質問があることが次の授業への関心を高めているのです」

これは、質問のすくなくなった子どもへの批判というよりも、子どもからの質問をすくなくさせている教師とか教育体制への批判といった方がよいだろう。ボディヤコフ氏は、子どもの知的発達の研究を専門とする心理学者であり、子どもの知的発達と教育の問題として、この話をしてくれたのだが、なかなか含蓄のある議論であったと思う。







右　コンパスで円を書くのは簡単なことのようだが、1年生（6歳）にはそうはいかない。でも、プロフェッサーに手伝ってもらうと、なぜか上手に書ける……。（"ラフワ・ボイト" コルホーズの中学校で）

上右　寒い間、学校の体育館は体育やバスケット、バレーボールの試合に盛んに利用されている。

上左　"ラフワ・ボイト" コルホーズ幼稚園のアネ・クム園長から話を聞く一行

エストニア農村の教育探訪

エストニアでも、私たちは、私の希望で首都タリンから十八キロほど離れた農村の学校を訪問した。農村に興味があったのは、このところ発展の停滞しているとうわさされるソ連の農業やコルホーズの生活の実態をこの目でたしかめ、都市と農村とのあいだにどのような差があるのかを、学校教育の面で調べてみたかったからである。

ハリュー地区ラフワ・ボイト（人民の勝利）コルホーズは、一九四九年に創立され、その後八つの小農場を統合して作られた。この地方では平均的な集団農場であった。総面積八五〇〇ヘクタール、耕地三一〇〇ヘクタール。牛三三〇〇頭、豚三二〇〇頭を飼っている。コルホーズ員は六二八人、うち農業従事者は約五二〇人で、他は年金生活者である。教育施設としては、子ども九〇人収容の保育園と八年制学校とがある。

学校へ行くまえに、コルホーズのセンターで、コルホーズの概要についての説明を聞いた。センターは、見渡すかぎり広大な緑野と林に囲まれたなかで、近代的な建物（管理室、医療センター、郵便局、その他の各種サービス・センターが集まる）数棟からなり、五階建てのアパートと隣接してたっていて、ここだけは町の大工場の一角のように見える。

昔は、貧しい農家がぱらぱらと立つ寒村だったそうだが、いまは十四のアパート、五十一の独立家屋が立ち、すべて集中暖房・水道の設備が整い、家庭の九〇%が自家用車もちで、都市の生活とほとんど変わりはなくなったという。私が特に関心をもって聞いたのは、最近の人口移動である。十年ほど前までは、コルホーズから都会へ出て行く者が多かったが、最近は逆に、都会からコルホーズへというUターン現象が見られ、人口は上昇傾向にある。今年は、コルホーズからの転出者が十四名、転入者が四十五名であった。転出者のうち一人は、勤労意欲がなくて集会で追放処分にされた者だが、他は自分で出ていった者である。逆に、都会生活にあきて入村を希望する者が最近ふえてきているが、建設労務者、トラクター運転手など熟練労働者は歓迎されるものの、無条件に許可されるわけではないという。話を総合すると、このコルホーズに関するかぎり、経営は極めて良好で、三十年前（一九五一年）とくらべると穀物生産は三・九倍、じゃがいも一・五倍、ミルク五・二倍、金銭総収入では三四倍に増加し、新しい家屋、食堂、プールなども建設中で、ソ連農業の停滞現象などまったく見られないようすであった。

八年制学校を私がソ連で見たのは、ここがはじめてである。都市ではほとんどが十年制学校になっているからだ。この学校の創立は一八五八年で、ずい

ぶんと古いが、建物は一九六八年の改築で二階建て、生徒総数一六四名、各学年平均二一名という小規模校である。教師は一五名、うち二人は師範学校卒、他は大学卒で、五名が本校出身だという。当然のことながら、コルホーズとの関係は極めて密接で、学校の教材とか設備等の拡充（たとえば、トラクター、スキー、エンジン付ソリなど）は、コルホーズの援助でおこなわれている。コルホーズの人材養成が教育の基本目的とされており、ソ連のこんどの教育改革で目指されている労働教育や職業指導の充実改善は、この学校ではほとんどすでに達成されていると、校長先生は話した。

生徒全員の農業実習が学校付属農園でおこなわれるほか、課外活動としての農業サークルが、家畜飼育、野菜果物栽培、トラクター運転等の部門に分かれてあり、生徒の職業指導のうえで大いに役立っている。このサークルの指導には、コルホーズの専門家があたっており、今年の秋から、その指導員に手当が支給されることになった。農業サークルの活動は週二回二時間ずつで、六年生から加入できる。

ふつう生徒たちは、農業関係のサークル一つのほか、スポーツ・クラブとか文化サークルの一、二に参加しており、この学校で活動しているサークルは十四（うち農業関係は二）ある。エストニアは音楽教育がさかんで、五年ごとに大きな合唱祭が開かれており、この学校にも民族楽器のサークル二、舞踊サークル二、合唱サークルが一ある。卒業生のうち半数以上は、農業・建設関係の中等専門学校（テフニクム）へすすむが、その学生たちにはコルホーズから奨学金が出る。さらに大学へ進学する者が五名ほどいる。

この学校を見学していて、私の注意をひいたことが二つある。一つは、廊下に張り出されていた各学年の成績優秀者の顔写真である。都市の公園や街頭で、労働英雄の顔写真が並んでいるのをソ連ではよく見かけるが、それの学校版といったものか。ソ連人のあいだでは、名誉が非常に重んじられている。学校でもこのような形で名誉心に訴える方法が学習の動機づけに用いられているわけだが、一種の競争によるこの動機づけが、ソ連の教育のなかでどのような役割を実際に果たしているのか、いわゆる内発的動機とどのように関係しうるものか、私にもこれはまだよくわかっていない。

二つ目は、学校のなかなか立派な独立した体育館で見た設備上のちょっとしたアイデア（工夫）である。体育館は、バスケットボールができる標準的なスポーツホールの大きさだが、その一壁面が前方に倒れてきて舞台に早変わりする仕掛けになっている。講堂兼用の体育館となるのだ。わが国でも学校の建築基準があって、高校以下では独立の講堂がもてないため、たいてい体育館が講堂兼用となっているが、このような仕掛けはいちども見たことがない。空間をうまく利用しているのだ。もう一つ、やや低目の天井に螢光燈がついているが、ボールがあたっても支障のないよう、覆いとともにクッションがつけてある。建築家たちのアイデアに感心した私だが、同じようなアイデアを隣接の保育園でも見ることになった。

子どもたちがちょうど昼寝をしている時間に訪問したため、子どもたちの活動を見ることはできなかったが、可愛い顔で寝ている子どもたちのベッドが興味をひいた。折りたたみ式で、これも教室の壁ぎわから引き出されるようになっており、折りたたむと寝室が完全に教室に早変わりしてしまうのである。エストニアの保育園ではどこでもこのように寝室と教室とが兼用になっているようだ。このような空間の経済的利用の工夫は、小国のエストニア人に特有の知恵からきたものかもしれないが、狭い土地の利用にいつも喘いでいる日本人が大いに見習ってよい工夫だとつくづく感心して見て帰った私である。

◇

「五つの目で見るソ連の教育」共同取材もいよいよ終着点にきた。この新しい企画が、読者にソ連の教育についてどれだけの新しい情報を伝え、興味をよびおこし、参考になりえたか——私たちには評価できない。読者からの積極的御意見や批判を待つばかりである。

ふりかえって、私自身について言えば、こんどの取材旅行で得たものは大きい。はじめて訪れたアルメニア、エストニアというソ連にとって辺境の地の学校や保育園が、それぞれの特色をもちながらも、ソ連政府の統一方針に基づいて、モスクワの学校や保育園と基本的には変わりのない設備をととのえ、社会主義的国民教育の実践とその改善充実に努めていることを確めることができた。これから五～十年かけて実現しようとする大きな教育改革の準備の真っ最中に各方面の取材にあたったことも、私たちにとっては幸運だった。ソ連の教育制度は、全体としてはすでに安定した確固とした基盤の上に成り立っている。だから、一見どこにも揺らぎはないし、何も問題はないかのように見える。よそ者には特にそのように見せるのがふつうだろう。だが、今回はちがっていた。自画自賛を聞くようなことはあまりなく、むしろソ連の学校とか家庭のかかえる問題点があからさまに語られ、それらをどう改めていくかというところに話の重点があった。しかし、現場を取材した私の率直な印象としては、ソ連の教育者たちはだれもが謙虚でつつましやかだが、その物腰全体には安定感がみなぎっており、わが国で生徒の校内暴力、少年非行、登校拒否等に揺らぎ苦悩している教師たちを私が身近に知っているだけに、それはうらやましいほどのものであった。私は、私なりに日本人の目でソ連教育の現実をとらえ、その見聞を報告してきたが、教育という仕事、その技術の本質というものは、私がまえにも書いたように、容易にはつかみがたい奥行きの深さをもっている。私たちがこんどの共同取材で、どれだけその深部に迫りえたか、まったく心もとない。しかし、そもそも一回の取材で、ソ連の国民教育という巨大な事業の全貌をつかもうとすることがどだい無理な話である。なにがしかその一面の真実でも伝えられれば、よしとせねばなるまい。このような試みが、今後もつづけられることを願いつつ筆をおくことにする。

ソ連共産党第27回大会へ向けて

ソ連の発展の重要な節目となる党大会

ノーボスチ通信評論員 ドミトリー・ガイマコフ

こんどソ連共産党は結党以来80年を超える歴史で27回目の党大会を迎える。中央委員会は大会と大会との間の党活動を指導する機関であるが、去る4月総会で第27回党大会の開催日を一九八六年2月25日と決め、その議事日程を承認し、大会代議員の選出基準（党員三六七〇名について一名のわり）を定めたほか、大会の前の報告・選出キャンペーンの期間を指定し、党の集会と協議会で詳しく慎重に検討を要する諸問題を挙げた。4月総会ではM・ゴルバチョフ中央委書記長が第27回大会の招集と、この大会の準備と実施に関係のある課題について報告を行い、きたる党大会がソ連発展の重要な節目となるに違いないとの確信を表明した。

各党大会の決定はいつもソ連の内外政策に大きな影響を及ぼすが、それはソ連共産党そのものの地位、力と影響力によるものだ。ソ連共産党は一九一七年に世界で初めて、帝政ロシアに住んでいた諸民族を社会主義革命の勝利へ導いた。ソ連共産党に指導されて現実的社会主義の社会がソ連に建設された。ソ連共産党は現代の国際共産主義運動の発足の先頭に立った。いまや八〇〇〇万以上の共産主義者がこの運動に参加しており、地球上の一大勢力になった。さらに、ソ連共産党はソ連の政権党である。

ソ連共産党の大会そのものの性格もこれに劣らず重要である。党大会とは、党の意思、目的、任務を表現する最高権力をもつ党の最高機関である。党規約によると、党大会は5年に1回以上招集され、幅の広い民主主義的基礎に基づき、問題の審議を完全に公開して行われる。大会の代議員は例外なくすべての党組織を代表するもので、秘密投票で選出される。この場合どの党員も、大会前の報告・選出キャンペーン中に自分の意見を述べるだけでなく自分の気になっている問題を直接大会にはかることができる。すべての党組織、党員、党員候補は党大会の決定事項を実行する義務を負う。大会の決定がとくに重要なのは、次の党大会以外誰も廃止も別のものに取り替えもできない点にある。

内政面では各党大会の決定は、ソビエト社会の社会・経済の発展における大きな前進を意味した。平和と諸国民の安全の強化をめざすソ連共産党とソビエト政府の闘いの基本方向が決められたのも、これらのソ連共産党の大会でのことである。

ソ連共産党大会は一つ一つが党生活の新段階となり、党の発展の重要な道標となった。各党大会では党の政策、戦略、戦術、党の組織活動とイデオロギー活動の緊急問題が決定されてきた。

第27回党大会は、例によって、ソ連共産党中央委員会と中央監査委員会の報告を聴き、党中央機関を選出する。国の経済・社会の基本的発展方向の検討のような条項の本質的変更も行われるはずである。こんど初めて次の第12次5カ年計画（一九八六—一九九〇年）だけにとどまらず、20世紀末（二〇〇〇年）までの期間の基本的発展方向が決定されよう。これは、生産の集約性の向上で根本的変革をはかりたいという熱望、また、労働生産性や科学技術の成果の利用を世界の最高レベルに引き上げたいという熱望に関係があることであり、このためには、5年という期間では不十分で、もっと長期にわたる展望が必要になってくる。

こんどの党大会は前回の第26回大会で採択された決定にのっとって、党の主要な理論的文書である党綱領の新稿を採択しなければならない。国の社会・経済の基本的発展方向と同じく、党綱領新稿の草案も全党的、全国民的審議に委ねるために公表されることになっている。党大会で採択されたら、この新綱領はこんご何十年にもわたってソ連共産党の活動とソビエト社会全体の主な路線を決めるものになる。また、ソ連共産党の規約も改正されよう。

モスクワのきょうと明日

——世界大都市サミットでのプロムイスロフ・モスクワ市長の報告から



世界大都市サミットの会場
（写真提供＝東京都）

5月20日から22日まで東京都の主催で「世界大都市サミット会議——TOKYO'85」が開催された。世界五大陸の主要都市の首長が一堂に会して都市問題を話し合い、都市間の新たな交流を図ろうというこの会議には、ソ連からウラジーミル・プロムイスロフ・モスクワ市長が出席して報告を行い、意見を交換して、他の市長たちとの交流を深めた。以下はプロムイスロフ市長が大都市サミットで行った報告の一部である。



ウラジーミル・プロムイスロフ・モスクワ市長

モスクワは面積八万七九〇〇ha、人口八六〇万。これはソ連の全人口の3%、都市人口の5%に当たる。

都市発展の弁証法は市域面積の拡大を不可避的に要求している。市域の拡大はほぼ25年ごとに、すなわち一九三五年、一九六〇年、一九八三年に行われた。しかし、市の面積の拡大を抑えようという意見も依然としてある。われわれが市域を有効に使うよう努力しており、建設密度と住民分布の密度を高く保っているのはそのためである。市の境界線であるモスクワ環状自動車道の内側では、建物面積は62%を占め、人口密度は1平方km当たり九四〇〇人、住宅面積は1平方km当たり一六万平方m、三一〇〇フラットである。

モスクワの再開発は一九七一年にソビエト政府によって承認されたマスタープランにもとづいて行われている。その実施期限は5年後に終了するが、その実施過程で、総面積六〇〇〇万平方mの住宅が建設され、これによって五〇〇万人が住宅条件を改善することができた。

モスクワにおける住宅建設の規模は膨大で、年間の総面積四〇〇万平方mに達し、これは建設の工業的方法、完全組立て工法の広範な導入によって可能になっている。住宅地域の99・9%が水道、下水、集中暖房を完備しており、97・4%がバス付きで、88%が熱湯の供給を受けている。

ほとんどすべての住宅が新しい。というのも、90%以上が戦後に建設されたもので、そのうちの70%以上は一九六〇年代以降に建設されたものだからである。

モスクワの都市建設の特徴は、総合的に建設された設備のよい住宅地域を作り出そうと努めている点にある。住宅と一緒に土木施設、公共施設、交通通信施設が作られ、サービス企業が営業する。

モスクワでは毎年、生徒数二万—二万五〇〇〇人相当の普通教育学校が19—22校建設されており、一万二〇〇〇—一万七〇〇〇人収容分の幼稚園・保育園が開設され、80—一三〇の店舗、一二〇—一三〇の公共給食企業——食堂、軽食喫茶店、レストランその他が営業に入り、二五〇〇—三〇〇〇床分の病院、約17の診療所、一連の企業、文化施設が開設されている。

モスクワの給水を一層改善するために二五〇km以上離れたスモレンスク州からモスクワまで水を運ぶ新しい水工システムが建設された。これによって市民1人あたり1日の水の平均消費基準は七三〇ℓになった。このうちの四五〇ℓが家庭用である。

この同じ期間にモスクワの下水システムの処理能力は1日三五〇万立方mから五二〇万立方mに増えた。

交通問題を解決するにあたって、われわれは公共交通、何よりもまず地下鉄のいっそうの発達と改善を目ざしている。地下鉄は年間三五億人以上の乗客を運んでいる。現在、輸送量の3%を占めているにすぎないマイカーは、将来、主としてレジャーのために使われるだろう。とはいえ、マイカーの著しい増加は、市の道路網を拡充し、駐車場や自動車の保管の問題を解決し、サービス・システムを改善することを

余儀なくしている。

市の環境保護のために一九七一—八五年だけで九億ルーブル以上が支出された。この資金で実施された諸措置によって、工業企業からの有害物質の大気中への放出を$\frac{1}{2}$—$\frac{1}{3}$に減らし、河川その他の市の内水面の状態を改善し、一連の地域で騒音の水準を低下させ、ゴミ処理工場の建設による生活廃棄物その他の廃棄物の工業的再利用を拡大することが可能になった。

モスクワの中心部には、建築記念物が多く集中している地域をカバーする保存区域が九つ設けられている。モスクワだけでも四〇〇〇以上の建築アンサンブルと一〇〇〇以上の個々の物件が国家によって保存されている。

二〇一〇年までを見込んだモスクワ市発展新マスタープランの技術・経済的基礎の作成が一九八四年に完了した。二〇一〇年までのモスクワ市の発展の展望は、市の枠内だけでなく、近郊の諸地域も含め、モスクワ州とも関連させて、中央経済地区さらにはソ連全体の予想される発展を考慮して考察されている。たとえば、二〇一〇年までにモスクワ州内に衛星都市を三つ建設することが予定されている。われわれはこれらの衛星都市が現地完全雇用によって、生産力がこれ以上モスクワに集中するのを抑制できるだろうと考えている。さらに、二〇〇〇年までにモスクワのすべての世帯に快適なフラットを保障し、居住面積の基準を1人当たり21平方mに、二〇一〇年までには22・5平方mに引き上げるという課題が立てられている。そのために、総面積八三〇〇万平方mの住宅を建設し、さらに既存の住宅を大幅に改修することが予定されている。

一九九五年までに就学前児童施設、病院・診療所に対する住民の需要は完全に満たされるが、すでに現在モスクワは、住民数に対する医者と中級医療要員の比率が世界一高く、モスクワ市民一〇〇〇人当たり医者は10人、中級医療要員は18人である。

全種類の交通機関のいっそうの発展が見込まれており、家庭から職場、家庭から商業の中心地や行楽地までの平均所要時間が短縮される。

地下鉄の新路線の完成が予定されている。地下鉄の乗客輸送量は増大し、年間五〇億人になろう。

市電やトロリーバスなど電気交通機関網の発達テンポも速まるだろう。

モスクワを通過する交通量を減らすため市の周辺に鉄道と自動車道の遠距離迂回路線を完成させることが予定されている。

モスクワの給水事情をもっとよくするために、一九八八年には新給水源が営業を開始する予定だし、工業企業内の廃水再利用の水循環システムの発達も含め、水の浪費を最大限削減するための手段が講じられる。

この期間、環境保護には特別な意義が与えられる。

保健衛生上有害で、市にとってさほど重要でない工場の市内からの撤去が継続され、90%まで天然ガスを導入することによって燃料＝エネルギー・バランスを改善する。すべての企業で有毒廃棄物が削減され、産業廃棄物の出ない生産サイクルが作られている。企業の周囲には騒音、振動、電磁気放射を低下させるために保健ゾーンが設けられ、交通騒音の低下を考えた都市計画上の方策が取られるようになる。

予定の諸課題の実現を約束する投資額は、モスクワ市の国民経済の社会・経済発展計画に応じて決められる。一九九一—二〇一〇年のおおよその投資額は約一四〇〇〇億ルーブルである。

催し物のお知らせ

☆第4回日ソ「不戦の誓い」代表団員募集

期間：1985年8月9—19日（11日間）
訪問都市：モスクワ・レニングラード・キエフ・オデッサ・ハバロフスク
参加人員：170名（うちヤルタ・コースは40名）
申込締切：1985年6月30日
費用：340,000円（ただしヤルタ・コースは15日間で375,000円）
企画・申し込み先：第4回日ソ「不戦の誓い」実行委員会（東京都千代田区麴町2－3、麴町ガーデンビル4F、日ソ親善協会内 電話03・261・4897、03・263・0767）

☆第14回全国ロシア語コンクール

▽7月7日（日）午後1～4時
▽東京・日ソ学院（東京都世田谷区経堂1－11－2）
▽優勝者は2週間のソ連旅行に招待。入賞者には賞品、参加者全員に記念品を贈呈。
▽審査はロシア語スピーチ（テーマは自由、5分以内）および審査員との質疑応答。
▽申し込み締め切りは6月22日。所定のスピーチ原稿に参加費1,000円を添えて申し込む。
▽主催　日ソ協会、日ソ学院
▽後援　在日ソ連大使館、井上満・ちとせ記念館、ナウカ株式会社
▽申し込み・問い合わせは、コンクールの事務局（電話03・429・8239）へ。
※当日の傍聴は自由。

☆ボリショイ劇場バレエ学校特別公演

東京・東京文化会館（7月17、18、19、20、21、22日）、筑波科学万博会場（7月26日）、長野・県民文化会館（7月28日）、群馬・県民会館（7月29日）、宮城・県民会館（7月31日）、宇都宮市文化会館（予定、8月1日）、大阪・フェスティバルホール（8月3、4日）、名古屋市民会館（8月6、7日）、福岡・サンパレス（8月9、10日）、広島・郵便貯金ホール（8月12日）、松山市民会館（8月15日）、東京・NHKホール（8月18日）。
▽電話予約・お問い合わせは、エミー・インターナショナル（電話03・234・7207）／東京労音（電話03・265・6361）へ。

“地球は人類共通の家”

——クバソフ宇宙飛行士に聞く



ソ連の宇宙飛行士ワレリー・クバソフ（50歳）は、去る5月15日から25日までつくば万博見学のため来日した。V・デヴーリン本誌記者がクバソフ宇宙飛行士にインタビューして、読者に代わって幾つかの質問に答えてもらった。

——日本では他の国々、とくに米国の宇宙開発に大きな関心が寄せられており、最近では米国のスペースシャトル計画の実現に衆目が集まっている。ソ連ではシャトル型の宇宙船の開発はどうなっているか？

何回も繰り返し回収して使うシャトル型宇宙船の第一の用途は、シャトルに貨物と人員をのせて軌道に運び、またその逆に宇宙から貨物と人員を地球に運ぶことだ。ソ連の「ソユーズT」と「プログレス」も同じ目的に使われている。「シャトル」は1回切りしか使えない輸送船、貨物船の代用として考案されたものだが、運搬費が見積り額をはるかにオーバーし、高くついている。「シャトル」にのせて軌道に打ち上げた貨物1kgのコストが「ソユーズ」や「プログレス」で運ぶよりも少しも安くあがらない以上、今のところ「シャトル」への切り替えは適切ではない。

われわれも何回も繰り返し使う有人輸送船を開発する方向で作業しているが、「シャトル」計画が唯一のもので最も成功したものだとは、全然思っていない。

——ソ連で宇宙飛行士になるには、どういう条件が必要か？　ソ連の宇宙飛行士はどのように養成されているか？

宇宙飛行士に選ばれるには、まず本人の希望と丈夫な体がなければならない。また当然大学教育を修了していなければならない。これが宇宙飛行士要員に対する最低の共通条件であり、それから先はいわゆる分業となる。

いまわれわれは宇宙の専門を二つに分けている。船長、フライトエンジニアの本職の宇宙飛行士と、医師、生物学者、物理学者など飛行計画に応じた専門家から成る調査観測担当宇宙飛行士の二種類だ。

前者はかなり長期間（数年）かけて養成されるが、後者はふつう1年以内で養成される。

——そう遠くない将来に史上初めて日本人が宇宙へ飛ぶことになりそうだが、ソ連の宇宙開発の過程でどのように国際協力が進められてきたか？

現在までに世界の12カ国の代表（うち9名はソ連の宇宙船で打ち上げられた）が、すでに宇宙飛行をした。9名は多くの社会主義諸国の代表とフランス、インドの宇宙飛行士である。宇宙開発で協力し、相互援助をするというわれわれの路線は、不変で一貫している。ついでながら私個人は2回国際飛行に参加しており、一九七五年にソユーズ・アポロ計画（ソ連―米国）で飛び、一九八〇年にはハンガリーの宇宙飛行士と一緒に飛んだ。私は合計3回飛んでいるが、初回は一九六九年ソユーズ6号で飛んだ。

——宇宙飛行をしてからあなたの考えは変わったか？

幾らか変わった。われわれの青い惑星——地球が、ほんとうのところ小さく、無防備であることは、宇宙から見てはじめてわかった。宇宙飛行をした人々は、地球に対して何か特別のよい感じをもつ。私に言わせればこれは全宇宙飛行士に共通した特徴である。われわれの共通の家地球の平和と運命を左右するのはわれわれであり、地球に住む人々であることを、また自分の住む家を大事にしなければならないことを、認識するためには、わざわざ宇宙飛行をする必要など全然ない。

貴誌の読者の皆さんの平和と幸せを望んでやまない。

なぜ新しい暴飲対策がとられたか

——E・ババヤン・ソ連保健省局長に聞く

6月1日から「暴飲対策の強化について」のソ連最高会議幹部会令が発効した。幹部会令の採択に先立って、各労働集団でこの問題が広く論議され、集団は社会主義的モラルの基準に反するこの現象の有効な根絶措置をとるよう、現地および中央の権力機関に要請した。勤労者の要請はソ連共産党中央委員会とソ連政府によって検討され、特別決定が採択された。

エレオノラ・ゴルブノワ本誌記者はエドゥアルド・ババヤン・ソ連保健省局長・麻薬取締常設委員会議長にインタビューして、こんどの決定についてコメントしてもらった。

これまでにも悪習、とくに暴飲の追放をねらった措置はたびたびとられてきた。反アルコール・キャンペーンはずっと以前から実施されており、比較的最近まではアルコール飲料の乱用防止、患者の発見と治療に重点をおいてきたが、いまはアルコール飲料の使用そのものを激減させることが課題になっている。これは当然ながら前よりも難しい社会的、心理的問題である。

——ではこの問題を解決するためにどのような措置がとられているか？

こんどの決定の特徴は、総合的な対策をとったことだ。つまり各市民の個人的責任や労働集団、企業・省庁の指導者の責任を強化するとともに、暴飲対策に社会全体の力を動員していることである。

とくにこのために、酔った状態で公共の場所に現れた場合や職場でアルコール飲料を乱用した場合の行政処分、罰金が、前よりも厳しくなっている。しかもこういう場合の罰金は、酒盛りに参加した本人はもちろん、暴飲に対して手ぬるい寛大な態度を見せた職務上の責任者からも徴収される。

アルコール飲料の販売規則も厳しくなり、とくに21歳未満の者へのアルコール飲料の販売が禁止され、販売時間そのものも修正されて、ウオツカ・リキュール類の販売は14時からとなる。またウオツカ・リキュール類の生産は徐々に減らされ、逆に非アルコール飲料や高級ワインの品目が増やされる。

もちろん禁止措置や行政処分その他の懲罰措置では、問題は完全に片付かない。効果的な反アルコール宣伝とか、子供のころや小学生のころからアルコールに対して免疫をもたせることも必要である。学校のカリキュラムに特別な課目を取り入れて、アルコールの害を教えるだけでなく、道徳的、公共衛生的な環境をつくることも、アルコールに対する免疫づくりに役立つだろう。

住民の休息の条件、体育活動やさまざまな種類のアマチュア芸能活動の改善に大きな関心を払うことが、極めて重要だと考える。私の30年の医療経験からはっきり分かることだが、人々は〝なにもすることがなくて退屈のあまり〟アルコール飲料を求めることが多い。さまざまな年齢層別のクラブ網の拡充、各住宅団地の近くにスポーツ施設をつくることや国から個人に貸与された土地での園芸などの措置により、住民は余暇に自分の趣味をより完全に満たすことができよう。

——あなたはソ連でアルコール依存症対策がとられるようになったのは、決して今日や昨日のことではないと言われたが、その対策は実効があったのか？

ここ数年前から重症のこじれた形のアルコール依存症の患者数は、はっきり減少傾向を示しており、国の統計数字によると、過去3年間にその数は半減した。しかしその反面麻薬・アルコール中毒予防治療施設に登録されている患者数は増えた。これは当然の成り行きといえる現象である。いまわれわれは鋭意患者を見つけ、病気がひどく進行している者だけでなく、最近アルコールを連用するようになった人々（こういう人々は今まで麻薬・アルコール中毒専門医の視野の外にあった）にも、援助の手をさしのべている。

言いかえれば、われわれの患者の範囲が変わったのであり、悪癖を直す必要を自覚した人々がわれわれのもとによく来るようになっている。暴飲を許さないという社会感情が固まるにつれて、こうした患者の数は増えるに違いない。こんどの決定はそういう社会感情を固めることをねらってもいる。当然決定では、麻薬・アルコール中毒対策部の強化、誰でも専門医に（匿名で）相談でき、精神療法その他の必要な治療を受けることができる治療室の拡充が定められている。

われわれはアルコール中毒者に対する医療・カウンセリングを住民が気軽に利用できるようにし、企業や機関の診療所数を増やさねばならない。われわれにはすでに労働集団の中で直接仕事をした経験がある。たとえばモスクワのリハチョフ自動車工場では10年以上も暴飲・アルコール依存症対策委員会が活動しており、工場の管理部、労組の代表、工場内の断酒協会の会員、工場の職業技術学校教師、医師が委員になっている。委員会の成果は、10年余りの間に労働規律や社会秩序の違反による工場の損失が$\frac{1}{4}$に減ったことである。しかしこれはもちろんアルコール抜きの新しいしきたりを築く仕事のほんの序の口にすぎない。

ノーボスチ通信
特派員報告

レバノンの安全か束縛か

E・ミキチェンコ記者（ベイルート）

イスラエル政府の約束によると、6月初めイスラエル占領軍のレバノン撤退の第3段階が終わるはずだが、すでに5月初めからイスラエルはレバノンとの国境沿いに2億ドルの予算のいわゆる防衛線の構築に着手した。これより前には軍隊の撤退、レバノン国境沿いの新軍事基地と築城施設の設置などの経費二億四〇〇〇万ドルが支出されている。イスラエルの将軍たちは、全国境線沿いに、鉄条網、レーダーおよび最新電子機器を備えた国境監視所網や幅2m以上の深い塹壕を設置することを計画している。

だが、テルアビブが南レバノンから自軍を撤退したあと取ろうとしている手段はこの〝防衛線〟の構築だけではない。幅8—10kmのいわゆる〝安全保障地帯〟なるものが全国境はもちろん、隣の主権国家の領土内まで食い込んでつくられようとしている。そして、この〝安全保障地帯〟にはレバノン国民を裏切ったアントアン・ラハド麾下の〝南レバノン軍〟が配置されることになっている。テルアビブは「イスラエルに対する敵対行動を断ち切るために」この地帯に監視パトロール隊を差し向けたり、〝監視所〟を設ける権利を保留しているという。イスラエルの占領者は将来の侵略の足がかりを用意しようとしているのである。

その指導者たちが再三いっているように、イスラエル政府には、イスラエル占領軍の撤退後レバノン・イスラエル国境に国連軍部隊を進駐させるという国連安全保障理事会の決議四二五号を実行するつもりは全然ない。

記者がこの数日来話を交わした当地の報道機関の記者たちは口をそろえて、テルアビブは南レバノンの社会的経済的下部構造を変えてイスラエルの領地に変えようとしているのだ、と指摘している。

パニックに陥った人種差別主義者

A・ジグノフ記者（ダルエスサラーム）

クロスローズ、マゴパ、ドロフォンタイン、オンファバンド…南アフリカ共和国にあるこういう町や村の名は、多くの人にとって別に何の意味もないのだが、何百万ものアフリカ人からは人種差別・隔離（アパルトヘイト）反対闘争のシンボルと見られている。どれもいわゆる〝ホワイトゾーン〟内にあるから、〝不法居住地〟として取りこわされ、居住者はバンツースタンと呼ばれる特別隔離居留地へ移されるが、南アフリカの政府系新聞も認めているとおり、この居留地には最低の生活条件もない。第一、水が足りないから工業はおろか農業もひどくむずかしく、ソウェタン紙が認めているように飢え死にするしかないのだ。

だが、アフリカ人は屈していない。非人間的な人種隔離政策に抗議するデモは止む気配もない。一連の抗議行動を組織したのは、南アフリカに多人種が共存する民主的社会をつくることを提唱する非合法組織アフリカ民族会議（ANC）だ。政治亡命をしているANCのメンバーが国内に入ってくるのをなんとかして防ぐために、マラン国防相が議会で言明したように、ジンバブエとの国境沿いに試験的に二万ボルトの高圧電流を流した鉄条網付きの壁が数kmにわたって設けられた。国防相の言葉によると、南アフリカの「人種の平和」の強化を助けるために、同じような壁がアフリカ諸国に隣り合った全国境線沿いに将来できあがるのだという。

プレトリアでは、アフリカ人に対する法律の「否定的な人種差別的な面」が廃止されると言っているが、人種差別的法律は一つもまだ廃止されてはいない。

ANCのオリバー・タムボ議長は本誌の特派員に「人種差別主義者が恐慌状態に陥っていて事態を収拾する力を失っている、というのがわれわれの結論だ」と語った。

意外なめぐり合い

Y・スミルノフ記者（ハバナ）

「失礼ですが…」　あまり背の高くないキューバ人が記者たちに声をかけてきた。「ロシア語を聞いたら、つい我慢できなくなって……私、アルノルフォ・ゴンザレスです」と、にこにこ片手を伸ばしてきた。「お国で学んだ者です。あれから10年たちましたが、当時のことは忘れられませんよ」

知り合いになってみると、アルノルフォは一九七五年にキエフの民間航空大学を卒業したことが分かった。同じくソ連に留学した3人の同郷人と生まれ故郷のサンクチ・スピリッツに帰り。当時キューバでさかんになりだした農業航空の分野で働くようになった。

「留学中にお国の学生は実によく助けてくれました。私たちより大して年上ではなかったのに、もうたいへんな経験の持ち主ばかりでしたね。

留学中にいろいろ教わりましたが、帰国してからもキューバにいるソ連の専門家にたくさん学びました。ソ連に留学したキューバ人を代表してソ連の私心のない援助と兄弟のような愛情にお礼を言わせてください……」

こう言うと、アルノルフォは記者たちの手を固く握って、現れたときと同じく忽然と姿を消した。

最初は変わった出会いのような気がしたが、キューバで少し仕事をしてみて、ソ連とキューバ両国民を結びつけているきずなの太さと多面性が分かってくると、これしきの出会いは別に意外ではないという気がしてきた。

ソ連の新聞記事から

（一九八五年5月後半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委政治局は定例会議で、一九八六—九〇年および二〇〇〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向案を審議した。

会議では国民経済の主要課題を規定するこの文書をソ連共産党第27回大会に向けて準備することの特別の意義が強調された。これら国民経済の主要課題に基づいて第12次5カ年計画の諸計画が策定され、より長期間のソビエト社会の経済・社会発展の最重要の方向が決定される。基本方向案によって予定されるのは、国民経済全部門の発展テンポの上昇、生産集約化プロセスの強化と科学技術進歩の促進、国の経済力と防衛力の強化である。ソビエト人の生活のあらゆる面をカバーする広範な社会計画が予定されている。ソ連と兄弟社会主義諸国との協力が、特に科学技術進歩、分業と協業化の分野で一層発展する。

政治局は、M・S・ゴルバチョフ、その他のソ連の指導者たちとソ連を公式友好訪問したラジブ・ガンジー・インド共和国首相との会談の結果を審議し、承認した。政治局会議では、ソ印間の平和・友好・協力条約に基づいて、両国民の利益のために、アジアと全世界の平和と国際安全の強化のために、両国間の伝統的友好関係の一層の発展を促進しようとのソ連指導部の確固たる意向がいま一度表明された。

独立・民主オーストリア回復国家条約30周年記念行事出席のためウィーン訪問中に行ったオーストリアの政治家たち、一連の国の外相との会談に関するA・A・グロムイコ同志の報告が聴取された。政治局は行われた会談の結果を承認して、世界情勢の最も緊要な問題、何よりもまず宇宙の軍事化防止、核軍備競争中止のような緊要な問題に関して諸国間の積極的な対話を続けることの重要な意義を指摘した。ソ連の意見によれば、すべての国は——大国も小国も——これらの課題の解決を促進するような努力を実際に行い、どんな場合でも、国際情勢の健全化を妨げ、戦略的安定の破壊をもたらすような行為を差し控えるべきである。

ソ連共産党中央委政治局会議は、ソ連とキューバ間の外交関係復活25周年の祝賀へのソ連代表団の参加に関するM・S・ソロメンツェフ同志の報告を聴取した。ソ連共産党とソビエト国家のその他若干の内外政策問題も審議された。

（プラウダ紙5月25日号）

二〇〇五年のレニングラード

紀元二〇〇五年までのレニングラード市とレニングラード州の発展総合計画の技術・経済的基礎が承認された。

今回初めて都市と州の単一発展総合計画が作成された。有害な生産をする企業をレニングラードから移転させることが予定されている。

予定期間中に総面積五〇〇〇万平方mの住宅建設が計画されている。既存建築物の改築のさいには歴史的・文化的価値のある建物の修復と保存に特別の注意が払われる。大祖国戦争時代のレニングラードの英雄的防衛を物語るスラーワ（名誉）緑地帯が最終的に完成する。

地下鉄の一層の発展、市街鉄道の高速路線の建設、道路の立体交差が予定されている。市内交通用に鉄道幹線を利用するという提案は興味深い。

（イズベスチヤ紙5月20日号）

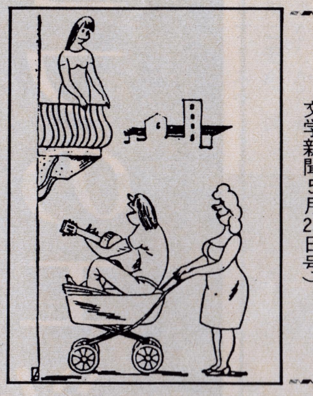
青年祭の入念な準備

まもなくモスクワは第12回世界青年学生祭の何万という参加者と来賓を迎える。約三五〇〇人のレストランの給仕長、給仕、理髪師、ホテルの玄関番がまもなく講習を終える。彼らの多くは英語、フランス語、ドイツ語を熱心に勉強中。

各国代表団の民族料理の特徴を考慮した〝祭典メニュー〟が作成された。36のレストランと喫茶店が同時に一万二〇〇〇人以上にサービスできる。

モスクワとその名所旧跡、博物館、新しい建設を見たいという外国からの参加者の希望を入れてモスクワ祭典の文化プログラムが作成された。数百人のガイド通訳がこの人たちの案内を担当する。

（プラウダ紙5月24日号）



（A・オレホフ作、文学新聞5月22日号）

青年祭の記念硬貨

モスクワで開催される第12回世界青年学生祭を記念して、額面1ルーブルの硬貨が6月25日に発行される。

（プラウダ紙5月24日号）

デミヤン・ウテンコフのエッチング

芸術学者　ワレリー・クリョノフ



『私と妻とネコ』、1972年、銅板エッチング

モスクワに住む美術家デミヤン・ウテンコフ（37歳）の作品には、必ず自然が描かれているが、彼は自然を周囲と切り離して見るのではなく、自然と積極的に触れ合って、美を受容し、反映しようとする。彼は自然と文明は調和よく結合できると信じてやまない。

シベリアの豊かさと壮大な美は、人々の想像を絶するものであり、人々を引きつけて離さない。だから10年前ウテンコフがはじめてシベリアに足を踏み入れたとき、かつてニコライ・リョーリフ（レーリフ）がヒマラヤに魅せられ、ロックウェル・ケントがグリーンランドの氷河と雪に魅せられたように、永久にシベリアの美のとりこになってしまった。

ウテンコフの初期の作品（当時は油彩）がモスクワの美術展に出展されたのは、彼が16歳のときだった。一九六〇年代末モスクワの舞台美術学校の舞台小道具制作科とテレビの美術監督コースを終えた後、エッチング技法を試み、エッチングは彼の美術歴で決定的役割を果たすことになった。こうして彼の極めてねばり強い独習と先輩の作品研究の年月が始まり、彼は技法を思いのままに駆使し、エッチングの最高峰をきわめようと努める。

ちょうどそんなときウテンコフはツングース隕石学術調査隊と一緒にシベリアへ行く機会に恵まれ、その後も数十回、隕石調査隊に同行し、ソ連科学アカデミー付属天文・測地学会会員となった。彼がツングースの〝宇宙からの来訪者〟のなぞ解きをしている人々の一人かどうか私は知らないが、彼のエッチングはシベリア行きの成果であり、意見である。

ウテンコフにとって隕石は、自然に対する破壊的態度を表す陰喩と言うべきものである。われわれ人間自身は、時には隕石よりももっと危険な〝来訪者〟になるおそれがある。しかしウテンコフの作品からは、未来に対する不安だけでなく、人々の英知への信頼もうかがわれる。自然は人間生活の一部で、人間は自然の一部であって、すべてが固く互いに結びついている。高度のグラフィックの技術、細部に対する関心、われわれが時々気付かないものを「拡大して」見せることによって、ウテンコフは自然と人間の相互の結びつきを伝え、結びつきの複雑さ、もろさを分からせている。この凝視こそが、彼の作品に一種のレアリスチックな空想の性格を持たせている。

沢山の蔵書、古代ロシアの調度品、鉱物のコレクションがやっとどうにか収まっているウテンコフのモスクワの住居は、生活が特別な法則に



『月明かり』、一九七三年、銅板エッチング



『ツングースの隕石』、一九七七年、銅板エッチング



『一つの全一的なもの』、1974年、鋼板エッチング



『乾いた木のふくろう』、一九七七年、鋼板エッチング、鏡



▲『エベンキアの思い出』、1982年、鏡



◀『原生林の中の道』、1973年、鋼板エッチング

従って進行している。各部屋にはありとあらゆる花が咲き、鳥がさえずり、ネコがぶらつき、そして大水槽には小さい魚の群が泳いでいる。

ウテンコフは憂うつそうな口調で「都市にいて一日のうちに生きた自然の何か未知の部分を見ないと、病人みたいになる」と告白する。おそらくこの瞬間彼の脳裏にはシベリアの原生林の原始の美が浮かび、2カ月ばかり再びヤクーチアに行ってみようという気持ちがわいてきたのではなかろうか?

シベリアへ行ってウテンコフは、伐採場で木の枝を払い、土地に穴を掘るなどいろんなことをした。だから周りの人々は、彼が美術家で、トレチャコフ美術館やプーシキン美術館に作品があり、全ソ美術展に何度も出展し、フランス、米国などでも展示されたことがある経歴の持ち主だとは露知らないことがままあった。

ある人々はウテンコフを原生林の世界にひとり住む隠者であるかのように見ているが、私はそうは見たくない。むしろその逆だと言いたいほどである。彼が描く人物は建設者、猟師、地質技師、木材伐採夫、技師と学者、つまり現在のシベリアに住み、シベリアを変革しつつある人々である。そして広大で厳しいシベリアの大地は、彼らの精神的、肉体的志向、意欲を完全に解き明かすための格好の背景なのである。

日本向けモスクワ放送を聴きましょう！

日本向けモスクワ放送番組表

曜日＼時間	7.00―7.30	18.30―19.00	19.00―20.00	20.00―21.00	21.00―22.00	23.00―24.00
日	ニュース ラジオジャーナル 今日の話題	ニュース ソ連の生活から	ニュース 時事解説 ♪メロディーとリズムと歌	ニュース 時事解説 ソ連の生活から	ニュース 週間ラジオ展望 ●聴取者からの手紙	ニュース 週間ラジオ展望 ●聴取者からの手紙
月	ニュース 週間ラジオ展望	ニュース ソ連の生活から	ニュース 平和と軍縮 ♪音楽番組	ニュース 平和と軍縮 ソ連の生活から	ニュース 今日の話題 ▶友好と善隣	ニュース 今日の話題 ▶友好と善隣
火	ニュース、ラジオジャーナル「今日の話題」	ニュース 国際共産主義運動・労働運動(隔週)	ニュース ロシア語講座 ♪現代ソビエト音楽	ニュース 時事解説 国際共産主義運動・労働運動(隔週)	ニュース 今日の話題 ソビエトの科学と技術	ニュース 今日の話題 ソビエト文化
水		ニュース シベリアめぐり	ニュース 時事解説 ♪クラシック音楽 社会主義共同体の生活	ニュース 時事解説 シベリアめぐり 社会主義共同体の生活	ニュース 今日の話題 ソビエト文化	ニュース 今日の話題 スポーツ
木		ニュース ●お返事の時間	ニュース 時事解説 ♪ロシア民族音楽	ニュース 時事解説 ●お返事の時間	ニュース 今日の話題 ロシア語講座	ニュース 今日の話題 ソビエトのパノラマ
金		ニュース 青年放送「灯台」	ニュース 時事解説 ♪ソ連諸民族のメロディー	ニュース 時事解説 青年放送「灯台」	ニュース 今日の話題 ソビエトのパノラマ	ニュース 今日の話題 ソビエトの科学と技術
土		ニュース 時事解説 ラジオ懇談会	ニュース 時事解説 ♪音楽番組	ニュース ソビエト極東だより	ニュース 今日の話題 ♪リクエスト音楽	ニュース 今日の話題

＊毎月末日の23.00から――ニュース，今日の話題につづいて♪「今月のベスト10」

日本向けモスクワ放送の周波数（時間帯は上の表と共通）

周波帯域（メータバンド）	周波数（メガヘルツ） A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
16			17.88	17.88	17.88	17.88	17.88	17.88				
19			15.24		15.24		15.24					
25	11.73	11.73							11.73	11.73	11.73	11.73
			11.91	11.91	11.91	11.91	11.91	11.91				
			12.03	12.03	12.03	12.03	12.03	12.03				
31				9.50		9.50		9.50				
	9.52											
			9.54	9.54	9.54	9.54	9.54	9.54				
									（21時30分から）			
	9.56	9.56							9.56	9.56	9.56	9.56
											9.79	
									9.86		9.86	
41										7.22		7.22
		7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24
												7.28
240	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25
417	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72
476			0.63	0.63			0.63	0.63	0.63	0.63	0.63	0.63

※ Aは1985年8月31日まで、Bは9月1日から

今日のソ連邦
一九八五年7月1日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3―9―13・電話03・447・3536）
定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）